
【転生】アルカ・ゾルディックのブラザーコンプレックス

69097

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【転生】アルカ・ゾルディックのブラザーコンプレックス

【コード】

N1948M

【作者名】

69097

【あらすじ】

【能力】ベクトル操作の念能力 【原作者】偉大なる富樫義博さん 【あらすじ】暗殺一家の第四子であるアルカに生まれ変わった転生者は、家出した兄のキルアをサポートするために、共にハンター試験を受け、ゴンをゾルディック家に招き入れ、天空闘技場へ先回りして念の師匠と交渉し、幻影旅団の団長の前に放り出され、2度目のハンター試験では兄のストーリーカーと化していた。

3時間で分かる【転生】アルカ・ゾルディック

あいつのこと？ うん、知ってる。 話せば長い。 そう、古い話だから。

知ってる？ ゾルディック家には子供が3人いる。

イルミ・ゾルディック、キルア・ゾルディック、カルト・ゾルディック。

この3人。 あいつは・・・、

PROJECT ARUKA

彼は暗殺者。

”彼”の相棒だった男。

<よお、カルト。 いい眺めだと思わないか？>

<ここから見れば、どの生物も大して変わらない>

<馬鹿と煙は高い所が好きだから>

あれは雪の降る寒い日だった。

<ハンター試験で大規模な戦闘！>

<正気か？ どの試験官だ！>

<アルカへ>

<撤退は許可できない>

<だろうな>

<とりあえずイツ君から片付けよう>

<こちらレオリオ>

<可能な限り援護する>

<落ちるなら俺の見えない所で頼む>

ゾルディック家には謎が多い。

誰もが正義となり、誰もが悪となる。
そして誰が被害者で、誰が加害者か。
一体”平和”とは何か。

<またアルカが死んだ>

<死体を回収して、さっさと蘇らせる>

<ゾルディック家で御目覚めだ>

<これで何回目だ>

<幻影旅団だ！ 油断すんな>

<旅団がなんだ。俺がやってやる！>

暗殺にルールは無い。ただ敵を殺すだけ。
この戦いは、どちらか死ぬまで終わらない。

<受け入れる小僧>

<これが戦争だ>

<キメラアントが！>

<来いよ、臆病者！>

交戦規定は唯一つ。

<死なないで、アルカ>
生き残れ。

<よお、カルト。 まだ生きてるか？>

3時間で分かる【転生】アルカ・ソルディック（後書き）

元ネタ『エースコンバットZERO』オープニング

もっともおーと【転生】アルカ・ゾルディック（前書き）

こちらは”3時間で分かる【転生】アルカ・ゾルディック”を再構成したものです。

初めての方は、こっちを読んでください。

もっともおーと【転生】アルカ・ゾルディック

オレは殺す。

何も考えることが出来ないまま。

オレは抜け殻になっている。

P R O J E C T A R U K A

<アルカが動いた>

ゾルディック家当主より第一子に命令。

キルア・ゾルディックの記憶を一部封印する。

<ふざけるな！>

<聞け！>

<目覚める前に処置を施す・・・>

A L O S T

<全て片付けなさい>

<なに一つ残らないように>

逃げなさい。

一刻も早く、この家から。

”彼”が生まれてしまったのです。

<アルカとカルトを天空闘技場へ>

<予定を前倒しにする>

<おねがい>

<何だこれは？>

<着グルミ！？>

<行くぜエ！ ボン太くん！>

取り戻せ。

愛する者を。

戦う理由を。

<よオ、カルト君>

<アルカ、聞こえる？>

<ボクには隠している事がある>

<ちょっと行つてくるぜエ>

<それを伝えなくちゃいけないんだ>

必ず帰ろう。

<悪リイが、こつから先は一方通行だ>

<侵入は禁止つてなア！>

もっともおーと【転生】アルカ・ソルディック（後書き）

元ネタ『エースコンバット6』オープニング

7年前 アルカ再誕（前書き）

1 作目

7年前 アルカ再誕

観光客

パドキア共和国デントラ地区。

木々に囲まれた山の名はククルーマウンテン。

夕日に照らされつつ、そこへ観光バスが向かっていた。

観光バスの最後尾。

その座席の端に、2人の観光客が座っていた。

一方は紐で首にカメラを吊るし、もう一方は何度も横目で周囲を見回している。

勧告客の周囲。

そこには拳法着を着たヒトや、金属製のアーマーを着たヒトがいた。明らかに観光という雰囲気ではなく、窓から逃げ出したくなるほど居心地が悪い。

「なあ、これ観光バスだよな？　なんで、こんなに暑苦しいんだ？

今すぐバトルロワイヤルが始まりそうな雰囲気だぞ？」

「落ち着け、静かにしろ。」

「そうしていれば、俺達に害は及ばないはずだ」

怯える観光客。

それに対して、カメラを持った観光客が冷静に答える。

しかし、その体からは汗が噴き出し、汗を吸った服が湿気っていた。

「お前にホイホイ付いていた俺がバカだった。

なんで俺は、あの時、バスガイドさんに釣られちゃったんだ……

！」

「おい、俺は ” 付いてくるな ” って言ったよな？
勝手に付いて来たくせに、何言ってるんだ、この野郎」

2人の観光客が殺気を当て合う。

しかし、近くの乗客に睨まれ、2人の殺気は消し飛んだ。

黙ったまま何度も頭を下げ、殺気混じりの視線が外されるのを待つ。

「それで、一言で言うと、どうしてこうなった？」

「このバスの目的地が、普通の観光地じゃないからだ」

「はい、皆さん。」

あちらに見えますのが、暗殺一家ゾルディック家の正門です」

バスガイドの声が車内に響く。

眠っていた乗客が、その声で目覚めた。

観光客2人は背を伸ばし、正面に見える門を見る。

乗客の頭越しに見える門。

それはビルのように高い壁の下側に付いていた。

ククルーマウンテンを取り囲む壁に、バスが通れるほどの大きさの扉が付いている。

(ヒトがいる？)

壁に付いた扉。

その隣で足場が組まれ、数人のヒトが作業を行っていた。

ビルのような高さまで足場が組まれ、壁の一部を壊している。

「噂は本当だったのか。」

俺は……運が良い……！」

カメラを持った観光客が呟く。
それに対して、もう一方の観光客は頭の上にハテナマークを浮かべる。

カメラの観光客を見ると、首に吊るしたカメラを握り、微かに笑みを浮かべていた。

観光客は辺りを見回す。

すると、他の乗客の様子も変わっていた。

工事中の壁を見つめ、足下に置いたトランクから銃を取り出すヒトまでいる。

「何が何だか、さっぱり分からん」

観光客は呟く。

バスの中では誰も喋っておらず、物音しか聞こえない。

そのため、観光客の声は前方にいるバスガイドの耳に届いた。

（どいつもこいつも賞金稼ぎばかりだと思っていたら、あんな所に一般人が！

ついに私の出番が来たのね！）

「ゾルディック家とは殺し屋を生業とする一家です。

正面に見える山、ククルーマウンテンの何処かに、その屋敷があるとされています。

しかし、見ての通り、山は高い壁に囲まれ、外部と隔離されています。

そのため、一家の姿を見た者はおらず、幻の暗殺一家と呼ばれています」

「だが、今、その壁には大きな穴が開いている」

バスガイドの解説。

賞金稼ぎが発言し、それを遮る。

せつかくの解説を遮られたバスガイドは、悔しそうに「うー！」と唸った。

「あれだけ大きな穴が開いていれば、簡単に侵入できるだろう」

「幻の暗殺一家とやらも、今日で終わりだな」

賞金稼ぎの笑い声。

それが観光客の耳に届き、再びバスに静けさが戻る。

観光客が横目でカメラの観光客を見ると、さつきと変わらず、カメラを両手で握っていた。

「つまり、観光バスに乗っている観光客は、お前と俺だけってことか」

「ああ、他の乗客は賞金稼ぎだろう」

鉄壁の城壁に穴が開いている間に、ゾルディック家を殺っちまおうってことだ」

「それで、お前は、その様子を撮りに来たと？」

観光客2人の会話。

それを賞金稼ぎが聞き、後ろを振り返る。

そして、カメラを持った観光客にナイフを突き出した。

「騒ぎに乗じて、ゾルディック家の顔写真を盗み撮ろうってか？

そりゃあ、高く売れるだろうな。

殺した後の顔とセットなら10億行くかもしれねえよな。

おい、ガキ。 カメラを寄越せ。 俺が撮ってやる」

震える手でカメラを渡す。
すると、ナイフは引かれ、カメラは賞金稼ぎの手に渡った。
賞金稼ぎは興味はカメラに移り、カメラを取られた観光客は息を吐く。

「まあ、なんだ、その……すまん」

「ああ」

気の無い声が返る。

カメラを持っていた観光客は窓の外を見ていた。
謝る観光客や賞金稼ぎに顔を見せないようにしつつ、なぜか笑みを浮かべる。

「はい、皆さん。

ゾルディック家正門前に到着しました。

通路で混雑しないように、前の方から順番に下りてください」

賞金稼ぎ達が通路に並ぶ。

さきほどのカメラを奪い取った賞金稼ぎも、ちゃんと並んでいた。
その光景を見て観光客は笑いそうなるが、再びナイフで脅されないためにも我慢する。

観光客2人は最後にバスを降りる。

すると、壁に沿って組まれていた足場が崩れた。

金属の当たる音と共に、足場から落ちた金属の先端が地面に突き刺さる。

崩れた足場の下。

そこではアーマーを着た賞金稼ぎが暴れていた。工事に使われていた金属の棒を振り回して、足場を崩している。

崩れる足場の上。

そこでは逃げ遅れた作業員が宙に放り出されていた。

しかし、黒い服を着たヒトに受け止められ、傷を負うことなく作業員は地面に下りる。

「なあ、人間って、あんなに高い場所から、ヒトを抱えて落ちても平気なんだな」

「じゃあ、やってみるか。今度、学校の屋上から飛び降りてみるよ」

「それは無理だな。最近の自殺事件のせいで、屋上が立ち入り禁止になってる。

それに、よく考えたら俺は貧弱一般人だ。あんな高さから落ちたら死ぬ」

「そうだろうな。貧弱一般人じゃなくても死ぬだろう。常識的に考えて」

正門の側にある小屋。

そこへ作業員は逃げ込み、黒服のヒトは崩れた足場の上に立つ。

その黒服は鉄パイプのような物を拾い上げ、賞金稼ぎと向き合った。

「ここから先はゾルディック家の私有地です。

許可なく立ち入るのならば、実力で排除します」

足場に使われていた金属の板。

それを黒服は片手で持ち上げ、賞金稼ぎ達に向かって投げた。

しかし、アーマーを着た賞金稼ぎが持っていた金属の棒で迎え撃つ。

金属の衝突する音。

それが鳴り響き、賞金稼ぎの手から金属の棒が弾け飛ぶ。それと同時に、板を追走していた黒服によってアーマーの隙間にパイプが差し込まれた。

血の付いた鉄パイプが引き抜かれる。

アーマーを着た賞金稼ぎは首を押さえながら地面に倒れる。その時、バスの側に立っていた観光客の耳に微かな電子音が聞こえた。

観光客は隣を見る。

しかし、もう一方の観光客の姿は見当たらず、観光客は辺りを見回す。

すると、いつのまにか正門前から避難していたバスガイドが上を指差した。

観光客の頭上、バスの屋根。

そこで、もう一方の観光客がコンパクトカメラを構えている。うつ伏せになって写真のブレを抑え、シャッターボタンに指を添えていた。

「　　って、カメラ持ってんじゃん！　謝り損かよ！」

バスの屋根に向かって叫ぶ。

しかし、返事の代わりに、シャッター音が返ってきた。観光客はバスの中に入り、窓から屋根に上ろうと試みる。

「今日は良く晴れてましたから」

「熱う！　手が、手が焼ける！」

「屋根に触ると熱いですよ」

目で焼けた屋根。

それを知らず触れた観光客の手は、赤く焼けてしまう。
バスガイドが観光客に注意したものの、間に合っていなかった。

「おい、ゴルア！ そのカメラ、どこに隠し持ってやがった！」

「上着の内ポケットに決まってるだろ。」

あんな張りぼてカメラに騙される方が悪い」

「偽装レベル高すぎだろ！ 全然分かんねえよ！」

「俺は撮影で忙しいんだ。 ちよつと黙ってる」

シャッターを押す観光客。

その体からは煙が上がり、服が焦げつつあった。

しかし、そんな事は気にせず、黒服と集金稼ぎの戦いを撮影する。

「そういえば、自殺事件の時も死体を撮影してたっけ。

あれだけ怒られたのに、全然懲りてないのな」

「別に良いだろう。 死んでるのは賞金稼ぎなんだし。」

しかし、意外だな。 あの黒服、全員倒してしまいそうな勢
いだぞ」

ゾルディック家正門前。

そこでは、鉄パイプで殴られた賞金稼ぎが宙を飛んでいた。

背骨が折れたり、内臓が破裂しているためか、変な方向に体が曲が
っている。

黒服を無視して進む賞金稼ぎ。

しかし、壁を越えると黒服が駆けつけ、外へ殴り飛ばす。その隙を見て賞金稼ぎが銃で狙い撃ったものの、黒服の体を掠るだけで終わる。

叩く、叩く、叩く。

なぜか黒服は鉄パイプだけで攻撃し、手足を使わない。それなのに、襲い掛かる賞金稼ぎを、黒服は次々と倒していく。

「そろそろ出発しましょうか」

「そうですね。バスが血で汚れたら大変ですからね」

運転手とバスガイドが話し合う。

それを聞いた観光客2人は、慌ててバスへ入った。

そのまま賞金稼ぎを置いて行くのかと思いきや、バスガイドはマイクを手に取る。

『皆さん、出発します。バスにお戻りください』

怪我を負った賞金稼ぎ。

それらがバスに戻り始め、それを運転手は待つ。

しかし、急にバスが発進し、賞金稼ぎは避け切れず、大きなタイヤに巻き込まれた。

大きなカメラを持った男が1人。

バスのタイヤに足を潰され、地面に転がる。

持っていた大きなカメラを放り出し、必死で地面を掻いていた。

「おおっと、失敗失敗」

「ちよつとお！ 何やってるんですか！

今、明らかに、わざと轢き殺しましたよね？」

「フッフ、いや実は私こういうのが好きで。

恥ずかしながら、年甲斐もなく興奮してしまいましたね。

つい踏んでしまいました」

運転手がアクセルを踏む。

一瞬遅れてハンドルを回し、バスの軌跡で弧を描いた。

つまるところUターンを行い、後ろで騒ぐ賞金稼ぎを無視してバスは走る。

「こんな事したら、あの血気盛んな賞金稼ぎに殺されちゃいますよ！」

「だからと言って、ここで止まるわけにはいかないでしょう。

もうやってしまったんですから手遅れですよ。

ああ、ガイドさん。無いとは思いますが、何か飛んできたら教えてください」

軽く言う運転手。

笑みを浮かべつつ、バスガイドにバスの背後を警戒させる。

まるで、この状況に ” 慣れてる ” かのよう、平然と指示を出していた。

その笑みに見覚えのある観光客。

客席の方を見ると、同じ笑みを浮かべた、もう一方の観光客がいる。それを確認して溜息を吐くと、考えるのを止めた観光客は客席に座った。

執事

ゾルディック家の執事。

その仕事は食材の調達、旅券の手配、侵入者の排除。簡単に言くと、主の快適な生活をサポートすることが執事の仕事になる。

その中でも侵入者の排除。

それが現在、執事の間で問題になっている。

正門の横に大きな穴が開いているため、セキュリティに穴が出来てしまっていた。

（ 観光バスが来たか。 報告によると、ほとんどが賞金稼ぎらしいからな。

早く工事を終わらせたいたい所だが、作業員達を早めに避難させよう

）

執事の手元にある機械。

それを弄ると、大きな電子音が鳴り響いた。

その音を聞いた作業員達は道具を置いて、組まれた足場から下り始める。

正門の側にある仮設の小屋。

そこへ、いつも通り、作業員達は避難を始める。

しかし、足場の一番上にいた作業員が逃げ遅れていた。

観光バスが止まる。

その扉が開き、賞金稼ぎが下り始めた。

それを見た執事は、逃げ遅れた作業員に声をかける。

「おい！ 何をしている！ 早く下りろ！」

「すみません！ 腕が釣って……下りれそうにありません！」

「なんだと？ この軟弱モノオ！」

執事が足場へ向かう。

すると、そこへ銃弾が飛んできて、執事の体を掠めた。

バスから下りた賞金稼ぎの銃が、逃げ遅れた作業員ではなく執事を狙っている。

執事の足を銃弾が貫く。

避けたはずの銃弾が、執事の足を貫いていた。

それと同時に、銃弾に付いていたオーラが消える。

（銃弾に付いたオーラ！ 念能力者か！）

傷口をオーラで覆い、止血する執事。

再び執事に向けて、銃弾が撃ち出される。

それと同時に、近くに落ちていた荷車を掴み、地面を擦りながら振り回す。

荷車を放り投げる。

それは銃弾に当たり、弾の速度は落ちた。

しかし、弾は止まらず、荷車を投げて硬直した執事を狙う。

（回避は間に合わない！ ならば、止める！）

執事の体を弾が吹き飛ばす。

しかし、弾は貫かず、皮膚の上で止まっていた。

体中から集められたオーラが弾を押し返し、弾の速度を殺す。

投げられた荷車。

それは回避され、再び賞金稼ぎは銃を構える。

それを見た執事は止めた弾を握り、それを投げ返した。

賞金稼ぎの胸に弾が当たる。

それを見ると、執事は足場を登り始めた。

足場を支える棒を片手で握り、足場を蹴って上っていく。

「ハアーハツハツ！」

足場の下で賞金稼ぎが笑う。

そのアーマーを着た賞金稼ぎは。足場を支えている棒を掴んだ。

そして、500キロほどの重さがある足場を持ち上げ、バランスを崩して倒す。

崩れる足場。

そこから執事は跳び、作業員を受け止めた。

着地すると銃弾に貫かれた足が痛み、執事の顔が歪む。

「行け！」

作業員を放り出す。

放り出された作業員は地面を転がった。

しかし、すぐに立ち上がり、振り返ることなく小屋へ向かって逃げて行く。

足下にあった鉄パイプを、執事は拾った。

そして、いつの間にか近寄っていた賞金稼ぎ達を、執事は睨む。

その目の前には数個の銃口があり、動きを止めた執事を狙っていた。

「ここから先はゾルディック家の私有地です。

許可なく立ち入るのならば、実力で排除します」

銃のトリガーが引かれる。

それよりも早く、執事は走り出した。

足下にあつた金属の板を拾い、賞金稼ぎに向かって投げる。

アーマーを着た賞金稼ぎ。

それが足場に使われていた棒を使い、金属板を叩き落した。

しかし、その間に近付いていた執事が、アーマーの隙間に金属パイプを差し込む。

執事が回転を加える。

それだけで、金属パイプによってアーマーの中身は抉れた。

さらに、引き抜く間は盾として使い、賞金稼ぎの撃つ銃弾から身を守る。

銃弾が曲がる。

それを見た執事は、オーラを集めて防御した。

銃弾に込められたオーラは少なく、オーラを集めれば簡単に防ぐことが出来る。

（ だが……邪魔だ！ ）

賞金稼ぎの群れの後ろに目標はいた。

しかし、賞金稼ぎが邪魔で、目標に近寄れない。

そこで執事は、目の前の賞金稼ぎを弾き飛ばすことにした。

殴り飛ばされたヒトが宙を舞う。

賞金稼ぎの群れに突っ込み、執事は両手で鉄パイプを振るった。

賞金稼ぎに囲まれているため、オーラを込められた銃弾は常に上から飛んでくる。

銃弾を執事は避ける。

すると、銃弾は地面に落ちて動きを止めた。

止まった弾も操作できる可能性を考え、執事は銃弾に気を配る。

（もしかして、攻撃対象か銃弾を視認しないと操作できないのか？）

賞金稼ぎに踏まれ、銃弾が見えなくなる。

すると、落ちた銃弾を意識から外し、目の前の賞金稼ぎに執事は集中した。

しかし、すぐに銃弾へ意識を戻し、地面に落ちた銃弾が動いていないことを確認する。

（銃弾使用の他にも念能力者がいたらアウト。

アウトだが……この足で中距離の戦闘は無理だ。

ならば、賭ける！）

叩く、叩く、叩く。

しかし、その間に賞金稼ぎが敷地へ入ろうとしていた。

それに気付いたものの、執事が後退すれば再び銃弾が飛ぶ。

「させるかよ！」

後ろの賞金稼ぎへ向かう。

そして、鉄パイプで敷地の外へ叩き出した。

しかし、そこへ例の銃弾が放たれ、執事に迫る。

オーラで防御を行う。

しかし、銃弾は止まらず、胸部の皮膚を抉って逸れた。

それでも止まる訳には行かず、再び執事は賞金稼ぎの群れへ突っ込む。

（ 今までの弾よりも威力が高い ”溜め” か！

もう一発来たら、不味い。

早く片付けなくては だが、この怪我で間に合うか？

受けた傷で焦る執事。

念能者でない者は雑魚なのだが、数が多い。

計らずとも、後衛の長距離型念能力者、それを守る雑魚という式が出来上がっていた。

『 皆さん、出発します。 バスにお戻りください』

勝利の声が聞こえた。

一部の賞金稼ぎが退き始める。

それに連られ、他の賞金稼ぎ達も退き始めた。

賞金稼ぎが、一瞬戸惑う。

その隙に執事は銃弾使いに接近した。

目の前で撃ち出された銃弾を片手で掴み、頭部を鉄パイプで叩き潰す。

「 脳ミソをブチ撒ける！」

飛び出た目玉が落ちた。

それを見て、執事は笑みを浮かべる。

辺りを見回すと、走り出したバスが賞金稼ぎを轢き殺していた。

それを眺める執事。

執事は片手で掴んだ銃弾を、背後に向かって投げる。
すると、それは執事を銃で狙っていた賞金稼ぎの頭部を貫いた。

「さて、賞金稼ぎの皆さん。」

「いっぺん死んでみる？」

念能力者が死んだ。

しかし、その事を周りの賞金稼ぎは知らない。

そのため、執事の言葉を笑い飛ばし、それらは執事に挑んでいった。

叩く、叩く、叩く。

叩き潰された死体の数は約40。

死体を集め終わると、小屋の作業員へ知らせに行く。

すると、さきほど助けたはずの作業員が、扉の前で倒れていた。

「また作業が遅れるな」

執事が呟く。

そして、作業員の遺体を引き摺り、死体の山へ乗せる。

1時間ほど遅れた作業に頭を痛めながら、執事は小屋の鍵を開けた。

カルト・ゾルディック

暗殺一家、ゾルディック家。

その五男カルトは母親の胎内にいた。

同じ体内にいる胎児の手に触れ、その反応を探る。

しかし、反応がない。

手に触れても、足に触れても反応がない。

胎児の胴体部分を探り、手を当ててみても、なにも感じなかった。

（ 死んでる ）

カルトは答えを出す。

数日前、胎児の体が動かなくなった。

その時から感じていた答えを、カルトは認めた。

（ これは誰だろう？

双子なんて聞いたことも無かったけど、もしかしてアルカ？

” 原作 ” ではアルカは生きていた。

少なくとも、成長した後姿は載っていた。

それなのに、この子は死んでいる。

ボクのせい？ ボクの念を浴びてしまったから？

オーラを留めることが出来ず、死んでしまった？ ）

カルトは焦っていた。

” 原作 ” では全く出番の無いキャラであるにも関わらず、焦っていた。

死んでいても ” 原作 ” には影響がないと思いつつも、カルトは焦っていた。

カルトは思い浮かべる。

生まれたカルトと、死んだ胎児、それを知って泣く誰か。

それを考えると、胎児の死体を前にして、カルトは落ち着いていられなかった。

カルトは手を伸ばす。

そして、胎児の体を探り、命の跡を探した。

しかし、そんな物は見つからず、胎児は死んだまま目の前にいる。

1カ月後。

カルトは命の跡を探していた。他にやることもないため、暇潰しとして胎児の体を探っていた。

胎児の体を思い浮かべる。

毎日、胎児の体を探っていたため、それは簡単なことだった。

さらに、成長した姿を思い浮かべ、自分と並ぶ双子の姿を思い浮かべる。

自分と同じ声を想像し、

自分と同じ顔を想像し、

自分と同じ背丈を想像し、

自分と同じ暖かさを創造した。

数日後。

手が握れるようになったため、カルトは胎児の手を握る。

すると、死んでいたはずの胎児はカルトの手を優しく握り返した。

さらに1カ月後。

ゾルディック家に双子が生まれる。

四男はアルカ・ゾルディック、五男はカルト・ゾルディックと名付けられた。

7年前 アルカ再誕（後書き）

” 一般人「俺は貧弱一般人」”

元ネタ『FF11』フロントさん

” 運転手「つい踏んでしまいました」”

元ネタ『ジヨジヨの奇妙な冒険 Part4』吉良吉影

” 執事「脳ミソをブチ撒ける！」”

元ネタ『武装練金』津村斗貴子

” 執事「いつペン死んでみる？」”

元ネタ『地獄少女』閻魔あい

はじまり

影から双月が生まれ、
月明かりに影は蝕まれる。

やがて月は墮ち、
地を這う光は闇に消える。

かくして月は一つ、地には闇。
影は繁栄を約束された。

19 - - 年

イルミ・ - - - - 誕生

1982年

ミルキ・ - - - - 誕生

1987年

キルア・ゾルディック 誕生

1992年

アルカ・ゾルディック 誕生

カルト・ゾルディック 誕生

ミルキ 旅に出る

1993年

キルア 天空闘技場へ

アルカ、カルト 念能力を習う

1995年

ミルキ 帰宅

キルア 帰宅

ミルキ 失踪

イルミ キルアに ” 針 ” を埋め込む

1999年 原作開始

ハンター試験一回目 1 (前書き)

アルカ蘇生

7年後

ハンター試験開始

ハンター試験一回目 1

昼時の焼肉屋。

そこへ一匹と5人が入ってきた。

人型に変化した魔獣と、ゴン、キルア、クラピカ、レオリオ、アルカだ。

「バカな……！」

その異常にアルカ・ゾルディックは気付いた。

その光景を目で見えていなかったからこそ、アルカは初めに気付いたのだろう。

見えていなかったからこそ、昼間から店内が満席だという異常にアルカは気付いた。

「ありえない……！ 真昼間から焼肉だと……！？」

もし、これが世界の真実だというのならば……私は……！

私の昼御飯は何だったというんだ……！」

つい言葉に出てしまう。

それでも思いは出し切れず、アルカの心は悲鳴を上げた。

それは、“無き前世”の“記憶”に縛られるが故の叫びだった。

「いや、違う！ 間違っているのは世界の方だ！」

ゾルディック家での食事は例外だ。普通の人間が昼間から肉を

食えるはずがない！

ならば、コレは……そうか！ ここにいるのはハンター試験の関係者だったんだ！

ゾルディック家のようにハンターも数時間で億単位の金を稼ぐ規格外！

ならば、昼間から肉を食っていても不思議ではない！」

「な、なんだってー！？」

アルカの言葉で周囲に衝撃が走った。

ゴン、クラピカ、レオリオ、それに魔獣、さらに店の客までもが驚く。

それに対して、キルアは「ねえよ」と呟き、逆にアルカから目を逸らしていた。

「まさか、すでに次のハンター試験は始まっているというのか？」

クラピカが辺りを見回す。

すると、何事かと注目していた客達が一斉に目を逸らした。

その反応にクラピカは思い当たる所があり、ハンター試験の一部なのだと確信する。

（なんだ？ 何を試されている？

いや、まずは過去に出された問題から推理してみよう。

最初は船、試験に挑む理由を試された。

次にクイズ、試験に挑む覚悟を試された。

最後にキリコ、試験に挑む経験を試された。

ならば、今試されているのは（

それに思い当たるクラピカ。

ゴン、キルア、レオリオ、アルカを呼び、店の中で秘密会議を始める。

それをキリコは止めるべきかどうか悩み、店主は「変なのが来たな

あ」と流していた。

「ゴン、キルア、レオリオ、アルカ。この試験どう考える?」

「へ? どういうことなのクラピカ?」

「店内の客の反応から考えてみるんだ。

つまり、ここにいる全員がハンター試験の関係者である可能性が高い」

「なんだと!?!」

「大声を出すな、レオリオ」

「ああ……すまん。で、どうということなんだ」

「（金持ちハンターの意味で）客全員がグルなんですね、クラピカさん」

「ああ、その通りだアルカ。（試験的な意味で）

私が考えた通りならば、これから私達はマナーを試される」

「マナー?」

「マナーだって?」

「落ち着け、ゴン、レオリオ。すでに試験は始まっている可能性がある。」

そして、店内で大声を出すのはマナー違反だ」

「いや、店の通路で話し込んでる時点でダメだったの」

2人に説明をするクラピカ。

そこへ、極めて冷静なキルアの突っ込みが入った。

その言葉でクラピカは正気に戻り、ゴンとレオリオに短くアドバイ

スを送る。

「焼きすぎてはいけない。必要な分だけ焼いて、一枚取るたびに追加するんだ。」

「タレを付けすぎてもいけない。肉の4分の1のみに付けるようにするんだ。」

他にも色々と言いたいことはあるが　今は時間がない」

クラピカがゴン、レオリオ、アルカと視線を交わす。

そして4人は頷き合い、素早く通路の片側に寄って整列した。

その様子を見た魔獣のキリコはタイミングを見逃さず、4人に声をかける。

「それじゃあ、いいかな」

「ああ、よろしく頼む」

キリコが店主に話しかける。

その際、丸めていた背を伸ばし、反動で上向いた顎を引く。

そして、それまでの猫背が嘘のように、全く隙のない姿勢で言葉を紡いだ。

「ご注文は？」

「ステーキ定食」

「焼き加減は？」

「弱火でじっくり」

キリコの指が立てられる。

言葉と共に、何気なく立てられた人差し指。

しかしソレは、思わず見惚れてしまうほどの印象を見た者に与えた。

(ふう……今は極まったな。 我ながら良い出来だった。
これで、どこから、どう見ても、魔獣には見えまい、フフフフ
フフ)

「え〜と……6 ”名” 様ですよね？」

「ああ、6 ”名” だ」

「ステーキ定食、6名様ご案内」

ウエイトレスが6人を導く。

その先頭では、久しぶりに極めたキリコが機嫌よく歩いていた。
その後ろを、深刻そうな顔の4人と、遠い目をしたキルアが歩い
ている。

(たったの一言と指一本で、ここまで出来るとは !)

(マナー？ マナー？ マナー？)

(ゴン！ しっかりしろ、エラーを起こしてる場合じゃねえぞ！
)

(バカな……念能力か？ だが、あの魔獣から、そんな気配はし
なかった。

では、さきほどの言い知れないカリスマは、いったい……！)

(ダメだ、こいつら。 早く何とかしないと すっかりアルカ
に毒されてやがる)

6人は個室に案内された。

部屋の中央には、鉄板を埋め込んだテーブルがある。

その他には椅子が置かれているだけで、窓も装飾品の類もなかった。キリコとウエートレスが退室する。そして、エレベーターの外にあるレバーを下げると、扉が閉まった。焼肉のタレが零れないほどの遅さで、ゆっくりと個室は下降を始める。

「しまった！」

「どうしたんだ、クラピカ」

「ここが個室である以上、さきほどの客達の意味がない。

つまり、案内されるまでが試験だったんだ！」

「なんですとー!？」

「失格か？ 俺達全員失格なのか!？」

クラピカの言葉にアルカが驚く。

さらにレオリオは ” 失格 ” という思いつきにショックを受け、奇声を上げていた。

その側では、ステーキの匂いに誘われたゴンが、キルアと共に席へ着いている。

「落ち着け、アルカ、レオリオ。

失格であるのならば、ここまで案内されるはずがない。

なぜかは分からないが、一応合格したのだろう。

考え難いことだが、整列したのが良かったのかもしれないな」

「そうか……そいつは良かった」

「異議あり！ まだ安心するのは早いと思います。

もしかすると、壁の中にマイクや監視カメラが埋め込まれているのかもしれない。

「別に構わないが」

「次にクラピカさんは、こう言います
”私の屍を越えてゆけ
!”と」

「いいだろう、越えてやるぜクラピカ。前から、その綺麗な顔が
気に入らなかつたんだ」

「2人とも、話を聞け」

「まずは……あなたです、レオリオさん！」

「まずは……テメエだ、アルカ！」

2人は部屋の隅へ移動した。

そして、それなりの速さで拳同士を打ち当てる。

しかし、拳が当たる寸前でレオリオが飛ばされ、壁の側まで転が
た。

「こんなガキに負けるとはな……」

「現役の殺し屋が将来のお医者さんに負けたら、それはそれで間違
つていると思います」

「何をしているんだ2人とも。私のステーキ定食を3つに分けれ
ばいいだろう。」

まだハンター試験の本試験は始まっていないんだ。無駄な体力
を使うべきではない」

「良いのか、クラピカ。ステーキだぜ、ステーキ！」

「何て良い人なのでしょう。まさかステーキを分け与えるとは…

…！」

「なぜだ、お兄ちゃん」

アルカが尋ねる。

何事も無かったかのように、傾いたテーブルが元に戻った。飛び散った皿をクラピカとレオリオとゴンが回収している間に、兄弟は話し込む。

「アルカに ” お兄ちゃん ” って言われると虫唾が走る」

「なぜだ？ カルトに ” お兄様 ” と言われても気にならないだろう？ むしろ嬉しい。」

それと同じことじゃないか」

「それだ。 アルカが弟ってキャラ自体が間違ってたんだよ」

「生まれる前から全否定？ 私も選べるなら女の子に生まれたかったよ！」

「カルトは男だろーが！」

「たしかに。 どちらかというと、キルアが弟って感じがするな」

「レオリオ、それはキルアに対する私達の先入観だろう。」

おそらく、キルアの外見や年齢が自分達よりも下だから弟という感じがするだけだ。

アルカの ” 姿 ” を見ることができれば、ハッキリするはずなのだが」

「というわけだアルカ。 そのステルス迷彩脱げよ。」

「だいたい、 ” 鏡に向かって話してる ” みたいで気持ち悪いんだよ」

「私も成長した姿を見せたいのは山々なんだけど、自分の意思でも脱げないよ。」

そういう ” 制約 ” だから」

「誰だよ、そんな制約決めたやつ」

「私だ」

「じゃあ脱げや、コラアアアアアア！」

「落ち着け！ 本当に脱げないんだよ！ バカ触るなって！」

キラアがテーブルに上った。

そして、ステルス迷彩っぽいものを脱がすために、アルカの体に触れる。

しかし、その手は寸前で止まりキラアの体ごと、何かに弾き返された。

「たく、どうなってんだよ。そのステルス迷彩」

「宇宙空間でも使えるように、反重力発生装置が付いてるんだ」

「ねえよ」

「2人共。話し込んでいる所へ悪いが、そろそろ着くようだぞ」

階数表示が100を示す。

それと共に、個室の扉が開いた。

大きな地下道に1500人以上の人々が詰め込まれている。

「受験者……か」

クラピカが呟く。

その時、地下道にある数多くの目が5人を見ていた。

しかし、子供連れであることが分かると興味が失せ、目を逸らす。

ハンター試験のナンバープレート。

それをゴン、キルア、レオリオ、クラピカ、アルカの順で受け取った。
しかし、アルカは自分が受け取った1505番を見て、不思議そうな顔をする。

(“記憶” よりも人数が多いな。 いや、多過ぎる。 およそ3倍の受験者か)

悲鳴が地下に響く。
アルカがキルア達の方を見ると、他の受験者と話している所だった。悲鳴が聞こえてきた方では、ヒソカが受験者の腕を切り落としている。

ヒソカの視線。
それがアルカに向けられる。
すると、楽しそうな表情に変わり、受験者に隠れて見えなくなった。

(念能力を常時発動してれば、そりゃ気付くわな。
キルアを巻き込むわけにはいかないし、一次試験後半の湿原は別行動か？)

受験者がヒソカについてキルア達に説明している。
しばらくすると、地下道にベルの音が響き、一次試験の試験官が現れた。
受験者達の緊張が高まる中、その試験官を見たアルカは “記憶” との違いに気付く。

(あれは来年の試験官だったはずなんだが……まさかな。
明らかに念能力を発動してる俺がいるし、殴り合いはないだろう)

試験官が受験者達を見る。

そして、1500人ほどの受験者を見て、溜息を吐いた。暑苦しいほど熱気が溜まっているため、息が詰まるような感覚に陥る。

「あー、そうだな。お前ら、殺しあうか？」

試験の内容を伝える。

自分のプレートを含めた6枚のプレートを集めて俺の所へ持つてこい。

このトンネルから外へ出たら失格だ。俺が扉を閉めたら試験開始とする」

（馬鹿なの？ 阿呆なの？

明らかに念能力を使ってる俺がいるだろ？

ヒソカがいる時点で大量虐殺フラグが立ってるじゃねえか！）

騒ぐ受験者。

しかし、すぐに各々の武器を取り出して睨み合う。

ゴンは釣竿を握り、レオリオはナイフを引き出し、クラピカはトンファーを握った。

「うーん。皆とは戦いたくないけど、仕方ないかな」

「手加減は無しだぜ、ゴン」

（おいおい。分かってねえな、お子様2人は。

この中で一番危険なのはアルカなんじゃねえか？

どうする？ 早くアルカの側から離れるべきか？

兄弟のキルアは兎も角、ゴンは……ダメそうだな。

クラピカはどうするつもりだ？）

ハンター試験一回目 1 (後書き)

” アルカ「間違っているのは世界の方だ！」”

元ネタ『コードギアス』ルルーシュ・ランペルージ

” ゴン、クラピカ、レオリオ、魔獣、客「な、なんだってー!?!」”

元ネタ『MMR』キバヤシ

” アルカ「私の屍を越えてゆけ！」”

元ネタ『俺の屍を越えてゆけ』タイトル

” レオリオ「その綺麗な顔が気に入らなかつた」”

元ネタ『霸王はーと愛人』殺し屋

” ベクトル操作の念能力”

元ネタ『とある魔術の禁書目録』一方通行

ハンター試験一回目 2 (前書き)

ハンター試験

一次試験

乱戦

ハンター試験一回目 2

「提案がある。」

ここにいるゴン、キルア、レオリオ、アルカ、そして私。

ここは一度、この5人で手を組もう。

もし相手を倒してプレートを奪っても、その奪う隙を狙われてしまふという危険がある。

それに、試験官のいる扉の前では、プレートを奪おうという輩も待ち伏せているだろう。

それらを一人で突破するのは難しい。

しかし、集団ならば相手の足止めをすることができる。」

「よし、それで行きましょう、クラピカさん。 私は賛成です」

「何でだよ。 俺やアルカなら単独でも楽勝だろ」

「さっきのピエロを見ただろ？ あと、イツ君も参加してるはずなんだ。」

あいつはキルアの受験反対の母派だからね。 もし見つかったら邪魔しに来るよ」

「イツ君って誰？」

「ゾルディック家長男のイルミです。」

変装のために顔に杭を刺しているはずだから、すぐに分かります。キルアお兄ちゃんでも勝てないから、目が会う前に逃げてくださ
い」

「変装のために顔に杭を刺すって、痛そうだね」

「アルカといい、ゾルディック家には変人が多いのか？」

「アルカは兎も角、俺まで入れんなよ」

扉が閉まった。

それと同時に、ヒソカのいる方から多くの悲鳴が聞こえる。別の方向からは、キルアに向けて針が飛ばされていた。

「早いよ！ イツ君！」

キルアと針の間に、アルカが割り込む。

すると、針はアルカの手の平に浅く刺さり、すぐに弾かれる。

そして、投げたイルミのいる方向へ返っていき、イルミの手に収まった。

「積極的に手は出さないとと思ってただけだね、イツ君」

「そのつもりだったんだけど、アルがいると簡単に合格しちゃうかもしれないから」

針がキルアを狙う。

それに対して、アルカは体内からオーラを引き出した。

先程のように手の平に刺さることはなく、受け止めた針は弾き返される。

アルカの気配が変わった。

体から引き出された禍々しいオーラが体を覆う。

それは、「最初から纏っていたオーラ」を変質させていた。

（俺達が入ってくる前から、オーラの気配を消していた。

そして、針を投げる瞬間にオーラを増やし、そのオーラを針に纏わせたか。

じゃなきゃ、普通にオーラを纏わせた針で俺を傷つけるなんて

無理だからな。

まったく、とんでもない早さだ

（ オーラを引き出すよりも、一瞬早く針が届いたようだね。
アルがヒソカに気を取られていなかったら防がれてたよ ）

「むう………イツ君、針に何を塗ったの？」

「アルにも効く毒」

「弟に何でももの使ってたよ！

キルアお兄ちゃんに当たってたら 死ぬかな？」

「アル用だから、キルに当たっても平気だよ」

キルアは動けない。

頭に埋め込まれたイルミの針によって体を操られ、動きを止められていた。

それは、キルアが ” 逃げて ” 合格するのを防ぎ、アルカの足枷にもなっている。

（ 毒か。 しかし、この程度なら耐え切れる。

そして、操作系のイルミでは、オーラを引き出した俺の防御は抜けない。

だから、俺の天敵である ” 変化系 ” のヒソカが邪魔をしてくる前に行動しなければ………！ ）

「クラピカさん、イツ君は私が止めます。

だから、早くプレートを拾って、キルアお兄ちゃんを連れて行ってください！」

クラピカとゴンとレオリオ。

アルカとイルミの念によって動けなくなっていた3人は、後退しながら体を動かす。

すると、どこかで撒かれたガスを吸い、倒れている受験者の姿がクラピカの目に入った。

「彼らのプレートを回収するか」

「危険だぜ、クラピカ。何のガスか分からない。」

もし目に入った場合は失明する恐れがあるし、皮膚が壊死する恐れもある」

「そんなものを地下で撒くのかな？ 自分も巻き込まれるんじゃない？」

「こんな場所で使うのは、自分を狙ってくださいって言うようなもんだろう？」

だから、受験者が持ち込んだ容器が壊れてガスが漏れちまったんだろ」

3人は扉の方へ向かう。

後方ではイルミとアルカが戦い、右方ではヒソカが暴れている。

左方では目に見えないガスを吸った受験者が倒れ、戦闘不能になっていた。

（来るなよ！ こっちに来るなよヒソカ！ 絶対だぞ！）

アルカは念じる。

針を防ぎつつ、ヒソカが来ないようにアルカは願っていた。

”記憶” によるとイルミとヒソカは知り合いだったため、共闘される危険度が高い。

「やあ、楽しそうだね ボクも混ぜてくれない？」

「ギャー！ ヒソカキター！」

ヒソカが現れた。

その後方では、数えるのが面倒なほどの受験者が倒れている。ヒソカの気が逸れた隙に、そのプレートを盗ろうと受験者は試みていた。

「あのー、ヒソカさん。プレートを盗もうとしている輩がいるよ
うですが」

「弱すぎるから、もう飽きたよ」

「それは丁度良かった！ ここにいるイルなんかは強いですよ！
今はギタラクルだろう？ それに、彼とは友達なんだ」

「T O M O D A T I ？」

「そう、お友達」

「ねえ、イツ君。

殺し屋に友達はいらないとか言ってなかったけ？」

「仕事上の協力者だよ」

「つれないなあ」

「とりあえず、今は兄弟喧嘩中だから他所に行ってくださいませんか？」
「どうしようかな」

「アルの相手をしてよ、ヒソカ」
「いいよ」

ヒソカが構える。

アルカの左方にヒソカがいて、イルミは前方にいた。
このままでは、ヒソカに妨害されて、キルアがイルミに捕まってしまう。

「スタアアアプ！ ヒソカさん、あつちに将来有望そうな黒髪のお子様がいますよ！」

「そうかい？ でも、後でいいよ。 TOMODATIの頼みも偶には聞いてあげないとね」

「噂とは違って凄く良い人ですね。 私は嫌になってきましたけど」

「よく言われるよ」

（ ヒソカが本気になる前に……逃げる！ ）

アルカは後ろへ跳ぶ。

そしてキルアに触れて、宙へ”飛ばした”。

”体がバラバラになりそうな速さ”で飛んでいくキルアを追いかけて、アルカも跳ぶ。

宙を飛ぶキルア。

何が起こったのかを理解したのは、地下道の天井まで上がった後だった。

先回りして受け止めたアルカに弾かれ、今度は地面に向かって飛ばされる”。

「アルカとキルア？ なんで上から降ってくるんだよ！」

「見ての通り、”飛んできた”んですよレオリオさん。

それよりも、変態ピエロと兄馬鹿がやってきますよ！」

「酷いなあ」

「アルってボクのこと、そんな風に呼んでたんだね」

「しまった！ うっかり口が滑った！」

「わざわざ言わなくていいよ」

針が飛ぶ。

それは小さな裁縫用の針だ。

キルアの分はアルカが防いだものの、レオリオには刺さってしまった。

（ 追撃してこないと思ったら、面倒な物を使ってきたな。

念が込められていないとはいえ、アレを避けたのか。 さすが
ゴン。

でも、ちょっと待てよ。 アレって毒付きじゃないよな？

「へえ、”コレ”の前で動けるのかい？ それに、いい目だ

」

「でしょう？ 私のオススメです。

そういうわけで、あのピエロは頼みましたよゴンさん。

レオリオさんはキルアお兄ちゃんを連れて行ってください」

「ああ、分かった。 でも、どうしたんだコイツ」

「イツ君の催眠術が掛かっているんです」

ゴンがヒソカへ向かう。

しかし、ヒソカの拳によって殴り飛ばされた。

その衝撃で床を転がっていき、骨が折れたような音と共にゴンの釣竿が折れる。

アルカがイルミへ向かう。

アルカは拳で殴り、イルミはオーラを集めて防御した。しかし、衝撃波と共に体ごと弾き飛ばされ、ガスが発生している方向へ飛んでいく。

（ 毒が薄すぎたね。

刺さっても弾かれるし、アルは毒に弱い分、加減が難しいよ。
となると、やっぱりアルを止めるには力不足か ）

イルミの足で床が削れる。

それで勢いを止めたイルミが、近くにいた受験者を掴む。

そして、アルカに向かって受験者を投げつつ、オーラを拳に集中させた。

受験者の影。

その死角から現れたイルミは、アルカを殴る。

そして、骨を押し潰されつつも拳を押し通し、アルカを殴り飛ばした。

（ 無茶しやがって……。

）
確実に殺れる時だけ行動するんじゃないのかよ、兄馬鹿め

飛んでいくアルカ。

その途中にいた弓を背負った受験者が弾き飛ばされる。

そして、運悪く射線上にいたキルアは、アルカに巻き込まれた。

試験官のいる扉。

そこへ、アルカとキルアは飛んでいく。

空気を弾いて射線を修正したアルカは、キルアと共に扉を壊して突っ込んだ。

(接触しないと操作できないって弱点を突かれたか。いつもは高速移動をすれば問題なかったんだけど……。今回は、後ろにレオリオとキルアがいたからな)

「大丈夫か？ アルカ、キルア」

「おお、クラピカさん！ なんで、こんな所に？」

いえ、丁度いいですね。キルアお兄ちゃんを頼みます。私はイツ君を止めてきます！」

キルアは悶え苦しんでいた。

どうやら、扉を壊した時の打ち所が悪かったらしい。

しかし、試験のために間に合わせで作られた扉だったらしく、それほどダメージはない。

(アルカと一緒にいると、碌な目に会わねえ……。)

もう、ハンター試験なんてどうでもいいから、どこか遠くへ行
くか？)

「キルア、立てるか？」

アレをアルカが止めている間に、先に合格してしまおう。

それでも彼がキルアを狙うとしても、今より状況は良くなるはずだ。

何より、キルアがいるとアルカが全力で戦えないだろう」

5枚のプレート。

それをクラピカはキルアに渡して、キルアは試験官に渡す。

一方では、壊れた扉の前まで来ていたイルミと、アルカが向き合った。

(あれ？　なんでクラピカが、あんなにプレートを持つてるんだ？
いや、集中しよう。　余計なことを考えている暇はない)

「イツ君の敗因は、ただ一つ。　友達がいなかったことだ！」

「あと運が悪かった」

「それじゃ2つだよ、アル」

睨み合う2人。

これまでの地下道と違って、試験官のいる通路は狭い。

このまま戦えば、確実に攻撃を当てられるイルミの方が有利だった。

「ここを通りたければ、私の屍を」

再びイルミが殴る。

殴られたアルカは、クラピカとキルアの体を掠って行った。

そして、飛び退いた試験官の座っていた階段を、転がりながら
上って”　いく。”

「1505番、失格」

「なぜですか！」

「プレートを集めずに来たからだ」

「(・・・)」

アルカが失格する。

すると、ヒソカが現れ、試験官にプレートを渡して合格した。

次にイルミがプレートを持って現れ、試験官に渡して合格する。

「合格した者は奥へ、失格した者は広間へ戻れ」

(なんてこった……まさか一次試験で落ちるとは思わなかった)

「あれ？ でも、じゃあクラピカはどうなるんですか？」

「1504番のことか？」

そいつはプレートを俺に渡していないだけだからな。

プレートを持ってるなら良いんだよ」

「そんなのアリですか？」

「……微妙だな」

「すまない、アルカ。

出来れば、ゴンとレオリオへ早く来るように伝えてくれないか」

壊れた扉から出るアルカ。

イルミは「じゃあね」という感じで、視線を送る。

キルアはアルカがいなくなったことに安心しつつも、イルミから遠ざかろうとしていた。

(弟の心、兄知らず……か)

遠い目をするアルカ。

その目に入ったのは、受験者達が争う地下道だった。

個人よりも集団の方が有利であることに気付いた受験者達が、群れを作り始めている。

「ちょっと退いてくれないか」

アルカに受験者が近付く。

その受験者は忍者っぽい格好をしていた。

扉の前で呆けていたアルカを退けるために、忍者つばい人が話しかける。

（ ” 記憶” では最終試験まで残った奴だったっけ。

今のキルアじゃ勝てないから、今のうちに片付けておこう）

アルカが腕を振る。

すると、忍者つばい人は飛び退きつつ、クナイを投げた。

しかし、それはアルカに当たる前に弾かれ、近くにいた受験者に当たる。

「俺は、そこを通りたいだけなんだがね」

「私は、ライバルを減らしたいだけですよ」

アルカが地面を弾く。

すると、忍者つばい人は距離を取り、飛び道具を投げた。

それら全てが弾かれたのを見ると、腰に下げていた竹筒を投げる。

竹筒が爆発する。

すると、広がった黒い煙でアルカの姿は隠れてしまった。

その間にアルカを抜いて、忍者つばい人は試験官いる通路へ向かう。

通路へ入る。

その一步前で、忍者つばい人は殴り飛ばされた。

そして、”体がバラバラになりそうな勢い”で床を跳ねていき、壁に突っ込む。

（ 念能力を習得していなければ、こんなものか？）

煙幕が晴れる。

そこには、忍者つばい人に襲われたゴンとレオリオが倒れていた。2人のプレートは忍者つばい人に持ち去られ、ヒソカに殴られたゴンは顔が歪んでいる。

「ギャー！ あの野郎なんてことしやがる！」

アルカは2人を叩く。

しかし全く反応がない。

必死になって揺らしたものの、目覚めることはなかった。

（ っていうか、何でゴンとレオリオが放置されてるんだ？

……ああ、もしかして原因は俺か。

俺がクラピカに ” イツ君は止めてやる ” とか何とか言ったんだっけ。

その後、ヒソカを切り離すためにゴンを囿にしたと。

あの位置関係からして、ゴンとレオリオはキルアを迎えに来てたのか)

忍者つばい人の所へ向かう。

アルカの足下には、巻き込まれた受験者が転がっていた。

そのプレートを回収しつつ、受験者で出来た道をアルカは進む。

（ 加減を間違えたか。 さっきまでイルミと戦ってたんだし、仕方ないな)

息を吐きつつ、緊張を解く。

忍者つばい人のプレートを、飛び散った体の一部から探し出した。

どれが2人のプレートか分からないため、全て回収してレオリオのポケットへ入れる。

(一次試験が終わるまで目覚めてくれるといいんだけどなあ……。いや、待てよ。プレートならクラピカが持つてるのか。それなら、試験官の前まで運んでいけば良いんじゃないか？)

2人を運ぶ。

再び壊れた扉を通り、ゴンとレオリオを下ろした。

集めたプレートをクラピカに見せて、ゴンとレオリオのプレートを探す。

「その2人が自分の手でプレートを渡さなければ、合格とは認められない。

それと、いつまで1505番は居るつもりだ？ 早く出て行け、試験の邪魔だ」

「別に居ても良いんでしょう？ もう失格になっちゃいましたし」

「……微妙だな。特にペナルティはない」

「じゃあ、いいんですね」

2人が目覚めるのを待つ。

偶に通路を通る受験者を弾き飛ばすアルカ。

おかげで、プレートを集めただけでは合格できなくなった。

「試験官は俺なんだが……」

「いいじゃないですか。私を倒せる実力があれば通れるんですから。」

「ゴンさんとレオリオさんの世話をしている私を抜くなんて簡単でしょう？」

先に合格したピエロや杭男なら出来るでしょうからね」

暇そうな試験官。

アルカ達は廊下を占拠している。
そのため、試験官は階段を上って、姿の見えない場所へ避難した。

「少し良いかアルカ。レオリオの様子が変なのだが……。
ゴンと比べて呼吸が浅い、それに顔色も悪い、手足も震えている
ようだ」

「一番疑わしいのは毒ですね。イツ君の針が刺さってましたから。
そんな状態なら、病院へ運んだ方が良いかもしれません」

（ まあ、そこらの病院じゃイツ君の毒の中和なんて出来ないだろ
うけど ）

「言うておくが、この先の出口は合格しない限り使えない。
ホールのエレベーターは一方通行だ。

不合格を覚悟してホールの階段から上らなければ、地上へは出る
ことはできない。

まあ、そうは言っても地上までは100階近くあるんだがな」

試験官が言った。

その不自然なほど親切な試験官の態度を、アルカは疑う。

しかし、アルカ達を追い出したいだけなのだと思い、アルカは納得
した。

「難しいな……アルカ、どんな毒が分かるか？」

「イツ君のことですから、最悪の状態を考えた方が良いと思います」

「そうか……試験は今回限りではない。

アルカ、レオリオを地上へ連れて行ってくれないか。責任は私
が取ろう」

「分かりました。ゴンさんを守ってあげてください」

アルカはレオリオを抱いた。

2倍ほどの身長差があるにも関わらず、アルカはレオリオを持ち上げる。

受験者の戦場を抜けて地下道から出ると、一階飛ばしで階段を登り始めた。

ハンター試験一回目 2 (後書き)

” アルカ「T O M O D A T I」”

元ネタ『魔法少女リリカルなのは』高町なのは

” アルカ「スタアアアプ！」”

元ネタ『The Elder Scrolls IV:オブリビ

オン』衛兵

ハンター試験一回目 3 (前書き)

ハンター試験

不合格

レオリオの毒

ハンター試験一回目 3

レオリオが治療室へ運ばれた。

アルカはレオリオの状態を医員に説明する。

そして、アルカが待合室で休んでいると、ゴンが病院に駆け込んできた。

「アルカ！ レオリオは！」

「ゴンさん？ 試験はどうしたんですか？」

「レオリオは何所にいるの？」

「治療室に入っていますよ」

「それって何所にあるの？」

「レオリオさんに会いたいんですか？」

「ダメですよ、ゴンさん。今は治療中なんですから」

「う……うん」

「レオリオさんの治療が終わるまで、ここで待ちましょう」

待合室のソファア。

アルカが立っている隣に、ゴンが座った。

元気のないゴンの様子を、アルカは眺めている。

「試験は、どうしたんですか？」

「目が覚めたら……落ちちゃった」

これにレオリオが毒を受けたって書いてあったから探してたんだ」

握り潰された紙。

それには ”レオリオが毒、アルカと病院へ” と書かれていた。
一番大きい病院を探して来たため、すぐに辿りついたらしい。

(よく筆記用具なんて持ってたな。

いや、クラピカだからな、ポケットに何でも用意してそうだ)

「それじゃあ、ハンターになるのは先送りですね」

「……うん」

会話が途切れる。

ゴンは落ち込んでいた。

しかし、アルカが気付くと、辺りを見回したりもしている。

(これはチャンスかもしれないな。

試験に落ちたって事は、1年余裕が出来たってことだからな。

幻影旅団やメラアントに、わざわざゴンやキルアが突っ込む
必要なんでないし)

「レオリオさんが目覚めたら、一度家へ帰ろうと思っただけですけど。

ゴンさんはどうしますか？」

「俺も……帰るのかな」

「帰り辛そうですね　　ゴンさん。　　ゾルディック家で修行しませ
んか？」

「アルカとキルアの家で？」

「どうせ来年もハンター試験を受けるんでしょう？」

でしたら、今よりも強くなる必要があります。　　あの変態ピエロ
に勝てるくらいに。

ゾルディック家ならば、その技術を教えることができます。

どうします？　行きませんか？
「行く！」

「じゃあ、レオリオさんが起きたら、入国許可を申請しに行きましよう」

ゴンとアルカ。

2人は医員に呼ばれ、一つの部屋に案内された。
会議に使われる部屋らしく、大きな机が置かれている。

「当院で投薬による治療を受けていたレオリオさんですが
本日15時44分に、お亡くなりになりました」

医員が告げる。

ゴンは呆然としていた。

アルカは頭を抑えつつ、ゴンを様子を探っている。

（ 殺っちゃった　ってレベルじゃねえぞ、イルミイイイイイイ
）

「マジですか？」

「マジです」

「ご家族の方ではないようですが、それは本当ですか？」

「はい、ハンター試験の会場へ向かう途中で偶然会っただけです」

「そうですか。それでは、こちらで後の処置を行います。」

ハンター協会への確認も取れましたので、後の事はお任せください
い
い

「よろしくおねがいします」

背を向けるアルカ。

しかし、ゴンは席に座ったまま固まっている。

その雰囲気を押され、アルカは声を掛けることができなかった。

「レオリオには、会えますか？」

ゴンが言う。

その言葉に医員が頷き、ゴンは案内された。

しかし、アルカは待合室へ戻り、ゴンが戻ってくるのを待つ。

（ やべえ……レオリオが死んだと分かったら、どうなる？

一緒に過ごした時間が少ないとはいえ、相手は島暮しで友達の
少なかったゴンだ。

”記憶” にある ”ゴンさん” フラグが立ちかねない。

そうなら、いろんな意味で、キルアと ”普通” の友達
としていられるはずがない。

キルアに ”普通” の友達を作るためにも、それだけは回避
しなければ……！ ）

ゴンが戻った。

落ち込んでいる様子は見られるものの、嫌な気配は無い。

その様子に安心したアルカは、無言のゴンと共に病院を出た。

「どうしますか？」

やはり、ゾルディック家へ向かうのは後にしますか？」

首を振るゴン。

その目は、いつもと違い前を向いていない。

そんな状態で歩き回るのは危険なため、アルカは車が来ない場所へ

移動した。

アル力は携帯電話を取り出した。
そして、携帯電話を使って、自宅に電話を掛ける。
一般回線での電話のためナビゲーターに繋がり、そこから執事邸へ
繋がった。

『どのような御用件でしょうか、アル力様』
「ホテルを一部屋借りたいんです。でも、私は6歳……かな？
ですから、そちらから手配していただけませんか？」

『承知いたしました』
「……それと、アレは必要なくなりました」

『申し訳ありません、アル力様』
「いいえ、ありがとうございます」

（パドキア共和国への旅券はゾルディック家を通すわけにはいかないな。

”ゾルディック家ではない誰かが来ますよ” って言ってるよ
うなもんだし。

でも、そうすると出発が遅れてしまいかもしれないな。
それでも、今のゴンの状態じゃ、申請手続には一日置いた方が
いいか）

2人はホテルへ向かった。
そこにゴンを残して、アル力は時間を潰す。
しかし、特に予定が無かったため、入国に必要な申請カードを買い
に行った。

（ キルアはどうしてるかな？

一次試験の合格者は、主に俺のせいで少なくなった。

だから、予定よりも早く終るはずなんだけど……。

トリックタワーと無人島の有無で、一週間くらい差が出るか

朝日が昇る。

それに気付いたアルカは、ホテルへ戻った。

すると、ゴンはベッドに座り、何かを考えている。

「ねえ、毒って何なの？」

「はい？」

「レオリオは毒で死んじゃった。って、お医者さんに聞いたんだ」

「……毒が使われたんですよ。ゴンさんが気絶した後に。

安心してください。ちゃんと、殺しておきましたから」

「殺したって？」

（ あれ？ 殺したいほど感情が動いたわけじゃないのか。

いや、毒だから実感が沸かないだけだろうな。

怒ってはいるけど、殺すまでは行っていないのか

「ええ、殺しました。 だから、レオリオさんの敵を討つ必要はあ

りません」

「そんなつもりじゃ

」

（ 毒を使ったのがイルミだと気付いてなかったのか。 良かった良かった ）

「それよりも、ゾルディック家へ行くために旅券の申請をしましょ

う。

早く申請しておかないと、一週間くらいは掛かりますからね
「う……うん」

（ アルカは殺したんだ……俺は、どうしたかったんだろう？

俺は許せなかった。でも、それは ” 殺す ” とは違つと思
う ）

「アルカ。 アルカは何で……殺したの？」

「邪魔だったからですけど」

「邪魔だったから殺したの？」

「ええ。 その時はレオリオさんの事も知りませんでしたから」

「そう、なんだ」

「なにか気になるんですか？」

「……うん。 ” 殺す必要は無かったんじゃないかな？ ” っと思
つたんだ」

「そうですね……まあ、別に良いんじゃないですか。

ハンター試験の応募カードに ” 命の保障は出来ない ” って書
いてあったでしょう？

相手も私もゴンさんも、ハンターになるために命を賭けていたん
です。

それで相手は賭けに負けました。 相手も同意していたんですか
ら問題ありませんよ」

申請カードに記入する。

それが終わると、2人は出国申請をするために電腦喫茶へと向かった。
ゴンの個人カードを挿入し、パドキア共和国への旅券の発行を申請

する。

「これで、一週間後には旅券が発行されるはずですよ」

「ありがとう、アルカ」

「じゃあ、ホテルへ戻りましょうか」

足を止めるゴン。

息を吸うと、自分の頬を両手で叩いた。

息を吐いて空を見上げると、ゴンの全身に力が入る。

（ハンターになるってミトさんと約束したんだ。

だから、今出来ることをやらなくちゃ）

「……よし！」

「何やってるんですか、ゴンさん」

「ねえ、アルカ。練習しよう。」

次は、絶対にハンター試験に合格するんだ！」

「それは、また突然ですね。それじゃあ、まずは呼吸法から教えますしょうか」

「えー」

「えー」 じゃありません。

呼吸法を甘く見たら、呼吸の乱れを突かれて殺されますよ？

それに、これを上手く習得しないと、他の技術にまで影響が出てしまいます。

まあ、呼吸法と並行して、他の技術も習得してもらいますけど」

町の外れ。

そこへ2人は移動した。

ゴンは気を持ち直したらしく、落ち込んでいる様子はない。

呼吸法を教える。

それと並行して、アルカは食品の栄養について説明を始めた。

しかし、呼吸法の習得具合は良いものの、食品の栄養については理解できていない。

「アルカー。食べ物、もう良いよー」

「そうですね。私が思った以上に、ゴンさんは教育を受けていないようですね。」

赤黄緑の食品レベルなら大丈夫だと思ったんですけど」

(それに比べて、呼吸法の習得速度は異常だな。

体に合っていたと言うべきか、それとも天才と言うべきなのか

)

「ねえ、アルカ。もっと凄い技とか無いの？」

「ありますよ。瞬間的に加速したり、自分の肉体を操作したりできます」

「それ教えてよー!」

「技と言うのは基礎を応用したものです。基礎を覚えなければ話になりません」

「ぶー」

「ぶーぶー言ってる豚になりますよ」

(俺、教師に向いてないなあ……。

ゾルディック家に帰ったら、キルアに任せようかな。
その方が、キルアとゴンの親密度を上げられるし、丁度いいだ
ろう。」

「じゃあ、冗談みたいな技で良ければ教えましょう。」
「うん！」

「抜刀術は知っていますか？ それを手でやるものです。
たしか、抜刀拳」

（ 技の名前ならば兎も角、技術の名前だと語呂が悪いな ）

「 じゃなくて居合い拳という技です」
「 どうやるの？」

「 ポケットに手を突っ込んで自然体のように振舞います。
そして、鞘から刀を抜くように、ポケットから拳を引き抜いて攻
撃するんです。」

でも、近接戦闘中にポケットに手を突っ込むのはどうかと思いま
すよ。」

なので、左手で鞘を形作り、ジャンケンの予備動作のような形に
したらどうでしょう？」

「 それって技なの？」

「 自然体から急に攻撃されるわけです。 ポケットを使えば不意打
ちに使えるでしょう。」

それに、どこぞの髭親爺は、これでレーザービームを打ち出して
いましたよ。」

「 レーザービームって何？」

「レーザービームというのは光の棒のことです。もちろん、そんな物が人の手から出るわけがありません。分かりやすい例えです。」

実際は、見た目がレーザービームっぽい指向性衝撃波を出していたのでしょうか」

「しこうせい しょうげきは？」

（ 分かり難いか。 放出系の念なら出来そうだけだな。 いや、待てよ。 指向性衝撃波なら俺も出せるか ）

「居合い拳モドキなら使えるかもしれませんが、見ますか？」
「見る！」

2人は場所を変える。

さらに町から離れた見通しのいい場所へ移動した。

そこで、アルカはゴンから離れ、辺りに人がいないことを確認する。

「じゃあ、あの木を狙いますよー」

右手で左手を軽く包む。

アルカは体内からオーラを引き出した。

右手限定で操作を行い、それで宙を叩く。

空気が打ち出された。

それは瞬く間に音速を超え、衝撃波を生む。

そして、衝撃波は拡散することなく木に向かい、粉微塵になるまで吹っ飛ばした。

（ おお、放出系の操作だから結構いけるな。

でも、念能力者は防ぎ切るだろうから、実戦では使えないか。

ネテロ会長だったら、念無しでも出来るだろうし。

もつと念の遠隔操作が出来れば良いんだけど　俺って操作系だよな？　)

アルカはゴンを見る。

すると、さっそくアルカのマネをしていた。

アルカの　”記憶”　に記されたジャジャンケンのように構えている。

ゴンが拳を抜いた。

そして、目の前にある木へ叩き付ける。

その衝撃で幹にヒビが入り、ゴンの手から鈍い音が聞こえた。

「いったー！」

「何やってるんですか、ゴンさん」

「何って……アルカみたいに、やってみただけど。　上手いかないね」

「誰が、いつ、どこで、木に手を叩きつけて粉碎するなんて荒業をやったんですか？」

私が見せたのは、離れた場所から衝撃波を叩きつける方でしょうが！」

右手を押さえるゴン。

手加減無しで叩き付けたらしく、ゴンの手は赤くなっていた。

その手に触れてアルカが軽く弾くと、ゴンは痛みを抑えるために屈んでしまう。

ゴンの手。

それにタオルを巻いて、アルカの指導は続く。

しかし、その後もゴンは無茶を続け、ウイングやビスケの偉大さをアルカは感じていた。

ハンター試験一回目 3 (後書き)

”居合い拳”

元ネタ『魔法先生ネギま!』タカミチ・T・高畑

ソルディック家(前書き)

一次試験

ゴン不合格

キルア合格

ゾルディック家

電波が届かなかった携帯電話。

それが届くようになったものの、キルアに連絡はできなかった。

アルカの番号は着信拒否に設定されているため、掛けても送っても弾かれてしまう。

（ そういえば、最近はカルトも電話に出なくなったなー ）

「ゴンさん、携帯電話を買いましょう」

「え？ なんで？」

「ゴンさんが電話すれば、キルアお兄ちゃんは出ると思います」

「アルカが電話すると、キルアは電話に出ないの？ なんで？」

「わざと言ってるんじゃないやありませんよね？」

アルカはゾルディック家に電話する。

ホテルと同じように、ゾルディック家を通して通信契約を行った。

国際配送されてきた携帯電話をゴンに渡し、キルアに電話を掛けてもらう。

『おー、ゴン、ケータイ買ったのか』

「うん。アルカが買ってくれたんだ」

『おい、ゴン、気をつけろよ。』

そのケータイ、ぜったい盗聴器とか発信機とか仕掛けられてるぜ』

「ええ！？」

「それ私じゃないよ！ お母さんだよ！

いや、待てよ。まさか、また？」

「ねえ、キルア。ハンター試験はどうなったの？」

『今、最終試験会場に飛行船で向かってるところ。明け方には着くんだってさ』

「ゴンさん。 ”イツ君は残ってるか” って聞いてくれませんか？」

「ねー、キルア。アルカが ”イツ君は残ってるか” だって」

『ああ、残ってるぜ。』

まったく、やっとアルカから離れられたと思ったら、今度は兄貴かよ。嫌になるぜ』

（ 最終試験か。

” 記憶” によると、もしイルミとキルアが当たると精神フルボッコにされるんだっけ。

俺が最終試験まで進んでいれば、イルミの邪魔なんて簡単だったんだがな……。

一次試験で俺が失格になっちまったから、止めることもできないのか）

「ゴンさん。 ”ゴンさんと一緒にゾルディック家で待ってる”

って、キルアお兄ちゃんに伝えていただけませんか？」

「ねー、キルア。俺と一緒にゾルディック家で待ってる” って

アルカが伝えてくれって」

『はあ？ なんでゴンが家に来るんだよ？』

「来年のハンター試験で合格できるように、アルカが特訓してくれるんだって」

『おいおい、なに考えてんだよ。危ないから止めとけって』

「モーマンタイ、モーマンタイ」

「アルカが ”モーマンタイ、モーマンタイ” だつてさ」

『分けが分かんねえ言葉で誤魔化すんじゃないやねえええええ！』

「じゃあ、頑張つてね、キルア」

『え？ ちよつ、おまつ おうつ』

通話が終る。

すぐに携帯電話のネジを外して、アルカは中を確かめる。

すると、他の部品を押し退けて詰め込まれた謎の部品が見つかった。

「怪しい……怪しすぎます。これは間違いなく盗聴器か発信機です。」

でも、下手に触れば携帯電話を壊してしまうし……どうしたものでしょう」

「うーん。アルカのお母さんって、ミトさん以上に心配性なんだね」

「ここまで昔はなかったんです。」

でも、次男のミツ君が ”失踪” してから、物凄く極端になつてしまいました」

「キルアが三男だから……ミツ君てキルアとアルカのお兄さん？」

「ええ、ミルキといいます。まあ、”豚” で十分ですけどね。」

ちよつと待つてください、ゴンさん。

今更ですが、これが盗聴器ならば、こちらの会話は筒抜けの可能性があります」

「でも、バッテリー……だっけ？ 外してるよ」

「お母さんのことですから、どこかにサブバッテリーを設けているはずですよ」

紙とペン。

それをアルカは取り出して、文字を書く。

そしてゴンに見せたものの、ゴンには読めなかった。

「アルカって字下手なんだね」

「仕方ないでしょう！」

私のステルス迷彩は、外からの光も反射するから見えないんです
！」

アルカは静かに立ち上がる。

部屋の扉まで移動して、ゴンを手招きした。

ゴンが来ると扉を閉めて、小声で話し始める。

「ゾルディック家に戻ったら新しいのを用意しますので、我慢して
いただけませんか？」

「いいよ。今の所、キルアしか登録してないしね」

「いえ、相手の狙いはソレなんですけど……」

「聞かれて困る会話なんてしないから大丈夫だよ」

「そう言つと思いましたよ……」
「ゴンさん」

携帯電話を戻す。

そして寝る前に、アルカは飛行船の予約を行った。
すでに入国許可は下りているので、翌朝にホテルをチェックアウトする。

「そういえば、ゴンさん。 ミトさんに電話はしましたか？」

今の内に、そこら辺の公衆電話を使って連絡しておきましょう」

「うーん。 でも、家って電話繋がって無いんだ……」

「そうだったんですか……」

パドキア共和国に入国。

飛行船からバスに乗り換え、ククルーマウンテンのあるデントラ地区へ向かう。

そこから、案内ついでに観光バスに乗り、ゴンと共にゾルディック家へ向かった。

試しの門。

高層ビルほどの高さがあるゾルディック家の門。

まずは、この門を開けなければ客人として認められない。

「さて、ゴンさん。 これは試しの門といいます」

アルカが門に触れる。

すると、それだけで門が開いた。

256トンもあるとは思えないほど、全ての扉が簡単に開いてしまふ。

(開いたあと自動で閉まるってことは、閉めるだけの力があるってことだからな)

「これを開けることが、ゾルディック家の敷地を踏むための最低条件です。」

まず、これをゴンさんには開けてもらいます。

他の家に比べて、かなり大きい玄関の扉とでも思ってください。

これを自力で開けられないと、後々凄く困りますよ。

出入りする度に、ゴンさんを誰かが手伝わなければなりませんからね。」

「ああ、他の場所から不法侵入はしないでくださいよ。

そんなことをすると、キルアお兄ちゃんを狙う賞金首ハンターと間違われますからね。」

まあ、ゴンさんを中心にに入れるために私が開けてあげても良いのですが。」

どうしますか？」

「いいよ。ちゃんと自分の力で開けられるようになるから。」

「そうですか。それじゃあ、シークアントさん。この子はゴン・フリークスといいいます。」

門を自力で開けられるようになるまで、訓練してあげてください。

「任せましたぜ、アルカ様」

使用人の家へ向かう。

そして、もう一人の使用人にゴンを紹介した。

ゴンをシークアントに任せ、その使用人とアルカは話をする。

「コレでどうでしょう」

「とんでもない！ アルカ坊ちゃまから、お金はいただけませんよ」

「そうは言っても、ゴンさんの生活費は必要になるでしょう。」

執事室に申請しても、たぶん下りませんよ。」

ちなみに、使用人のゼブロさんとシークアントさんが出するのはダメです。

私が出さないと、きつとお母さんが手を出してきます」

「そうですね。それでは、ゴンさんの生活費としていただきます」

門へ戻る。

すると、ゴンが扉を押していた。

しかし、一の門すら開くことはない。

その前で扉を開く。

わざわざアルカは片手で扉を軽く叩いた。

当然、吹っ飛びそうな勢いで扉が開き、ゴンの目は点になる。

（俺の念能力ってギミック相手には強いな。意味ないけど）

改造された携帯電話。

それを執事に返して、弟のカルトを探すアルカ。

しかし、屋敷の何所にも見当たらないため、仕方なく母を探す。

「おかえりなさい、アルカ」

「ただいま、お母さん」

「アルカ……カルトちゃんが……カルトちゃんが……」

「そうそう。カルトがいないんだけど、どうしたの？」

「家出したの！」

「なんですとー!?!？」

「アルカとキルがハンター試験へ行った次の日にいなくなってたの！」

きつと、アルカとキルがいなくて寂しかったのね」

「だったら、俺達と会ってるはずだけど　会ってないよ」

「ああ……発信機も外されてしまつて……カルトちゃんが心配だわ」

「俺と違つて、キルア並に天才だから大丈夫だよ」

「ああ……でも、もし何かあつたら……！」

「ぶつちやけ兄弟の中で一番強いんだし大丈夫だよ」

「そつえば、アルカ。　イルミから連絡があつたけど、ハンター試験に落ちたようね」

「主に、そのイツ君のせいで失格になつただけだね」

「この際だからハンターになつた方がいいわよ。　来年も頑張りなさい」

「遠まわしに、”家を出て行け”　つて言ってる気がするのは俺の気のせいかな。」

「それでも、キルアお兄ちゃんの代わりに当主になれるように頑張つてるんだけど」

「アルカ、貴方には才能がないわ。　あるのは馬鹿みたいに多い才一ラだけよ」

「なんでハツキリ言うの！？　もうちょっと気を使ってよ！」

「ヒトには向き不向きがあるのよ。」

「自分の夢が実現可能かどうか、よく考えてみなさい」

「だからつてキルアお兄ちゃんを家に縛るのはダメだね。」

「ああ、全然ダメだ」

「仕方ない子ね。　貴方は昔から我がままだわ」

「誰かさんに似たんだよ」

「誰も貴方に、そんな ” 役割 ” を与えてはいないのよ？」

「他の誰でもない、俺が俺に与えたんだよ、お母さん。」

それと、その言葉はキルアお兄ちゃんに言ってあげてよ。きつと喜ぶから」

アルカは部屋を出る。

その後ろ姿は念能力により見えない。

その代わり光が反射され、アルカの背中に母の姿が映っていた。

「嘘ばかりね、アルカ」

試しの門へアルカは戻る。

ゴンの相手をしつつ一日を過ごし、夜になると屋敷へ戻った。

そんな生活をしているとキルアが戻り、門の前でゴンと再会する。

「ゴン……」

暗い目。

そんな目をしたキルアは逃げる。

試しの門を開けて、その中に入っていった。

「キルア！ どうしたの！」

ゴンが叫ぶ。

門の向こうにいるはずのキルアの名を呼ぶ。

しかし返事はなく、キルアの気配は屋敷へと遠ざかっていく。

「キルアお兄ちゃんの様子が変ですね」

「キルアもハンター試験に落ちちゃったのかな……」

「一度試験に落ちたくらいで、キルアお兄ちゃんは落ち込みませんよ」

（そもそも、ゴンと違ってキルアは遊びで受けたからな。

試験に落ちたとしても気にしないだろう）

「私が扉を開けましょう。　　ゴンさんはキルアお兄ちゃんを追ってください」

「うん！」

扉を開ける。

すると、キルアは驚き、物凄い勢いで走り出した。

それをゴンが追いかけるものの、キルアとの距離は離れていく。

（俺が捕まえるわけにはいかないからなあ。　　頑張れよ、ゴン）

91

執事邸を横切る。

すると、ゴンの前に執事が立ち塞がった。

説明するのが面倒だったアルカは執事を払い退け、ゴンを屋敷まで進ませる。

キルアが屋敷へ入る。

続いてゴンも入ろうと試みたものの、鍵が掛かっていた。

それに気付いたゴンは、殴って破るために拳を扉へ叩きつける。

「あー、ゴンさん」

扉が鳴る。

アルカが呼びかけたものの、聞こえていなかったらしい。

今のゴンでは何百発打ち込もうと破れない扉の前で、ゴンは痛みに悶えていた。

（居合い拳の時には木を殴ってたな。

なんで対象物が壊れること前提で殴るんだ？）

「扉は殴って開けるものじゃありませんよ。

ほら、鍵を開けましたから早く行ってください」

鍵が開く。

すると、ゴンは再び走り出した。

勘を頼りに屋敷を走り回り、キルアの部屋の前へ辿りつく。

「どうしたんだよ！ キルア！」

「どうやって入ってきたんだよ、馬鹿ゴン！」

「犯人は私」

「余計なことするんじゃないよ！」

「どうしたんだよ！ キルア！」

布団が膨らんでいる。

その中にキルアはいた。

それを剥がそうと、ゴンが頑張っている。

（あいつは子供か いや、子供だったな）

「イツ君に何か言われたんでしょう ほら、顔に杭刺してた奴ですよ、ゴンさん。」

それで、なに言われたんだ？」

「アルカには関係ねえだろ！」

（ ということは、やっぱり何か言われたのか ）

「じゃあ、ゴンさんには関係あつたりする？」

「……ねえよ」

「関係あることだそうですね、ゴンさん」

「ねえつたら、ねえよ！」

「イツ君のことなんぞ、お見通しだ。」

邪魔するのが分かってたから、私もハンター試験を受けたんだから。

どうせ、” 自分に勝てなければゴンを殺す ” とか何とか言われたんだらう。

キルアお兄ちゃんじゃイツ君には ” まだ ” 勝てないからね」

（ まあ、イルミがハンター試験を受けたのは、本当に偶然だったんだけどな ）

「だったら、なんで一次試験で落ちてんだよ！」

「仕方ないだらう！？ 文句は邪魔をしたイツ君に言ってよ！」

私に出来ないことは沢山あるんだ！」

「それで、どうなったの？」

「 ” 勝てない戦いはしない ” それがゾルディック家の方針です。相手が誰であろうと向かっていくゴンさんとは正反対の方針ですね。」

キルアお兄ちゃん？」

「……降参した。俺じゃ兄貴には勝てない」

「ねえ、キルア」

ゴンが拳を握る。

さきほど扉を殴ったため、血が滲んでいた。

どうやら、居合い拳の練習で付いた傷が破れてしまったらしい。

「難しくて、よく分かんない」

「アホかあああああ！」

「まあ、そうでしょうね」

アルカは黒板を持ち出す。

その前に、ゴンとキルアを座らせた。

そして、ハンター試験後の流れについて、ゴンのために説明を始める。

「最終試験は、トーナメント方式だったんだね？」

これは通常の物とは違い、敗者が上がっていく。

つまり、不合格になるのは1人なんだ。

その最後の一人になるまでは、何度負けても問題はない」

「ルールは”相手に参ったと言わせること”だったんだね？」

そこでイツ君は”ゴンを殺したくなければ自分に勝て”と言った。

当然、ここでキルアお兄ちゃんが”参った”と言つと、ゴンが殺されてしまう。

ところが、キルアお兄ちゃんは”参った”と言って降参してしまった。

まあ、その場に本人がいないのに、そんな事言われても、実感が湧かないよな」

（ それにしても、ゴンとキルアの関係を見抜くとはな。

イルミは一次試験の会場で、初めてゴンを見たはずなのに。

まさかストーキングされてたんじゃないだろうな。

もしかして、ハンター試験で会ったのは偶然じゃ無かったのか？
）

「なぜ、キルアは ” 参った ” と言ってしまったのか？

それは私が今から体感させよう」

アルカはオーラを引き出した。

近くにいたゴンとキルアは体を震わせる。

そして、固まっているゴンに対して、キルアは壁際まで飛び退いた。

「それは、一次試験の時の……」

「そう。キルアお兄ちゃん達の動きを、近くにいただけで止めてしまうほどの ” 殺気 ” 。

これで ” 参った ” と言わないヒトは……いや、ここに一人いたか。

しかし、よほど鈍感なヒトでもない限り、それは無い。

だから、この殺気に当てられて ” 参った ” と言わないヒトは普通はいない」

（ 俺のオーラは、イルミのオーラよりも禍々しく ” なる ” か
らな。

ぶっちゃけ、キルアの頭に埋まっている針の影響の方が大きい
んだけど
）

「一言で今回起こったことをマトメよう。
つまり、イツ君はチートを使って、キルアお兄ちゃんをハメたんだ」

「なんじゃそりゃあああああ！」

「ハハハ、ワロス。」

そんなことより、ゴンさんが話に付いていけなくてオーバーヒートを起こしてるよ」

ゴンが倒れている。

それをキルアは起こし、正気に戻らせた。

その間にアルカは黒板を退場させ、元の位置へ戻る。

「まあ、降参したのも結果的に良かったんだよ。

もしもキルアお兄ちゃんがゴンさんのために降参しなかったとしても、

そうだったら、イツ君は本当にゴンさんを殺そうとしたらどうか
らね」

（それに、これでゴンに対しての感情を、キルアも自覚できた
だろうしな）

「……俺は自分の身を守るために、ゴンを切り捨てた。

あの時、兄貴と戦うことだって出来たはずなんだ」

「いや、無理だから。せめて弟の私に勝てるようにならないと無理だから。

むしろ、キルアお兄ちゃんがイツ君と戦って勝ったら落ち込むよ」

「なんだよ、それ！俺、兄弟の中で一番弱いのかよ！」

「うん、もちろん。」

ちなみに” 1番強いのは末子のカルト” ね。
次に私……じゃなくて長男のイツ君、四男の私、三男のキルアお兄ちゃんだから」

「ひでえチート」

（ そうなんだよ、チートなんだよ。 キルアを除く兄弟全員が念
を使えるからな ）

「まあ、キルアお兄ちゃんは私と違って才能があるよ。 だから、
すぐに強くなる。」

来年のハンター試験に備えて、ゴンさんと一緒に特訓でもしたら
どう？」

「めんどくせー……でも、ちょっと、やる気は出てきた」

ゴンとキルア。

次の日から、キルアも試しの門へ通い始めた。

ようやく試しの門を開けられるようになったゴンが、キルアの相手
をしている。

（ でも、2人だけじゃ経験が足りないな。

天空闘技場辺りへでも行かせるか？

でも、200階以上は念能力者の領域だからな。

誰か……念能力を教えられる人を探さないと ）

アルカは仕事へ向かう。

ミルキモカルトもいないため、依頼が溜まっていた。

それらは、暗殺者と言うよりは殺戮者のようなアルカのための鉄砲
玉依頼ばかりだ。

（ 自分は一步も動かず仕事を片付けられる豚君の偉大さが分かる
な ）

専用の高速飛行船。

それに乗って、目的地へ向かう。

今回は無事に帰ってこれるように祈りつつ、アルカは旅立った。

ソルディック家（後書き）

” アルカ「ダメだね ああ、全然ダメだ」”

元ネタ『うみねこのなく頃に』右代宮戦人

” 犯人は私”

元ネタ『ポートピア連続殺人事件』犯人はヤス

天空闘技場（前書き）

ゾルディック家

ゴン

キルア

天空闘技場

アルカは悩む。

念の教員が決まらない。

仕方なく、執事と相談することにした。

（ハンター協会は、正規のハンターにしか教員を派遣しないし。

野良ハンターは念能力を習得しているか分からないし。

習得してる奴らにはハンター証がないと接触できないし。

ハンター証不要って奴らは、漏れなく偽者だし。

そもそもネットで、念の情報に対してフィルタリングするんじ

やねええええええ！）

「豚君なら外せるんだろっけど……まあ、いない奴に期待しても仕方ないか」

飛行船が着陸する

ゾルディック家に戻ってきたアルカは執事邸へ向かった。

出来れば執事の中から選びたいものの、無理だろっけなとアルカは思う。

「申し訳ありません」

「まあ、お父さんの許可がないとダメでしょうね。

でも、それならば、お父さんに相談した方が早いですね。

お父さんに伝言は出来ますか？

” キルアお兄ちゃんに念を教えたいから教員を雇いたい” って

「申し訳ありません、アルカ様。

キルア様には念について悟られないように申しつけられておりま

す」

「それに引つ掛かりますか……じゃあ、やっぱり外部の人間を雇うしかありませんね」

「アルカ様、差し出がましいのですが、教員の相場は御存知ですか？」

「いえ、どいつもこいつも値段応相談ばかりで分かりませんでした」

「最低10億ジェニーほどで御座います」

「……先に天空闘技場へ行った方が良いかも分かりませんね」

アルカの小遣い。

仕事をしていると言っても、一月に10万ジェニーほどだ。

ゾルディック家的に言えば家事のようなものなので、あまり多くは貰えない。

（ いや、それでも10万は破格か　ダメだ、金銭感覚が狂ってやがる。

ゴンの携帯だって何気に20万ジェニーだったからな。

レオリオの治療代の方が安かったくらいだ　）

執事邸を出る。

これで、アルカは最初から考え直さなければならなくなった。

無料に近い値段で、派生技までマスターしている相手を探し直さなければならぬ。

（ ”記憶” にあるのは、居場所の分からないビスケくらいか。

ウイングはダメだろうな。　ゴンとキルアのどちらもハンター

じゃないし。

それに、おそらくウイングは協会専門のハンターだ。

ハンター協会以外からの依頼は受けられないのかも知れない。
いや、ダメだとしても念のため聞いてみるか？

天空闘技場へ向かう。

低階層でウイングと一緒にいるはずのズシの試合を探した。

そして、ズシを見つけると、その側にいるウイングへ話しかける。

「今は、他の方の面倒を見ることはできません」

ウイングが言う。

そう言っつて、弟子のズシと共に去っていった。

それを見送ったアルカは、すぐにゾルディック家へ戻る。

ゴンとキルア。

アルカが戻ると、2人はいなくなっていた。

例のサイトにアクセスして、アルカは2人の行き先を調べる。

（ 天空闘技場です。 本当にありがとうございます。 ）

なんて言っつてる場合じゃねえ！

こうなったら、俺がやるしかないのか？

いや、ダメだ……！！

俺のオーラで目覚めさせたら、どんな後遺症が残るか分かった
もんじゃない

再び、天空闘技場へ向かう。

ゴンとキルアの名前を探して、アルカは2人に会いに行く。

すると、ゴンが元気に声を掛けてくれたものの、キルアは嫌そうな
顔をしていた。

「また付いてきたのかよ……」

「ちょっと訳ありだね。」

ねえ、キルアお兄ちゃん。なんで前来た時は200階までだったと思う？」

「知らねーよ」

「200階より上のクラスは、私やイツ君のように ” 殺気 ” が使える奴ばかりなんだ」

「マジかよ」

「マジだよ」

「まあ、大丈夫だよ。 ” そのための対策 ” も考えてきたから」

ゴンとキルア。

2人は順調に勝ち進む。

そして、キルアが200階への挑戦権を手に入れた。

観客席。

そこで、キルアが勝った瞬間をアルカは見ていた。

しかし、我に帰って観客席を飛び出すと、200階へ先回りする。

「待たせな〜」

エレベーターが開く。

そこから現れた2人に、アルカは念を飛ばした。

すると、ゴンとキルアの体が念に押され、それ以上進めなくなる。

「ここを〜、通すわけには〜、いかないぞ〜」

「どうして、アルカ？」

「……そんなことだろうと思ったぜ」

「ゴンさん、これが ”念” と呼ばれている事は知っていますか？」

「うん」

「そんな訳ねーだろ。」

ただの ”燃” で、前へ進めなくなる訳がねえ」

「その通り。これは燃える方の ”燃” じゃない。念じる方の ”念” だ。」

これを習得していない2人を、ここから先へ通すわけにはいかな
い」

「燃えるほうの ”燃” ？ 念じる方の ”念” ？」

「じゃあ、習得する方法があるんだろーな」

「燃える方の燃を教えてくださいた人がいるだろう？」

その人に ”200階クラスへ上がる” って言えば、念を教え
てくれるはずだ。」

急いでよ、キルアお兄ちゃん。 今日中に登録しないと失格にな
るからね」

「ウイングさんのこと？」

「 ったく、本当かよ」

ゴンとキルアは去る。

しばらくすると、2人は戻ってきた。
しかし、念を纏っている様子はない。

「ダメだった」

「はい？」

「 ” 弟さんに聞け ” だつてさ」

「えー？」

「 どうするんだよ、アルカ」

「 どうするんだよって言われても、私は教えられないよ」

「 何でだよ。」

忿つていうのは良く分かんねーけど、使えるんだろ？」

「 私のオーラを2人に当てたら死ぬんじゃないかな？」

「 じゃあ、どうするんだよ」

「 仕方ないなあ……私がウイングさんを説得してみるよ」

ゴンとキルア。

2人と共にホテルへ向かう。

ウイングの弟子であるズシの部屋に着くと、アルカは体内のオーラを引き出す。

禍々しいオーラ。

それがアルカの体を覆い、さらに広がっていく。

ウイングは持っていた本を落とし、ズシのオーラは掻き消されていた。

「 見ての通りです。 私は全くオーラを制御できません。

常に全力全開、何とか形を保っている状態です。

もし私が2人の精孔を空ければ、何かしらの障害が残るでしょう。なので、ウイングさんに向けて欲しいんです」

「しかし、精孔を開けるのは危険なことです。念を保つことが出来なければ、2人は命を落としてしまうでしょう。」

「まだ2人は子供です。もう少し大人になってからでも遅くはありません。」

「その意見には大賛成です」

「おい、アルカ。説得するんじゃないのかよ」

「意思能力や判断能力の低い子供に念を覚えさせると、碌な事にならないよ。」

念に頼って基礎の能力は落ちるし、慢心して馬鹿になるし。

……まあ、もともと馬鹿なものも偶にいるけど」

「お前も子供だろーが」

「私は生まれ付きだったから、別にいいの」

「ああ、なるほど……これが念を覚えた子供の悪い例か」

（ たしかに、アルカさんの状態は、あまり好ましいものではありませんね。）

” 何とか形を保っている ” という言葉通りです。

” 纏 ” で留めきれないオーラが漏れてしまっていますね

）

アルカとキルアの会話。

それを眺めながら、ウイングは考える。

” 蛇口が壊れているのに、元栓を全開にした水道 ” のように、オーラが溢れ出ていた。

「ゴン君とキルア君に念を教えることはできません。」

しかし、アルカさんに四大行を教えることはできません」
「はい？ 私ですか？」

「ええ。四大行を修めれば、より効率よく念を扱うことができますよ」

「うーん。でも、家へ帰ったら片付ける仕事が溜まっているでしょうから、時間が……」

「仕事って……アルカさん。何歳なんですか？」

「キルア君がお兄さんなのは、この前聞きましたけど」

「”9歳”です」

「いったい、どんな仕事をしているんですか？」

「暗殺？ いや、殲滅？」

「休みなさい」

「だが断る」

ウイングとアルカ。

言い争っている2人をゴンとキルアは眺めていた。

しかし、200階への登録時間が迫っていたため、それをキルアが止める。

「じゃあ、ウイングさん。 ”2人がハンター試験に合格したら教える”
という条件はどうでしょうか？」

「そうですね。それは良い考えです。」

2人がハンター試験に合格したら、念を教えて差し上げましょう」

「えー！ そんなー！ 今教えてくれてもいいじゃん……」

「そんなに待てつかよ。試験は来年じゃねーか」

「仕方ないだろう。今年はハンター試験に落ちたんだから。」

「どんな過程だったにせよ、ゴンさんとキルアお兄ちゃんは不合格だったんだよ」

「アルカは失格だったけどな」

「ゴン君、キルア君。」

ハンターライセンスは、これ以上ないほどの一人前の証です。

それを手に入れることが出来ない間に、危険な念を教えることはできません」

「でも、キルアは今日登録しないと、もう二度と200階には行けないんだよ」

「むう……それは確かに問題ですね。」

「やっぱり、キルアお兄ちゃんだけ念を習得させましょうか」

「ズシ、確認したいことがあります。」

「私はアルカさんに怒っても良いと思うのですが、どう思いますか？」

「押忍、師匠。今の話の流れは、誰が聞いても変だと思えます」

「アルカさん、何を考えているんですか？」

「この期を逃せば、キルアお兄ちゃんは200階クラスへ挑戦できなくなります。」

「そうなれば、キルアお兄ちゃんの成長の芽を摘んでしまうことになるでしょう。」

「ゴンさんと違って暗殺術と言う下地がありますし、力押しでも勝てるかもしれません」

「馬鹿ですか貴方は。」

例え下地があっても、覚えたばかりの念を扱えなければ話になりません。

最悪の場合、キルア君の未来を奪ってしまうことになります」

「それでもキルアお兄ちゃんがやりたいと言っのならば、やらせた方が良いと思います」

「ズシ、こういう方々を何と言うのでしたか？」

「押忍、師匠。ブラコンだと思います」

アルカとウイング。

一瞬だけ息が合っていた2人の姿は、そこに無い。

その問答を見ていたキルアは、ズシの発言を聞いて一気に機嫌が悪くなった。

「あ、キルア！」

キルアの後をゴンが追っ。

その声でアルカは気付き、キルアの気配を探す。

しかし、すでにキルアは扉を抜け、部屋の外へ出ていた。

「よくやりましたね、ズシ。後でジューズを買ってあげましょう」

ズシを褒めるウイング。

アルカは2人を追っ、部屋を出る。

しかし、キルアから殺気を向けられ、扉の前で止まってしまった。

（ どうしてこうなった！ どうしてこうなった！

いや、これで良いのか。

念を覚えて、うっかりグリードアイランドに突っ込まれても困

るしな)

アルカは落ち着く。

ウイングからアドレスを聞き、携帯電話に登録した。

そのアドレスをゴンに送ろうとして、執事に渡した携帯電話のことを思い出す。

(やべっ。 ギンの携帯電話を預かったままだったな。

まあ、ファイトマネーを使えば携帯電話の一つや二つは買えるだろう)

「ウイングさん。 2人のアドレスは分かりますか？」

「そういえば聞いていませんね。 明日にでも聞いておきましょう」

「じゃあ、2人への連絡をお願いします。」

それでは、夜遅くに失礼しました。 おやすみなさい」

「まだ貴方には言いたいことがあるのですが、聞く気はないのですようね」

「本当に忙しいんですよ」

アルカは扉を閉める。

キルアとゴンの後は追わず、ホテルを出た。

再び天空闘技場へ向かい、試合の予定表を眺める。

(ヒソカと分身使いの試合を見せたいけど……15万ジェニーか。

俺じゃ買えないし ま、いつか。

ぶっちゃん、キルアとゴンの方が、俺よりジェニー持ってるしな。

200階まで行ったから、軽く4億は持っているだろう)

「俺も登りたいな……でも、俺だと超特急で200階まで送られるかもしれないな。」

「200階以上はファイトマネーが出ないから意味ないし……やっぱり帰るか」

アルカは飛行場へ向かった。

切り崩した貯金を使って、チケットを買う。

お手軽に金を貯める方法を考えながら、アルカはパドキア共和国行きの船へ乗った。

天空闘技場（後書き）

” アルカ「待った！ せった！ な」”

元ネタ『メタルギアソリッド2』ソリッド・スネーク

” アルカ「だが断る」”

元ネタ『ジョジョの奇妙な冒険 Part4』岸边露伴

幻影旅団（前書き）

ハンター試験

クラピカ合格

ゴンとキルアは不合格

幻影旅団

ヨークシン。

そこへ、ゴンとキルアは移動した。

天空闘技場で手に入れたファイトマネーを、2人は使いつもりなのだろう。

（ ギンは一次試験で落ちたし、キルアは最終試験で落ちた。

だから、幻影旅団についてクラピカから聞いていない。

聞いていたとしても、”ある犯罪組織” 程度のものだろう（

高速飛行船。

それに乗ったアルカは考え込む。

そうしていると、アルカの服から電子音が聞こえた。

ゾルディック家専用無線機。

それを服の中から取り出して、スイッチを押す。

すると、アルカの父祖に当たるゼノの声が聞こえた。

『仕事じゃ。ヨークシンへ来い』

通信が切れる。

アルカが返事をする間もない。

しかし、なぜ召集が掛かったのかは予想が出来た。

（ 十老頭の暗殺依頼か？

まだ地下のオークションすら始まってすらいなのに。

依頼主は、幻影旅団の団長であるクロロなんだろうけど……早過ぎないか？（

ゾルディック家へ戻る。

高速飛行船を降りて、通常の飛行船に乗り換えた。
それでアルカはヨークシンへ向かい、まずは宿を探す。

(ついでにキルア達を探したいな。

でも、オークションのせいで人が多いからな。

この中から探し出すのは無理か)

数日後。

再び呼び出しがあり、アルカはセメタリービルへ向かった。

正面玄関で身元の確認を行い、父のシルバや祖父のゼノと合流する。

(いやいや、待てよ、おかしいから。

なんで旅団団長ルートなんだよ。

俺の担当は十老頭暗殺ルートだろ、常識的に考えて)

「お前が今まで相手をしてきた連中は雑魚じゃ。

今回の標的は、気を抜けば死ぬぞ」

「はい、お爺ちゃん」

(雑魚の基準が間違ってる、絶対間違ってる！

こいつら、俺が6歳……いや、この前7歳になったんだっけ。

あれ？ という事は、もしかして)

「ついに私を当主と認める気になったんですね！」

「何を言っとるんじゃない、お前は」

「だって、お父さんやお爺ちゃんと同行できるんですよ。

次期当主候補のキルアお兄ちゃんですら、体験していないことじ

やないですか！

「お前を当主にするくらいなら、”ミルキ” を当主にするわい」

「(. . .)」

落ち込むアルカ。

それに対して、ゼノは冷たい視線を向けている。

すると、今まで口を閉じていたシルバが、アルカに声をかけた。

「生き残ることだけを考える」

「はい、お父さん」

「シルバ、お前は上からじゃ。 儂は下から行くぞ。

お前は……適当にやっとなれ」

「はい、お爺ちゃん」

(ずいぶん適当だな。 いったい何のために俺を呼んだんだ？

まあ、俺の力を示すには良い機会か。

団長を相手にして生き残れば、それなりの評価は貰えるだろう
しな)

モニター室。

そこは、雇われた暗殺者達の待合室になっている。

しかし、アルカが訪れた時には、暗殺者達の姿は無かった。

「ゾルディック家？ 何か身分を証明できるものはあるか？」

「むう……” 10歳 ” ですから……」

(小さいとは思っていたが…… 10歳？

相手はマフィアを潰すような奴らだぞ。

ゾルディック家は何を考えているんだ？」

「困ったな 身分証が無いのなら、君を拘束しなくちゃならないんだ」

「そういえば、正面玄関にいた方々になら確認して頂きました。その時は、父と祖父が近くにいましたので」

「じゃあ、確認するから、大人しくしていてくれよ」

連絡が行われる。

その間、部屋の警備員がアルカに銃を向けていた。しかし、確認が取れると、銃はホルスターへ戻される。

「それで、何の用なんだい？」

「印刷用紙とペンが必要なんです」

「ああ、良いけど。 何に使うんだい？」

「ターゲットの足止めに使おうかと……私では力不足ですから」

「そうかい。 気を付けるんだよ」

空いている部屋へ移動する。

必要な物を手に入れたアルカは、急いで紙に書き始めた。

念能力のせいで勝手に弾かれ、飛んで行こうとするペンを押さえる。

（ ” ウボオーギン” ” 緋の目” あれ？

やべえ……ウボオーギンがクラピカに殺されたか確認してねえや。

現在進行形で旅団が暴れているのは、ウボオーの追悼のためだったはずだけだ。

今から調べる時間は無いし、別の情報を書くか。
旅団員の念能力の情報は……ダメだな、死亡フラグだ

紙を前に悩むアルカ。

いずれ団長はシルバやゼノと戦い始める。

それまでに、アルカは準備を終えなければならない。

（クールだ、クールになれ！

団長に能力を盗まれた予言念能力者はいるのか？

もう少し早く思い付いていれば、予言能力者について調べられたものを……！）

（幻影旅団の団員はビルの周囲で暴れている。これは間違いない。

その理由は、追悼のためか？ それとも、死体を偽装するための陽動か？

ダメだ、分からん）

考え込むアルカ。

その思考を、いつもの癖で呟いている。

しかし、集中しているアルカは気付いていなかった。

「ゾルディック家への依頼……十老頭の暗殺。

このセメタリービルで戦うことも計算の内だったのか？

いや、違う。

いくら団長でも……団長だからこそ、シルバやゼノと戦う危険は回避するはずだ。

幻影旅団の団員を、ゾルディック家は暗殺したことがあるらしいからな。

ならば、少なくともシルバやゼノと戦うのは予定外だったはずだ」

「いいや、予定通りだ」

声が聞こえた。

寒気を感じたアルカが振り返る。

すると、扉の隙間から大きな風呂敷が広がってきていた。

(これは……！ ” ファンファン 不思議で便利な大風呂敷 ” クロス)

床を弾く。

アルカの体は部屋の奥へ飛んだ。

すると大風呂敷は外れ、その奥から団長が現れる。

(なんて、ここに団長が！)

いや、団長は暗殺者を倒しながら地下へ向かっている。

当然、その暗殺者には俺も含まれてるわけだ。

なんてこった、なんで地下で会うとばかり、思い込んでたんだ

)

(ずいぶん派手に念をバラ撒いている奴がいると思っただが。

畏という訳ではなかったらしいな。 ” 絶 ” を使えない

のか？

だとすれば、ずいぶんと粗末な暗殺者だ)

大風呂敷が消える。

団長は片手に持つ本を捲った。

その隙にアルカはオーラを開放し、空気を弾く。

(せめて一撃入れて……逃げる！)

アルカの拳。

それは回避されつつも、団長の頬を掠った。すると、掠った部分から力が送り込まれ、団長の頬を弾く。

（強化系ではないな。力を操作している？）

団長の頭に衝撃が響く。

しかし、団長は頭部に念を集めて防御していた。そのため、ダメージは通っておらず、次の念能力が発動する。

チエーンジエイル
”束縛する中指の鎖”

鎖が具現化する。

それはオーラを隠され、姿を消した。壁に突っ込んだアルカを自動追尾し、その足に触れる。

アルカの念能力が消えた。

気圧がアルカを失速させ、重力が床に体を落とす。そうして顔面を床に強打すると、アルカの足に鎖が巻き付いた。

（強制的な絶？ それに、この形。まさか、クラピカの念能力か？

いや、クラピカの ”中指の鎖” ならば、旅団以外の相手には使えないはずだ。

もし使えばクラピカが死んで、盗んだ念能力も使えなくなるかな）

アルカが床を転がる。

すると、その頭に団長の蹴りが入った。

念による防御が出来ない体で、念による攻撃を受ける。

（マジ、パネエ）

アルカの意識が無くなった。
残された体が鎖から投げ出される。
しかし、床に転がった体は動かず、その頭は窪んでいた。

アルカの意識が戻る。

すると、そこはゾルディック家にあるアルカの部屋だった。
しかし、その事には気付かず、アルカは混乱しつつも体の状態を
エックを行う。

（念能力は使えるな。でも、ここは何所だ？
不味いな……俺の能力だと目が見えない上に、文字も読めない
からな。

勝手に体を動かされると、さっぱり分からん）

扉が開いた。

そこからカルトが現れる。

すると、アルカは警戒を強め、体を飛ぶす準備を始める。

「何してるの」

「……ここは、どこですか？」

「ゾルディック家だよ」

「てつきり、蜘蛛に捕まったのかと思いました」

「死んだヒトを、わざわざ捕まえるわけないでしょ」

そのトリッパーが何所まで知っていたかが問題ですね。
もしかすると、私達の ” 記憶 ” よりも先を知っていたのかも
しれません」

「お兄様が旅団と関わるとすれば、それはゾルディック家に関係し
ているはずだよ。」

お母さんが、幻影旅団と同じ流星街の出身だからね」

「じゃあ、キルアが帰ってこないようにするべきですね。」

まあ、それなら私が当主になれば済む話なんですけど。

もし、団長が関わってくるとすれば、キルアの代わりに戦う可能
性もあるわけですか」

「可能性を考え始めたらキリがないよ」

「そーですね」

会話が途切れる。

そこで、アルカは床で寝ていることに気付いた。

体を起こしてベッドに座り、立ったままのカルトと向き合う。

「…………お父様が呼んでる」

カルトが言う。

そして、カルトは目を逸らした。

そのまま背を向け、部屋から出て行く。

「それと、あまり死なないで」

カルトの声が聞こえた。

それに対して、アルカが返事をしようとする。

しかし、カルトは高速移動術を使い、物凄い勢いで部屋から離れて

いった。

（クーデレだとおおおおお！？）

驚くアルカ。

いつもは、キルアから邪険にされている。

そのため、意外性を突いたカルトの一撃は大きかった。

（危ない……危ない……あやうく”意識を持っていかれる”所だった）

アルカは部屋を出る。

石畳の廊下を通り、シルバの部屋へ向かう。

すると、入口と向き合うように置かれたソファーにシルバが座っていた。

「座れ」

アルカはソファーに座る。

しかし、オーラを引き出したままでは跳ねてしまう。

そのため、アルカはオーラを抑えなければならなかった。

（横に座るくらいなら、正面から向き合ったほうがマシだな。

今すぐ逃げ出したい気分だ……！）

「体の調子はどうだ」

「特に違和感はありません」

「そうか」

「はい」

「はい！」

「例え、お前が生きていても、標的が生きていれば失敗だ。そのため、技を磨け。お前に足りない部分を補え」

「分かりました、お父さん」

部屋を出る。

すると、キキヨウがアルカを待っていた。

接触すると念能力によって弾かれるにも関わらず、アルカを抱き締める。

「ああ、アルカ。貴方が死んだと聞いて、心配したのよ」

「大丈夫だよ、お母さん。カルトがいれば、俺は死なないから」

「そんなこと言って……危なかったのよ。」

パパが少しでも遅れていたら、念能力を封じられたまま本当に死んでいたんだから」

「むう……次は気を付けるよ」

「気を付けるだけではダメよ。さあ、一緒に頑張りましょう」

「え？ あれ？ ちょっと、お母さん。なにを頑張るの？ おーい」

アルカを持ち上げるキキヨウ。

抱き締められたままアルカは運ばれる。

そして、アルカを鍛えるために、キキヨウによる訓練が始まった。

ハンター試験二回目(前書き)

ヒソカ合格済

イルミ合格済

レオリオとクラピカは死亡済

ハンター試験二回目

第288期ハンター試験。

アルカのナンバープレートは50番だった。

去年よりも受験者の数は減り、500名ほどになっている。

（ 去年が1500人くらいだったから、3分の1か。
減った原因は去年の1次試験だろうな ）

ゴんとキルア。

2人も会場に入ってきた。

アルカは気付かれないように様子を探る。

（ フハハハハハ。 こんなに ” 絶 ” が便利とはな。
空気が弾かれないから呼吸も楽になったし、良い事尽くめじゃ
ないか ）

ベルが鳴る。

すると、試験官が現れ、受験者の案内を始めた。

しかし、その試験官が物凄い速さで歩き始めたため、マラソンにな
ってしまっ。

アルカは走る。

その体は久しぶりに、重力や空気の抵抗を受けていた。

しばらくは順調だったものの、やがて筋肉が悲鳴を上げ始まる。

（ しまった……半年くらいじゃ、筋肉まで間に合わなかったか…
… ）

遅れ始めるアルカ。

何とか前に進もうと思うものの、体から力が抜けてしまう。やがてゴンとキルアの姿が見えなくなり、他の受験者にも追い抜かれていく。

「おいおい、こんな所でへばってんのか？」

「才能無いんじゃないの？」

「さっさと消えろよ、クズ」

罵声が聞こえる。

アルカが振り向くと、兄弟らしき3人組がいた。
”記憶” にもあるアモリ三兄弟と気付き、アルカの機嫌が悪くなる。

(こいつらを見ると、グリードアイランドの爆弾魔3人組を思い出すな。

なんか……こつ……見てるだけでイラッとする。

殺つていいよな。 殺つていいよね？ よし、殺ろう)

床を弾く。

アルカは念能力は使わず、肉体の力で加速した。

そして、3兄弟の側まで跳び上がると、その頭を蹴り飛ばす。

「イモリ！」

「てめえ！」

残った2人。

蹴り飛ばされた1人に、その片方が気を取られている。

そちらを目指してアルカは走り、跳ね上がりつつ片腕で頭を殴り飛ばした。

「調子に乗るんじゃないねえ！」

最後の1人。

それがアルカに殴りかかった。

その腕をアルカは掴み、相手の顔に拳を当てる。

2人は首の骨が折れていた。

最後の1人は、顔の骨が窪んでいるものの生きている。

しかし、起き上がることも出来ず、床で顔の痛みを悶えていた。

「キルアお兄ちゃんやゴンさんだったら、ここで終わりなんですよけど。」

「ダメなんです、私。」 貴方達みたいな連中” を見ると、本当にイライラして……」

最後の1人。

その顔にアルカは足を乗せる。

その痛みには相手は暴れたものの、アルカの足に踏まれて動けなかった。

踏み潰す。

それを放置して、アルカは走り始めた。

それは道の中に放置されたため受験者達に踏まれ、擦り傷だらけになっていく。

湿原へ入った。

アルカは後部の集団に、何とか追いついている。

危うく不合格になる所だったが、湿原を無事に通るためにも体力は残しておきたい。

湿原マラソン。

けっこう必死にアルカは走る。

今回はヒソカもイルミもないため、それなりに安全だった。

2次試験。

豚の丸焼きと寿司を作れば合格となる。

しかし、”記憶”と違い忍者がいないため、アルカしか寿司の作り方を知らない。

（念のため練習しておいて良かったな！。

でも、試験官へ渡しにいくと目立って、キルアにバレちゃうな。

まあ、いつまでも隠し通せるものじゃないし、仕方ないか

）

「試験官さん、出来ました」

「あら、早いわね。どれどれ　ダメね、やり直し」

落ち込むアルカ。

膝を折り、両手を地面に突く。

その様子を見た2人目の試験官が、試験官に声をかけた。

「ねえ、メンチ。　ちよつと厳しすぎるんじゃないかな」

「あんたが甘過ぎるのよ。」

さつきも、食べた豚の丸焼きを片っ端から合格にしてたじゃない。

ほら、いつまでも落ち込んでないで、さつさとやり直してきなさい」

料理場へ戻るアルカ。

さりげなくキルアの様子を探る。

すると、キルアと目が合ったものの、いつものような殺気を感じなかった。

「キルアー、お腹減ったよー」

「だからって御飯食うなよ、ゴン。」

あの性格悪そうな試験官が、こっち見てるぜ」

（あれ？　もしかして俺に気付いてない？

そういえば、ステルス迷彩もとい念能力を解いたのは5年ぶりか。

外見が変わりすぎて、俺と分からなくても不思議じゃないな）

アルカは寿司を作る。

しかし、再び作り直すことになった。

そうしている間に二次試験が終わり、試験官が合格者を発表する。

翌日。

受験者達は3次試験の会場に到着した。

飛行船で高い塔の頂上に下ろされ、下まで降りてくるように言われる。

ゴンとキルア。

2人は隠し扉を見つけ、下へ降りた。

その近くをアルカは調べて、3つの扉を見つける。

（これは扉が繋がってるのか？

オーラを広げれば分かるんだろうけど、そんな器用な事はできないからな。

まあ、たぶん繋がっているんだろう。

レオリオもクラピカもないし……良さげなのを2人見繕って

下りるか)

辺りを見回す。

すると、弓使いのポツクルと二刀流のアゴンがいた。

”記憶” では2人とも三次試験をクリアしていたため、誘うために近寄る。

「あのー、下へ降りる扉を見つけたんですけど一緒に降りませんか？」

「……なんで俺なんだ？」

「他の方々では足手纏いになるからです」

「……いや、止めておこう。 他を当たってくれ」

ポツクルが断った。

続いて、アゴンにも断られる。

アルカが話しかけた瞬間から、2人は警戒していた。

(1次試験で3人組を殺したのを見られていたのかもしれないな。困ったな……このままじゃ、足手纏いがゴンやキルアと一緒になっちまう)

(いや、待てよ。

そもそも、試験に変な奴が混じってないか確認しに来たんだっけ。

2人が不合格になっても問題ないんだから放っておくか)

考え直すアルカ。

そのまま塔の端に近寄って飛び下りる。

アルカを目で追っていたため、その光景をポツクルとアゴンは見て

しまった。

(“一緒に降りる” って、そういう意味かあああああ！)
(危なかった……危うく身投げに巻き込まれるところだった……
！)

アルカは落ちる。

空中でオーラを解放し、念能力を発動した。

そのまままで落ちて、落下の衝撃を地面に向ける。

土砂が舞い上がった。

アルカの体が地面に埋まる。

体が地面に挟まれ、アルカは動けなくなった。

(えーと……引力を上によって、土の圧力を反転させて……)
アルカは操作する。
すると、体が地面から打ち出された。
すぐに操作を切り、空気との摩擦を利用して地面へ下りる。

『受験ナンバー50番、合格。 経過時間、30分』

アナウンスが聞こえる。

当然、塔の中には誰もいない。

どうしたものかとアルカは悩み、塔の外へ散歩に出かけた。

(3次試験は3日くらい掛かるか。
まあ、丁度いいか。 そろそろ、オーラを絶つのも限界だった
し。

今日は休み、明日は練習、明後日は休みにしよう。

オーラを出した状態で練習しても、楽すぎて意味が無いからな
)

3日後。

3次試験が終わり、4次試験が始まる。

アルカが塔へ戻ると、ゴンとキルアも合格していた。

受験生は船に乗る。

小さな島へ運ばれ、箱から札を引く。

全員が引き終わると、試験官が説明を始めた。

「札に書かれている番号が、それぞれのターゲットだ。

自分のプレートが3点、ターゲットのプレートが3点、その他の
プレートは1点とする。

試験期間は一週間。

試験終了後に合計6点のプレートを持っていけば、4次試験は合
格だ」

受験者達が辺りを見回す。

そして、受験者達は自分のプレートを外し始めた。

アルカもプレートを外して、自分の引いた札を確認する。

(25番か……さっぱり分からん。

探すのも面倒だし、適当に狩るか。

そうすれば、他の受験者も釣れるだろうし、丁度いいな)

森へ入る。

オーラを絶ったまま、気配を消す。

そうしていると、受験者が森へ入ってきた。

受験者が通り過ぎる。

それをアルカは陰から見ていた。

隠れている位置から離れていたため、アルカは手を出せない。

（面倒だな……正面からやるか？

いやいや、暗殺者が正面から挑むのはダメだろう）

チャンスを待つアルカ。

オーラを完全に絶えていないため、数人に気付かれてしまう。

さすがに4次試験まで残る受験者はレベルが高く、なかなか手を出せない。

（念能力を使えば楽なんだけど……それじゃ、意味が無いしなあ）

アルカは少し無理をする。

運悪く近くを通った受験者を襲い、プレートを奪った。

そして再び隠れていると、アルカは受験者に監視され始める。

（あー。もしかして、奪ったプレートを狙ってる奴か。

その発想は無かった。

このまま後2枚のプレートを集めると、追跡者も2人追加されるわけか……）

「だあああああ！

もういい！ 止めた！ 面倒だ！」

アルカは跳ぶ。

慌てて移動を始めた受験者を殴り倒す。

その瞬間、ポケットに入っていたアルカのプレートが奪われた。

ポケットに入れていたプレート。

それが釣り針に引っ掛かり、引き抜かれる。

アルカがプレートを目で追うと、そこにはゴンが立っていた。

（ プレートを胸に付けていたのなら兎も角。

ポケットに入れていたプレートを引き抜いた……だと？ ）

ゴンの釣竿。

それは、去年までの釣竿ではなかった。

竿が金属製で、手元にギア付きのリールが付いている。

（ 見掛けは普通の竿だが。

あんな物が付いていたら音が鳴るはずなのに、聞こえなかったな ）

去年までの釣竿。

それは、前回の試験でヒソカに殴られ、折れてしまった。

どうやら、天空闘技場で稼いだジェニーを使って、釣竿を新調したらしい。

ゴンが逃げた。

木の幹を蹴って上り、木から木へ飛び移る。

しかし、アルカは追わず、ゴンが去っていくのを眺めていた。

（ まさか、ゴンからプレートを奪うわけにもいかないし。

まあ、自業自得か ）

溜息を吐く。

自分のプレートは諦め、6枚のプレートを集めることにした。

足を止めると狙撃されるためアルカは歩き続け、受験者を狩っていく。

（イルミは土に潜ってたっけ。

念能力があるから、土を貫通する攻撃も防げたんだろうな。

でも俺がやると、オーラを出した瞬間に土が吹っ飛ぶからダメだな）

一週間後。

アルカは集合場所に向かった。

そこにはゴンとキルア、それと3人の受験者が集まっている。

アルカは視線を感じた。

振り返ると、プレートを奪ったゴンがアルカを見ている。

アルカのプレートを奪ってしまったため、ゴンはアルカを警戒していた。

（あれ？　なんで俺がヒソカ的立ち位置になってるんだ？

まあ、確かに前回の試験で、ヒソカと同じように失格になったけどさ。

正体をバラした時に気不味いから、誤解は解いておくか）

「その少年。

こうして4次試験に合格できたことですし、私は気にしていませんよ。

だから、そんなに警戒しないでください」

「……あれ？　この声って」

「アルカじゃねーか！」

アルカが止まる。

まさかバレるとは思っていなかった。

そのため反応が遅れてしまい、2人の言葉を肯定することになってしまう。

「脱げてんじゃねーか！」

「脱げ……なに？」

「ステルス迷彩だよ！」

「脱げないって言ってたじゃねーか」

「ああ、お母さんに手伝ってもらったんだよ」

不機嫌になるキルア。

その横で、突然悪化した雰囲気にもゴンが混乱している。

そうしていると、キルアがゴンの手を引っ張り、アルカの前から去っていった。

（ん？ 引っ張っていった？）

（キルアがゴンの手を引っ張っていった？）

「なん……だと……？」

アルカが振り向く。

すると、間違いなくキルアとゴンは手を繋いでいた。

振り返ることなく進むキルアに、こちらを振り向こうとしているゴンが引っ張られている。

（また一步キルアが遠くなったか。

でも、それこそがキルアと”カルト”の望む道だ）

グーのサイン。

それをアルカが送ると、ゴンが頷いた。

意味は通じていないのだが、アルカとゴンは互いに気付いていない。

最終試験。

それは負け残り式トーナメントだった。

負けた受験者が上がっていき、最後の一人が不合格となる。

ゴンVSキルア。

2人は向かい合っている。

やる気のゴンに対して、キルアは嫌そうにしていた。

「なー、ゴン。俺、降参して」

「ダメ！」

ゴンが構える。

試合が始まると、ゴンはキルアに近付いた。

それに対して、キルアは距離を保つように離れる。

ゴンの拳が抜かれる。

それは、いつぞやの居合い拳だった。

拳の射程範囲に入ったキルアに、それが叩き込まれる。

（ すっかり、居合い拳を殴りつけるものとして使ってやがる。

近接じゃ予備動作で攻撃方法がバレバレなんだけどなー ）

防ぐキルア。

しかし、ゴンの馬鹿力によって、キルアの腕が軋む。

普通なら折れている所だが、キルアの腕は受けきった。

「どうせ降参する気ないんだろ、ゴン」

「そんなの分かんないよ。戦う前から諦めちゃダメだって」

「ゴンが言っても説得力ねーよ!」

ゴンが攻める。

居合い拳は最初だけで、後は普通に攻めていた。

キルアも最初の居合い拳だけ受けて、後の攻撃は受け流している。

(相手を倒すんじゃないかって ” 参った ” と言わせないと勝てないからな。

これは長期戦になるか?)

「このままじゃ決着つかねーな」

「じゃあ、ちゃんとやってよキルア」

「よし、条件付けようぜ。」

相手の体に一発入れた方が勝ちな」

「えー、俺もう一発入れたじゃん」

「ノーカン、ノーカン。」

手足じゃなくて、胴だよ」

「ずるいよー、キルア」

キルアが攻撃に転じる。

それはゴンの攻撃よりも早い。

そのため、やがて間に合わなくなり、ゴンの肩に一発入った。

「はい、しゅーりょー」

「ぶー」

（ハッハッハッ。

ゴンは島暮して相手がいなかったからな。

それに対して、キルアは対人の訓練を何年もしているからな。

（ 年季が違うのだよ！ ）

ゴンとアルカ。

見知らぬ受験者相手に、アルカは余裕で勝つ。

ゴンは開始始めの居合い拳を避けられたものの、根気勝ちに持ち込んだ。

ハンター試験が終る。

合格したゴン、キルア、アルカは講習を受けた。

その後、ハンターライセンスを受け取り、受験者達は解散する。

「じゃあ、合格お祝いに行こうよ。 キルアお兄ちゃん」

「しねーよ。 行こうぜ、ゴン」

「え？ でも、アルカが」

「いいんだよ。 放っとけ」

「あ、待ってよキルア！」

「じゃあ、またねアルカ！」

キルアに引き摺られていくゴン。

それを見送rittつ、アルカは落ち込む。

しかし、2人が見えなくなると気を取り直し、最終試験の会場へ戻った。

ネテロ会長。

カメラアアント侵攻 1

電腦ページにアクセスする。

アルカはオークションサイトでグリードアイランドを検索した。

現在は出品されていないものの、一月で100本近い出品記録が残っている。

(100本しか発売されていないんだから、ほとんど偽者だな。

問題なのは、最近出品数が増えていることか。

バッテリーが死んだからだろうな)

(今は4月、カメラアアントが動き出す頃だ。

期限はカメラアアントが拡散する6月まで。

それまでに、2人をグリードアイランドへ避難させなければならぬ)

(しかし、金が無い。

そして、落札できたとしても偽者である可能性が高い。

9月のヨークシンオークションを待っていたら時間切れだ。

ゴンのことだ。 絶対突っ込む。 間違いなく自分から地

雷を踏みに行く)

「詰んだ……もうダメポ」

アルカは溜息を吐く。

現在、ゴンとキルアは天空闘技場にいる。

ウイングに念を教えてもらい、そろそろ ”凝” を習得している頃だろう。

（ 6月には ” 発 ” の修行に入って、キメラアント編の始まり始まり ）

「タイミングが良すぎるんだよ、バカヤロオオオオオ！」

思わず叫ぶアルカ。

それは石の壁に当たり、ゾルディック家の廊下へ響いていく。そうして気力を使い果たしたアルカは、床を這いベッドに上った。

（ 今のゴンとキルアじゃ戦力にならない。 だから前線には出さないだろう。 ）

それよりも、一番ヤバイのはカイトのアレだ。

アレを見たら確実にゴンがブチ切れる。 そして変身する。

キルアと仲違いする ）

「そつだ。 カイトを助けに行こう」

アルカは起き上がる。

パソコンの電源を消した。

部屋を出て、執事邸へ向かう。

（ 今頃カイトは何処かの森で、生態系を調査してるんだっけ。そこに行ければ話が早いんだけど、さっぱり分からん。 ）

仕方ないから、キメラアントの上陸地点であるネオグリーンライフ自治国へ行ってみるか ）

「ちょっと蟻退治のためにネオグリーンライフ辺りへ行ってきました。

機械類は持ち込めないので、鳥を連れていきますね」

「承知いたしました。 すぐに御用意いたします」

(蟻……退治？)

いや、よく考えてみればアルカ様は8歳。
そのような気分になることもあるのでしょうかね)

(なんてだろう。)

笑顔の執事に殺意が沸く)

アルカは鳥を借りる。

そして、飛行船でネオグリーンライフへ向かった。
入国審査を受け、ネオグリーンライフへ入国する。

ネオグリーンライフ。

そこは機械を使わず、自然のままに生活する国。

そのため、機械により作られた加工品も持ち込むことはできない。

(ネオグリーンライフの代表が食われた頃か。)

今ならばカメラアンの護衛軍も産まれていないだろう。

護衛軍が産まれる前に、女王を殺さないとな)

(しかし、蟻の巣の場所が分からない。)

通信手段が手紙しかないからな。

カメラアンの人が襲っても、その情報が手に入らない)

(もうすぐ派遣されるハンター達を待つか？)

しかし、よく考えたらポツクルがハンター試験に合格してないからな。

どのチームがカメラアンの人と接触するかは分からない。

そもそも部外者の俺に、プロハンターは情報を渡してくれないだろう。

下手に追い回すと、ハンター達の邪魔をすることになる)

「まったく……ポツクルめ。」

「空気過ぎて試験に落ちたのが分からなかったぞ」

考えるアルカ。

念能力を使って、物凄い速度で歩いている。

その後を、馬に乗ったナビゲーターが必死に追いかけていた。

振り返るアルカ。

すると、涙目のナビゲーターが馬に乗っていた。

もう一人ナビゲーターが付いていたはずなのだが、その姿は見当たらない。

「アルカさん！ 待ってください！」

「あー、すみません。」

「この国に来れた嬉しさで、ついついスキップしてしまいました」

「ついついで、ヒトの限界を軽く突破しないでください。」

「さっきなんて、明らかに宙を飛んでいましたよ」

「またまた御冗談を。」

「ネオグリーンライフの皆さんならば、この3倍は早く歩けるのでしょう？」

「聞いていますよ。満月を見ると大猿化するとか」

「しませんよ！」

2人一組のナビゲーター。

アルカが入国した際、この2人は勝手に付いてきた。

本人達はボランティアのつもりで、アルカにとっては監視役となっている。

（ナビゲートの範囲外は立入禁止だからな。邪魔だから置いて行くか？

でも、ナビゲーターがいないと、現在位置が分からないからな。

地形を把握するまで、もうちょっと連れ回すか）

「そういえば、もう一人のナビさんは何所に行かれたんですか？」

「馬が潰れてしまったので、近くの検問所へ向かいました」

検問所。

それは村に必ず一つはあり、外国人に食料を提供する。

それと同時に、ナビゲーターを連れていない外国人を通報・捕獲するための施設だ。

「アルカさん。もう一人が追いつくまで、次の村で待ちましょう」

「そうですね。まだまだ先は長いみたいですし、そうしましょう」

次の村へ向かう。

しかし、その村には人気が無かった。

常に人がいるはずの検問所にも、ヒトの姿が見当たらない。

壊れた家。

それがアルカの目に入った。

土を塗られた壁が壊れ、壁の中に積まれた石が見えている。

「これは……野生動物に襲われたのでしょうか」

ナビゲーターがヒトを探している。

しかし、血の跡が残っているだけで、どこにもヒトはいなかった。

さらに、どの家にも食料は残っておらず、代わりに食い散らかされ

た跡が残っている。

（ 当たり前だな。

キメラアントの女王のために、殺して連れて行かれたか ）

「アルカさん。 どうも様子が変です。

村から出来る限り離れて、キャンプを張りましょう」

「今からですか？ その間に日が沈んでしまいますよ」

「そうかもしれませんが。

しかし、ここで一晩過ごすよりも良いと思います」

「じゃあ、そうしましょう」

村から離れる。

その間に日が沈み、辺りが薄暗くなった。

アルカ達は足を止め、焚き火の用意を始める。

「アルカさん、おねがいします」

「任せてください」

乾いた木の枝。

それに木の棒を当てて、高速で擦った。

すると、瞬く間に煙が昇り、枝と棒が燃え始める。

しかし、棒が折れた。

熱を持っている部分が、アルカの顔を目掛けて飛ぶ。

思わず念能力で弾いたものの、運悪く棒の先端が顔に当たってしまった。

「熱っ！ 熱う！」

転げ回るアルカ。

その様子を見て、ナビゲーターは驚く。痛みが引いて気を持ち直したアルカは、消えてしまった火種を見て落ち込んだ。

「……草を焼べてくださいよ」

「すみません。何というか……意外で。」

いつものアルカさんなら平気な顔をしていそうですから」

予備の棒を握るアルカ。

すると、どこからか笑い声が聞こえた。

ナビゲーターは辺りを見回し、相手の場所が分かっているアルカは無視する。

「今の聞こえましたか？」

「何がですか？」

「誰かが笑っているような、変な音が聞こえませんでしたか？」

「そーですか？」

ナビゲーターが尋ね、アルカが答える。

そうしていると、大きな羽音が聞こえ始めた。

茂みの中から大きな蜂が浮き上がり、その姿をナビゲーターとアルカに見せつける。

「ヒヤッハア！ お前ら」

アルカが跳ぶ。

大きな蜂が言い終わる前に、その頭部を殴り飛ばした。

蜂と擦れ違ったアルカが着地すると、羽の付いた胴体が地面に落ちる。

「蜂がいるようですね。少し場所を移動しましょうか」

「いやいや、蜂じゃないでしょうアレは！ 蜂なんですか？」

地面に落ちた蜂。

頭が蹴り飛ばされたため、胴体と尻尾が残っている。

その2つには見るからに蜂っぽい黄色と黒の縞々模様と、尻尾に針が付いていた。

「少し大きいようですが、蜂ですね」

「こんな蜂、私も見たことがありませんよ」

「突然変異かもしれませんが。」

もしかすると、さきほどの村も、この蜂に襲われたのかもしれないね

「だとして、大変ですね」

「こういう時のマニュアルは？」

「まず現在位置をチェックします。」

ナビゲーターの1人が先行して本部へ戻り、連絡しなければなりません。

残りのナビゲーターもストレンジャーを連れて、本部へ戻らなければなりません

「つまり、私も戻らなければならない」

「はい」

「だが断る」

アルカは地面を弾く。
そして、新たに近付いてきていたキメラアントを蹴り飛ばした。
蹴られたキメラアントの頭が破裂し、昆虫の甲殻で覆われた体が地面を転がる。

「どうやら、一匹だけではないようです。」

「ここは私に任せて、先に戻ってください」
「そんな　！」

キメラアントの甲殻。

それをアルカは引き剥がす。

そして、それをナビゲーターに渡した。

「これを証拠として持って行ってください。」

ちなみに、私の心配をする必要はありません。

そんな事より、自分の心配をしてください。

危なくなっても、私は助けませんからね」

「助けてくれないんですか!？」

「当たり前じゃないですか」

「酷い、酷すぎる！　最低だ、このヒト！」

ナビゲーターが叫ぶ。

どうやら、キメラアントを見て興奮しているらしい。
アルカは溜息を吐いて、ナビゲーターと向き合った。

「落ち着いてください。」

そして、早く逃げてください。」

巻き込まれても知りませんよ?」

「絶望した！」

優しい言葉を掛けてくれると期待した自分に絶望した！」

ナビゲーターが馬に飛び乗る。

そして、涙を流しながら去っていった。

それを見送ったアルカは、キメラアントの気配と向き合った。

アルカはオーラを引き出した。

閉じ込められていたオーラが、アルカの体から噴き出す。

それを纏うと、禍々しいオーラによってアルカの気配が大きくなった。

「さて……まずは暴れるか」

星の引力。

それを操作すると、アルカは宙に放り出された。

すぐに操作を切り替え、大気との摩擦を利用して下降を始める。

（飛び上がり過ぎたか。

必要な分だけベクトルを操作できれば良いんだけど……俺には無理だな。

下手すると、大気圏を突破しかねん）

消えたアルカ。

その姿を探すキメラアント。

その一体を見つけたアルカは、落下する勢いを保ったまま踏み潰した。

土が舞い上がる。

その音はキメラアント達の注意を引く。

そして、踏み潰されたキメラアントは、アルカの下で潰れていた。

アルカの姿が消える。

その衝撃で植物が倒れ、弾かれた空気が音を出す。

その先では、アルカに体当たりされたキメラアントが破裂していた。

キメラアントの体液。

それがアルカの服に飛び散って染みになる。

しかし、アルカの体に当たると弾かれ、地面に落ちていった。

（ むう……服に付いちまった。

おまけに、よく見たら服が千切れかけてるし。

これ以上オーラを引き出したら、”服が弾け飛んで全裸”になっちまうな）

考え込むアルカ。

その間にも体当たりを繰り返す。

その度にキメラアントが潰れ、服もボロボロになっていった。

キメラアントの動きが変わる。

危険を感じたキメラアントが、アルカの気配から遠ざかろうとしていた。

アルカを目標していたキメラアントが、アルカから遠ざかるように進み始める。

（ さて……追撃、追撃 ）

アルカはオーラを絶つ。

すると、キメラアントに混乱が起きた。

急にアルカの気配が消えてしまったため、注意が疎かになってしまう。

闇から手が伸びる。

それはキメラアントの頭を捻り潰した。
声を出す間もなく、次々とキメラアントが狩られていく。

「なんだよ……何なんだよ……」

怯えるキメラアント。

うっかり呟いた言葉が、アルカの耳に入る。

そして、背後から現れた手により、キメラアントの頭は握り潰された。

（ そろそろ かな？ ）

アルカは動きを止める。

残るキメラアントの気配は一つになっていた。

逃げ惑うキメラアントを確認し、アルカは後を追う。

キメラアントとアルカ。

その2つの気配は、瞬く間に遠ざかっていく。

後にはバラバラになった死体と、心地よいとは言えない体液の臭いが残った。

キメラアント侵攻 1 (後書き)

” アルカ「満月を見ると大猿化」”

元ネタ『ドラゴンボール』サイヤ人

” アルカ「だが断る」”

元ネタ『ジョジョの奇妙な冒険 Part 4』岸边露伴

” ナビゲーター「絶望した！」”

元ネタ『絶望先生』糸色望

キメラアント侵攻 2

一人残ったキメラアント。

瞬く間に仲間を殺され、逃げ出した。

その後を、オーラを絶ち、気配を絶った状態のアルカが追う。

キメラアントの速度が落ちる。

するとアルカは、オーラを千切って飛ばした。

そのオーラはキメラアントに当たり、再びキメラアントは走り出す。

（ 巢までキメラアントが持たないかもしれないな。

一度離れて休憩させるか？

いや、キメラアントが落ち着いたら、巢へ案内している事に気付かれるか。

限界まで走らせて、片付けた方がいいな ）

やがてキメラアントが倒れる。

少しずつ近寄り、アルカは相手の音を聞いた。

その呼吸音は激しく、苦しさで土を掻く音も聞こえる。

（ 立ち上がるかと足掻いている ）

それは演技かもしれない。

しかし、アルカはオーラを引き出した。

キメラアントに気付かれるのも構わず、地面を弾く。

狙うのは頭部。

キメラアントは手足が切れても、行動できる。

そのため、アルカは頭部を狙い、一撃で仕留めることにした。

頭を踏み潰す。

その血はアルカの足に当たると弾かれた。頭を潰されたキメラアントの体は、それでも地面を掻き続けている。

その時、殺気がアルカを取り囲んだ。

そして、体液や肉体の一部が、一斉に撃ち出される。

同時に、アルカの上空で玉が破裂し、白い糸が辺りに散った。

（ 敵か！？ ）

瞬間、アルカはオーラを引き出す。

すると、飛んできた物は弾き返された。

白い糸も、アルカに触れることなく宙を舞う。

（ やべっ。 直接攻撃はされてないよな？ ）

近くに敵はいなかったけど、キメラアントが念能力を手に入れたら洒落にならない ）

アルカは気配を探る。

しかし、気配で分かるのは、相手の形程度だった。

そのため、遠距離攻撃を弾き返されて倒れている者との区別が付かない。

それは大きな隙だった。

そこへ、サソリのキメラアントが毒を飛ばす。

しかし、それは先程の攻撃と同じように弾かれ、逆にキメラアントを狙い撃つ。

毒を回避するキメラアント。

それはキメラアントの師団長だった。
そこらに転がっている戦闘兵とは違い、返ってきた攻撃を余裕で回避する。

（ どういうことだ！

なぜ、攻撃が返ってくる！ ）

その心の内では焦っていた。

奇襲は成功したはずなのに、結果は失敗。

標的であるアルカの姿は消え、全ての攻撃が弾き返されていた。

おまけに上空の糸。

兵隊長である蜘蛛のキメラアントが放った糸。

それは、相手を捕らえることなく、地面に落ちていた。

周りに蜘蛛の糸が広がっている。

それを超えることが出来るのは、蜘蛛のキメラアントだけだ。

他のキメラアントが糸を踏めば、足に付いて行動が制限されてしまう。

『 パイク！ 糸を回収しろ、これでは近付けん！ 』

蜘蛛のキメラアントに信号を送る。

しかし、返事はなく、サソリのキメラアントは辺りを見回す。

すると、蜘蛛のキメラアントはヨダレを垂らしながら、蜘蛛の糸の中心へ向かっていた。

（ あの……バカが！ 食事をするにしても時と場所を選べ！ ）

蜘蛛のキメラアント。

それは大きく口を開け、アルカを丸呑みにしようと試みる。

その頭には、目の前の子供を丸呑みにするという考えしかなかった。

その頭をアルカが叩き落す。

8本足にヒトの胴体が付いた蜘蛛の体も、地面に落ちた。

アルカによつて星の遠心力を下向きにされたため、引力と合わさつて体が地面に埋まる。

（ そんなバカな、パイクが一撃で……！ ）

アルカは足下を探る。

そこには蜘蛛の糸が落ちていた。

しかし、今は念能力で弾いているため付かない。

（ 何を置いても防がなければならぬのは、キメラアントが念能力を習得することだ。

念能力を使うのならば、一撃で確実に倒さなければならぬ。

逆に、使わなければ戦い易い ）

（ 糸の外まで念能力を使い、そこから、あのサソリのキメラアントに突っ込むか。

そこから先はオーラを抑えよう ）

アルカが地面を弾く。

それに気付いたサソリのキメラアントが迎え撃つ。

しかし、サソリのキメラアントは考えを変え、アルカの攻撃を全力で回避した。

（ 何が起こっているのかは分からない。

だが、これだけは言える 奴の体に触れるだけでアウトだ！

）

キメラアントの頭部を、アルカは掴み損ねる。

それに対して、キメラアントは尻尾から毒を飛ばした。

すると、アルカの頬を掠って傷が付き、そこから毒が滲み込む。

（ どういうことだ？ ）

なぜか効いた攻撃。

それに驚きつつも、キメラアントは尻尾を振るう。

毒が効く時間を稼ぐため、少しずつアルカから離れる。

「だー！ 面倒だ！」

アルカが大声を上げた。

それに驚いた瞬間、キメラアントの頭部を握る。

再び念能力を発動したアルカが、その頭部を握り潰した。

様子を探っていた戦闘兵。

それらは師団長が倒されたのを見て、動きを止める。

しかし、すぐにアルカの姿を視界から外し、逃げ始めた。

（ キメラアント相手に念能力無しは無謀か。

オーラ無しの身体能力じゃ、キメラアントの方が上だな ）

アルカは溜息を吐く。

キメラアントが数匹、この場に残っていた。

襲い掛かってくるキメラアントを、これまでと同じように片付けていく。

「俺達が、こんな生物なんか……！」

「ヒト科ヒト属ヒト種、人間だ。」

元になった生物の名前くらい調べておけ」

最後の一匹を踏み潰す。

アルカは頬の傷を摘んで毒と血を絞り出した。

辺りを探り、キメラアントの集団が逃げた方向を調べる。

（ それにしても、なんで待ち伏せされてたんだ？

もしかして最初の時に、倒し損ねた奴がいたのか？ ）

走りながらアルカは考える。

しかし、その予想は間違っていた。

キメラアントは信号で会話できることを、アルカは忘れていた。

（ まあ、いいや。 どちらにしても、念能力の使用は控えよう。

次にキメラアントと会ったら、全力で逃げるしかない。

キメラアントが念能力を覚えたら、どうしようも無いくらい厄介だからな。

せめて、巣の場所が分かれば良いんだけど ）

やがて真夜中を過ぎる。

キメラアントを追い続けたアルカ。

その前方に、急な斜面の山が見えた。

アルカは木に登る。

そして、枝と葉の間から、その山を見た。

凸凹している斜面を見て、キメラアントの巣が思い浮かぶ。

（ いつの間にか近くまで来てたんだな。

よし、朝になるのを待とう)

アルカは後退する。

木から木へ飛び移り、巣から離れ始めた。

迂回しながら風下へ向かい、辺りを警戒しつつ朝を待つ。

(むう……安心したら急に眠気が……ってアホか！

今寝たら死ぬ、今寝たら死ぬ、今寝たら死ぬ　ますます眠くなっただな)

アルカの体が倒れる。

結局、眠さに耐え切れず、アルカは寝ていた。

そうしていると、何かの気配を感じ、アルカは目を覚ます。

(やべっ。　寝てたのか？　寝てたんだろうな)

寒気を感じる。

その瞬間、アルカはオーラを引き出した。

すると、頭部の辺りで何かが弾かれ、飛んできた方向へ返っていく。

(狙撃か？　狙撃だろうな。

危なかった。　何気に死ぬ所だった)

木の陰に隠れる。

そこから、アルカは様子を探るために顔を出した。

すると、その顔に針が当たり、念能力によって弾き返される。

(針か。　針だな。　どう見ても針だ。

毒とか塗ってそうだな、弾いてるけど。

待てよ。　さっき潰したサソリのカメラアント。

あいつが飛ばしてきた液体って毒だよな。
もしかして、そのせいで眠かったのか？

アルカは一つの謎を解いた。

その間に狙撃手は移動し、再びアルカを狙う。

しかし、飛んできた弾丸は、アルカのオーラに触れると弾かれてしまふ。

（ こっちの能力を調べているな。

さて、別に放つて置いても良いんだけど。

とりあえず、移動しよう。 同じ場所に居るのは危険だ

木陰に隠れつつアルカは進む。

狙撃手を中心に、円を描くように移動した。

時には一気に長距離を移動し、相手を掻き乱す。

（ 目が良いつてレベルじゃないな。

狙撃してるのは、どんな奴なんだ？

ここまで正確に位置を把握できるなんて普通じゃないぞ

見えない狙撃手。

その姿を探すアルカ。

そのために、少しずつ前進を始めた。

森の雰囲気が変わる。

何者かの気配を感じ、アルカは様子を探った。

すると、耳と尻尾の付いた形が、アルカの脳内に浮かび上がる。

キメラアントの王。

その護衛軍に属するネフェルピトー！。

その体には、禍々しいオーラが纏わり付いていた。

（ ヤバイ。 猫ヤバイ。 まじでヤバイよ、マジヤバイ。
猫ヤバイ。

まず強い。 もう強いなんてもんじゃない。 超強い。
強いとかつても「キルア20人ぶんくらい？」とか、もう、そ
ういうレベルじゃない。

ってというか、なんでオーラ纏ってんNooooooooo!!
（

「ボクのを試させて
」

「お断りします!!」

アルカはオーラを引き出す。

そして、重力のベクトルを操作した。
すると、アルカの体は空へ向かって吹っ飛ぶ。

アルカの足を猫のキメラアントが掴む。

しかし、手加減を誤り、その足を千切ってしまった。

そのため、猫のキメラアントは残念そうな顔をしながら、森へ落ち
ていく。

（ 簡単に千切れすぎだろう？

いつから俺の足は粘土みたいに柔らかくなったんだ？

ってというか、痛いよ！ 千切れてるよ！
（

地上が遠くなる。

すぐにベクトルを操作するアルカ。

しかし、瞬く間に大気圏を突破していた。

念能力への刺激が変わる。

それにより、ここが宇宙であることを感じていた。

そのため念能力は解除せず、操作していたベクトルを元に戻す。

（ここで息したら死ぬな、明らかに）

アルカは地上を見下ろす。

すると、全く何も見えなかった。

いつも通り、オーラが光を反射しているため見えるわけが無い。

（アウト！ 何やってんだ俺は！

ここで念を解く？ それは死亡フラグだ）

地面との距離が分からない。

おまけに、どこに落ちるのかも分からない。

下手すると、陸ではなく海に落ちたり、別の国に落ちたりしてしまう。

（いや、速度を落としてオーラを戻せば良いんだ。

このままじゃ、どうなっているのかサッパリ分からん）

体に掛かる力を探る。

1番大きいのは引力、次に星の遠心力。

しかし、どちらも落下速度を抑えられるほど、細かい操作が出来ない力だった。

大気圏へ突入する。

その大気との摩擦力をアルカは利用した。

しかし、その程度では、勢いの付いた落下を止めることはできない。

そのまま海に落ちる。
すると、アルカは弾き返された。
ベクトルの自動反転により、空へ打ち上げられる。

（ダメだ、エネルギーが多過ぎる。俺じゃ制御できない。）

引力が何かを当てて相殺しないと、いつまでも跳ね続けることになるかもしれん。

いや、待てよ。 とりあえず、陸に着くまでコレで行くか？
）

アルカは開き直った。

そういう訳で、ベクトルに体を任せる。

まさか音速を超えた速度で跳ね回っているとは気が付いていなかった。

1秒間に20キロメートル。

跳ね続けることで、その速度は落ちた。

それでも、衝撃波により、余裕で建物を破壊することができる。

しかし、それも終る。

ようやく陸地の感覚をアルカは感じ取った。

次に落下した瞬間、衝撃を地面に流し、ベクトルの悪循環を止める。

それが不味かった。

一気に地面が沸騰し、小さな粒子に変化する。

まるで泥のようになり、アルカの体は沈んでいった。

「なんだ？ どうしてこうなった！」

慌てて地面を弾く。

しかし、粒子状態のため、逆に足が埋まった。
ベクトル操作で反転させているものの、あまり効果がない。

「熱っ！ 熱う！」

「エリミネイト 排除 ” オン 使用」

アルカの体が浮く。

その体をオーラが包み、どこかへ飛ばす。

後には焼けた地面と、全身火傷だらけになった角刈りの男が空を見上げていた。

『それで、レーザー。』

この報告書によると、辺り一面が火の海になったって書いてある
んだけど。

海を跳ね回って、過去最速でグリッドアイランドに侵入。

おまけに、貴方を一瞬で火ダルマにするなんて普通じゃないわよ。

そいつは何者だったの？」

「バカだったんだろ」

キメラアント侵攻 2 (後書き)

” アルカ「ヤバイ。猫ヤバイ。まじでヤバイよ、マジヤバイ」
元ネタ『2ch』宇宙ヤバイ”

キメラアント侵攻 3

アルカが目を覚ます。
オーラを絶って、辺りを見回した。
すると、石で組まれた壁や天井が目に入る。

（ ゾルディック家っぽいな ）

床に視線を移す。
すると、部屋の扉が開いた。
そこからカルトが現れ、アルカの前に立つ。

「ゾルディック家ですか？」

カルトが首を縦に振る。
そして、前屈みになり、アルカに顔を近付けた。
無表情のままカルトは拳を握り、アルカの額を小突く。

「なんですか？」

アルカが問う。
しかし、カルトは答えず、姿勢を戻した。
アルカとカルトが視線を交わらせると、先にアルカが目を逸らす。

「アルカが連れて行った鳥は返ってきた。
巢の位置はハンター協会に報告済み」
「そうですか」

アルカがベッドから下りる。

カルトの視線を気にしつつ、横を通り過ぎた。さらに、カルトの背中を見ながら、部屋の扉を開ける。

「ボクも行く」

カルトが振り返る。

いつも着ている黒い着物が弧を描いた。

首筋で切り揃えられた黒い髪が、反動で揺れる。

「え？　なんで？」

「預かっている物がある」

驚くアルカ。

その横をカルトが通り過ぎる。

そうして、2人揃って廊下へ出た。

先を歩くカルト。

その後をアルカが追う。

ゾルディック家を出ると、2人は執事邸へ向かった。

（　あれ？　執事に用事でもあるのか？　）

不思議に思うアルカ。

しかし、それを口に出すことはなく、歩み続ける。

カルトの背中から ” 怒りのオーラ ” が湧き出ているため、アルカは話しかけ辛かった。

（　なんで怒ってるんだ？　）

アレか？　キメラアント編に勝手に介入したからか？

だから一緒に行くなんて言い出したのか？　（　）

考え込むアルカ。

その間に2人は執事邸に着いた。

すると、執事が現れ、2人を応接室まで案内する。

執事邸の応接室。

そこには胸の辺りまで金髪を伸ばした男がいた。

こちらを見ると立ち上がり、ハンター証を2人に見せる。

「プロハンターのカイトです。」

キメラアントについて調査するため、ハンター協会から派遣されました」

調査員がソファアに座る。

それに続いて、カルトの隣にアルカも座った。

執事が退室すると、調査員とカルトの視線が交わる。

（ゾルディック家がキメラアントについて何か掴んでいるのは間違いない。

俺の役割は、それを買い叩くことだ。

最も良いのは、アルカさんを被害者として、情報をタダで手に入れることだな）

「今回は災難でしたね。」

旅行先でキメラアントに出会うとは「

突然変異のキメラアント程度に遅れは取りません。

子供とはいえ、ゾルディック家の一員なのでですから」

カルトが答える。

その横では、返事をしようとしたアルカが口を開けていた。

しかし、喋るべきではないと考え、後をカルトに任せて口を閉じる。
「キメラアントによる被害を減らすためにも、お話を伺いたいと思
っています。」

協力して頂けますか？」

「キメラアントが何をしようと、ゾルディック家には関係がありま
せん。」

もちろん依頼であれば、キメラアントへの殺害でも何でもお引き
受けいたします」

会話が途切れる。

カルトの言葉に調査員が反応していた。

調査員の纏うオーラに揺らぎはないものの、静かな怒りが目に宿っ
ている。

（関係ないだと？

いや、たしかに関係ないのだろう。

キメラアントにハンターが何人殺されようと、こいつらには関
係が無い）

「どうしました？ 先遣隊に被害でもありましたか？

まさか、キメラアントに念能力の情報が渡るようなミスはしてい
ませんよね？」

カルトの質問。

それは調査員の怒りを誘うような物だった。

しかし、調査員は何も喋らず、怒りを噛み殺す。

（……今すぐ逃げ出したい気分だ。

カルトは何で平気な顔をしていられるんだ？）

空気と化しているアルカ。
その側では、調査員がカルトを睨んでいた。
しかし、カルトは無表情のまま、その視線を受け流している。

「アルカ、キメラアントの護衛軍には会った？」

カルトが聞く。

その言葉に調査員も反応し、アルカを見た。

オーラを絶っている状態でカイトの視線を受けたため、アルカは気絶しそうになる。

「猫は起きてました。 蛾と獣は見えていません。」

でも、よく分かりましたね。 まだ言っていないかったのに

「そうじゃなきゃ、”火傷して” 帰ってきたりしないでしょ」

「そーですね。」

ああ、それと猫はオーラを纏っていました。

他のキメラアントはオーラを纏っていません。

だから、たぶん護衛軍は最初から念を使えると思います」

アルカが爆弾を落とす。

これにはカルトと調査員の両方が反応した。

ハテナマークを浮かべたアルカを、2人が見つめる。

「その、猫とか蛾とか獣というのはキメラアントのことか？」

「そうです。 ヒトと猫のキメラアントであるネフェルピトー。

それと 蛾と獣は何でしたっけ？

似たような名前だったような気がするんですけど」

「蛾がシャウアップで、獣がモントウトウユピー。」

まあ、”同じ”とは限らないけど」

（同じ？）

という事は、ゾルディック家が握っているのは予言か？
それに相手の今の反応からすると、その予言は外れた？

（口が滑ったね。

そろそろ値段交渉に入るか。

また何か言う前に、アルカは退室させよう

「ボクはカイトさんとお話することがあるから、アルカは報告書でも書いてて。」

その報告書は、後でハンター協会に渡さないといけないから
「はい、分かりました」

アルカが部屋を出る。

その後ろで、アルカを引き止めようかとカイトが迷っていた。
しかし、カルトが背中を押して、アルカを部屋の外へ押し出す。

扉が閉まる。

追い出されたアルカは執事を探した。

そして、執事邸の部屋を借りて、おとなしく報告書を書く。

数十分後。

ネフェルピトーと出会った辺りの事をアルカは書いていた
すると、執事に案内され、カイトと共にカルトが部屋を訪れる。

「アルカ、行くよ」

「はい、分かりました」

飛行船の発着場。

そこに用意されていた船に3人は乗る。高速船でネオグリーンライフへ向いつつ、アルカは報告書を書き上げた。

「ダメね、やり直し」

しかし、カルトによって添削される。

それをアルカは清書して、ようやく報告書が完成した。

後はカルトに任せ、酷使した頭を休めるため、アルカは飛行船のベツドへ向かう。

（ 頭脳労働は……俺にはムリポ ）

ネオグリーンライフに到着した。

キメラアント討伐隊の拠点へ、3人は向かう。

しばらくすると討伐隊が戻り、アルカの書いた報告書が渡された。

「この護衛軍というのは、どのくらい強いんじゃない？」

ハンター協会のネテロ会長。

人手不足のため、討伐隊に参加している。

その人が報告書を読み、調査員であるカイトに尋ねた。

カイトの視線。

それがアルカに向けられる。

しかし、アルカはカルトに視線を逸らした。

「護衛軍はネテロ会長と互角程度。 ” 百式観音 ” を使えば余裕

でしょう。

しかし、キメラアントの王は ” 百式観音 ” を見切ることができません。

数手で決着を付けられなければ ” 百式観音 ” を攻略されてしまつてしまう。

最悪、薔薇爆弾を使うことになります」

「マジで？」

「マジです」

「その根拠はあるのか？」

近くにいた眼鏡の男。

それが小さなカルトを見下ろしながら尋ねる。

もう一人の大きな煙草パイプを持った男は、その様子を眺めていた。

「ありません」

無表情なカルト。

その言葉に一番驚いたのはアルカだった。

それに煙草パイプを持った男が気付いたものの、何も言わずカルトに視線を戻す。

（ いやいや、カルトが持つてる ” 原作 ” の知識を使えば良いだろ？

そうすれば予言なり何なりを持つてると誤解させられるはず。

どうせ ” 原作 ” なんてズレるんだし、早目に出しておいた方が良い。

っていつか、調査員もといカイトには予言って事で通してたよな？)

「そこまで大口を叩いておいて、根拠が無い？」

まったく……なぜ、こんなのを連れて来たんですか、カイトさん」

「 全額後払いで良いという条件でな。」

事実を確認してから手放しても遅くは無い」

「子供の出任せに決まっていますでしょう。」

この報告書には、キメラアントについて調べた程度の事しか書かれていません。」

辞書を片手に自分の妄想を加えれば、誰にでも書ける物です」

「それなら、実物を見せれば納得していただけますか？」

カルトが着ている和服。

その帯に吊り下げられていた巾着袋。

それをカルトは開いて、袋の中から綿を取り出した。

カルトの掴んだ綿。

その中からオーラが滲み出ていた。

カルトは綿の中から、オーラを纏った種を取り出す。

「そこにいるアルカ並のオーラが100人分込められた、対キメラアント用のウイルスです」

（ それ何てチート。

ってというか家で言った ” 預かっている物 ” ってコレのことか ）

心の中でアルカが突っ込む。

しかし、討伐隊はハテナマークを浮かべていた。

アルカがオーラを絶っているため、アルカ並と言われても分からない

い。

「アルカ、”練”を」

「はい、分かりました」

オーラを引き出す。

というよりも、長時間抑え付けられていたオーラが噴き出した。

それを体の周りに留めると念能力が発動し、床から足が離れ、宙に浮く。

「歪なオーラですね。形としても、性質としても」

「ああ、まずは”纏”からやり直した方が良い。

どんなにオーラが多くても、これじゃオーラの無駄遣いだ」

眼鏡の男。

その言葉に、煙草パイプを持った男も賛成する。

そして、アルカのオーラを見た事のあるネテロ会長も、残念そうな顔をしていた。

「ハンター試験の時よりも悪化しとるのう」

落ち込むアルカ。

ホバリングしつつ、膝と両手を床に突く。

その隣では、ウイルスの説明を行うために、カルトがタイミングを計っていた。

「このウイルスは、生きたキメラアントの体内で発動します。

その後3日間潜伏し、その間に他のキメラアントへ感染。

3日経つと発症し、念能力による攻撃を始めます。

除念されない限り増殖を続け、何の対処も行われなければ死に至

らしめるでしょう」

「 生きたキメラアント ” に ” カプセルを飲ませ ” 巢に戻し ” 3日間潜伏 ” する。

なかなか、厳しい条件じゃのう。

それに、感染したキメラアントが念能力に目覚める可能性が高い。そうになると、除念されるのも時間の問題じゃろう」

「 はい、質問」

「 なんじゃ？ 」

「 キメラアントは念能力を使えるんですか？ 」

私が来た時は、護衛軍しかオーラを纏っていなかったんですけど「今の所、護衛軍だけじゃな。

じゃが、今日は巢が ” 半径1キロほどのオーラ ” で覆われておった。

ハンターから聞き出したのか、それとも自力で ” 円 ” を開発したのか。

自力だったとしても、数日の間に念能力の開発方法にも気付くじゃろう」

巢が ” 円 ” で覆われている。

それはキメラアントが籠城を始めたという可能性。

そして、キメラアントの王の誕生が近いことを意味していた。

「 問題なのは、キメラアントが念能力を習得するリスクじゃな。

そうなれば、キメラアントの戦力を増やすことになってしまう」

「 つまり、このウイルスも根拠として示すには不足しているということですか 」

「そうじゃな。」

そのウイルスの製作者を全員連れてくれば、報告書の根拠としては十分じゃ。

しかし、”一人だけ” しかもゾルディック家の身内では、信用することはできん」

(いや、俺は製作者じゃないんだけど ああ、そういう事になつてるのか)

「そうですか。」

お忙しい中、お邪魔しました」

カルトが部屋を出る。

それを慌てて、アルカが追った。

歩きにくいためオーラを閉じて、カルトの後を付いて行く。

「何で根拠が無いなんて言っただんですか？」

「信じてもらえそうになかったから。結局、ダメだったけど」

「まあ、私としては単独行動の方が気楽で良いんですけどね」

「それはダメだよ。勝手に動いたら討伐隊に止められる」

「じゃあ、放つて置きますか？ カイトが死んだら不味いでしょう？」

カイトが死なないように、私が残って守りましょうか？」

「うん……じゃあ、お願い。」

ゾルディック家としてじゃなくて、巢を発見したハンターとして残ってね。

ボクはトリッパーの人達と交渉してくるよ」

「そういえばハンター試験の頃、ゾルディック家に居ませんでした」

ね。

それを作っていたんですか？ お母さんが心配していましたよ」

「うん。 アルカに言われたくない」

怒りのオーラ。

それが再びカルトの背中から湧き出る。

それに対して、アルカは何が原因なのかを考え始めた。

（せつかく作ったウイルスが無駄になったから御機嫌斜めなのか？

それとも何か言いたくないことでもあったのか？

とにかく、話題を変えよう）

「ところで、なんでウイルスが種類だったんですか？」

「カプセル型だと、自然狂いの入国審査に引っかけちゃうでしょ」

「なるほど」

アルカはカルトと別れる。

そして、さきほどの部屋へ戻った。

しかし、討伐隊の会議が始まっていたため、部屋の中へは入れない。

迷うアルカ。

廊下で待つのは会議の邪魔になることに気付く。

そのため、アルカは建物の外へ出て待つことにした。

キメラアント侵攻 3 (後書き)

” カルト「ダメね、やり直し」
元ネタ『FF11』チャママ”

キメラアント侵攻 4

アルカの実力。

それを計るために、試験が行われる。

その相手にカイトが選ばれ、2人は町外れへ移動した。

(カイトの念能力は ” 気狂いピエロ^{クレイジースロット}” 。

9つの武器をランダムで具現化し、それに設定された技を使えるというものだ。

問題なのは、その技だな。

念能力無効化なんて物があったら、簡単に反転を突破されてしまっ
まう)

(いや、そもそも念能力を使われる前に倒すのが一番良いか。

よし、とりあえず突撃しよう。 接触さえすれば、全裸にでも

何でも出来る)

戦いが始まる。

すると、カイトに向けて、アルカは突進した。

しかし、それは回避され、タイミング良くカイトの手刀が振るわれる。

(行動が読まれた……？)

カイトの手刀。

それはアルカのオーラに触れると弾かれた。

すると、カイトはアルカから離れ、その様子を探る。

(報告書通りの攻撃方法だな。

たしかに早いが、来ると分かっていたら避けられない物ではない。

しかし、あのオーラの防壁を素手で突破するのは無理か 仕方ない)

カイトが念能力を発動させる。

すると、その隣にピエロが現れた。

それを見たアルカは、ピエロに向かって走り出す。

(武器に変身する前の、ピエロの状態。

いかにも弱そうなアレも、制約の一部だろう。

今の内にピエロを破壊すれば、大きなダメージを与えられるはずだ)

『ヒヤッハー！ あの透明人間、こっちに向かってくるぜエ！』

「透明人間というよりは鏡人間。 ミラーマンだな」

(ミラーマン？

さすがカイト、いいセンスだ。

二つ名にさせてもらおう)

『俺を壊せば念能力が使えなくなるってバレてんじゃねえか！』

ピエロがスロットを回す。

その間に、ピエロが念能力の秘密をバラしてしまった。

怒りを込めつつカイトはピエロの頭を掴み、アルカから退避する。

(という風に見せれば、多くの場合ピエロを狙ってくるだろう。

だが、そう簡単に壊せると思うなよ)

『惜しかったな！ 次は頑張れよ！』

ピエロが銃に変わる。

それをカイトは握り、すぐに撃った。

撃ち出された念弾はオーラを隠されているため見えない。

オーラが隠された。

そのため、アルカにも感じ取れなくなってしまった。

しかし、アルカは慌てずに焦らず、余裕を持って対応する。

「ディフェンスミラー！」

アルカは宙に手を伸ばす。

そして、掛け声と共に、オーラの塊を放出した。

しかし、そのオーラの塊を念弾は突き抜けて、アルカに当たって弾き返される。

（追加効果は無し……か？

っていうか、この技使えないな。

もっと密度を高くしないと、簡単に突破されちまう）

（やはり、あのオーラによる防御は堅いな。

突破できるとすればハンマーだが 次は何だ）

銃がピエロに戻る。

そして、再びスロットが回り始めた。

それを潰すため、アルカは足下の石を拾う。

石に掛かるベクトルを操作。

次の瞬間、衝撃波を生み出しつつ石が飛んだ。それは、ピエロの顔に当たり、石は衝撃に耐え切れず粉々になる。

『惜しい！ ただの石じゃあダメだ！
ただの石じゃあ、俺は壊せなイ！』

しかし、ピエロには傷一つ無かった。

そのためピエロは槍に変化して、カイトの手に収まる。石にオーラを込めていれば違ったのだが、アルカはオーラを込めるのは苦手だった。

槍を構えるカイト。

それを見たアルカは動きを止めた。

アルカが横に回り込もうとすると、アルカに合わせてカイトも体勢を変える。

（ 銃と扱い方が違う。

さつきは使い捨てたのに、今度は ” 使う ” 気だ。

カイトで言う所のアタリなのか？ ）

（ またハズレか。

だが、こうしておけばアタリが出た時に疑われないだろう。

さて、ギリギリまで引き付けた後、これで距離を開けるか

）

槍を構えるカイト。

その間もアルカは進んでいた。

やがて、カイトの目の前まで、アルカが迫る。

カイトが槍を振るった。

武器にオーラを纏わせ、アルカを切り付ける。
しかし、ベクトル操作で武器を止められ、それ以上進むことができない。

後退しつつ槍を振るうカイト。

地面に突き刺し、槍を伸ばした。

それを持ったままアルカから離れ、槍をピエロに戻す。

（武器の能力だけを気にしすぎたな。

まさか後退しながら、あれだけ槍を操れるとは思わなかった）

『9種類の武器から1つを選ぶルーレットの時間だ！

さて、次は大鎌か？ 大剣か？ それともハンマーかア！』

ピエロが変化する。

そのオーラを隠しつつ、カイトは武器を握った。

オーラが隠されているため、その形状は分からない。

武器を両手で握るカイト。

それは大剣を握っているようにも見える。

しかし、大鎌を握っているようにも、ハンマーを握っているようにも見えた。

（そういえば、具現化系は武器を隠せるんだったな。

ルーレットの数字はオーラを隠されて見えなかったし。

こういう時は”凝”で見破る物なんだけど、俺は使えないから無理だな）

見合う2人。

カイトは少しずつ、アルカに近づく。

アルカは見えない武器を気にしつつ、カイトの周りを回っていた。

（ 嫌な感じだ。 おそらく、この先に進むと俺は負ける。
ならば、近づくわけにはいかない ）

今まで何度も死んでいるアルカ。

そのため、死線という物が分かり始めていた。

カイトへの攻撃を中止し、別の攻撃方法を考える。

アルカは手の平を丸めた。

そして、空気を操作して、手の中で回転させる。

それは少しずつ速度を上げ、やがて小さな竜巻に変わった。

辺りの空気が巻き込まれる。

アルカを中心にして、空気が渦巻き始めた。

それを見たカイトは走り出し、見えない武器を降り上げる。

砂や小石。

それが竜巻に巻き上げられ、アルカの武器となる。

しかし、まだ勢いが足りないため、カイトを傷付けるには至らない。

カイトが武器を振る。

それに対して、アルカは手の平を突き出した。

武器と竜巻の中心が当たり、カイトの武器が風によって向きを変えられる。

カイトが自ら武器を手放した。

すると ” 隠 ” が解け、ハンマーが地面に落ちる。

アルカの攻撃を避けようとしたカイトだったが、風に巻き込まれて
いるため動きが鈍い。

カイトの上着。

それに触れたアルカは、上に向けて飛ばした。すると、カイトが宙に打ち出され、それに耐え切れず服が破れる。

空に消えていく服。

鍛えられた上半身を露わにしたカイトは地面に着地した。

そして、アルカの手中にある ” 気狂いピエロ^{クレイジースロット} ” を解除する。

「良いだろう」

「ヒヤッハー！」

カイトが告げる。

それに対して、アルカは喜んだ。

奇声を上げつつ地面を転がって、喜びを表現する。

（よし、これでカイトに付いて行ける。

討伐隊で2番目に強いカイトが試験を行う。

そう聞いた時は絶望したけど、これで大丈夫だ！

俺頑張った！ 超頑張ったよ、カルト！）

数日後。

籠城しているキメラアントの巣へ突入して、女王を討つ。

その作戦が始まり、キメラアントの張る ” 円 ” の周囲にアルカ達は配置された。

参加人数は9人。

ハンター協会の会長であるネテロ会長。

煙草パイプの男と弟子2人、眼鏡の男と弟子1人。

幻獣ハンターのカイト。

討伐隊の新人、ゾルディック家のアルカ。

それと、煙草パイプの知り合いであるハンターも参加している。

その日は雨が降っていた。

降った雨が集まり、キメラアントの巣を侵食する。

そんな中、空から降ってきたアルカが、巣の頂上に突っ込んだ。

「突撃！」

2層ほど突き破り、アルカは止まる。

辺りにはキメラアントがいたものの、状況を理解できていない。

アルカが念能力を発動していたため、ミラーマンが何なのかを理解するのが遅れた。

「突撃ー！」

掛け声を上げるアルカ。

念能力の使用を許可されていたため、そのまま突っ込んだ。

それでも頭を潰すことを忘れず、2本の腕でキメラアントを千切っては投げていく。

（念能力は覚えていないのか。

これなら、かなり楽が出来るな。

その代わり、数が多いけど）

その騒ぎは他の階にも広がった。

下の階にいたキメラアントが、上を目指す。

しかし、キメラアントは基本的に体が大きいため、通路で渋滞して

いた。

師団長が信号を送る。

部隊を整え、護衛軍へ連絡が行われた。

様子を探るために、蛾のキメラアントの分身が上の階へ向かう。

「見つけました。侵入者は一匹です。

水を纏っているかのような外見　ピトーが片足を取った奴でしよう」

「じゃあ、ボクが行くよ」

「いえ、他にも侵入者がいます。　巢の正面と裏側です」

「ならば、正面には俺が行こう」

「じゃあ、ボクは後ろだね」

「女王の側には私が控えましょう。

上の侵入者は私の分身に相手をさせます」

「　しまった！」

「どうしました、ピトー」

「敵の攻撃を受けた！　巢の外へ飛ばされて……止まらない！」

「なんですって？　何があっただんですか？」

「敵が構えた途端、吹き飛ばされた。　ボクですら反応できないほど速い攻撃だ。

”頭の禿げた生物”　と　”帽子を被った生物”　の2匹だった。　それとボクは落ちるのを待つしかない。　戻るには時間が掛かりそうだ」

「分かりました。　後ろには師団を向かわせて足止めをしましょう。

「ユピーは正面の敵を早く片付けて、裏側からの侵入者を追ってください」

蛾のキメラアント。

それは師団長に信号を送る。

さらに、師団長から部下へ信号が送られ、キメラアントが移動を始めた。

アルカの周りのキメラアント。

それらも撤退を始め、アルカに背を向ける。

そこへアルカが突っ込み、次々とキメラアントが片付けられていく。

その後ろに蛾が回り込む。

そして、後ろからオーラを纏って突撃した。

しかし、アルカのオーラに触れると、念能力によって弾かれる。

（やはり、分身では力不足ですか。

それに何でしょう？ 何かに弾き返されましたね？）

「残念でしたね。

貴方と私では相性が悪い」

アルカが呟く。

それはプフに向けられた言葉だった。

しかし、アルカは振り向くことなく言い放ち、キメラアントを追う。

（今の口振りからすると、私の能力を知っていた。

というのはブラフで、目的は戦闘員達の足止めかもしれない。
い。

そして重要な事が一つある。

護衛軍の能力と似た能力を、あの生物が有している可能性が高いといっしょ。

さきほどのピトーの話から、他の侵入者も似た能力を有している可能性が高い)

『ピトー、ユピー。』

敵は我々護衛軍と似たような能力を有している可能性が高いようです。

交戦時には敵の動きに注意し、けして油断しないでください』

『ああ、そうしよう』

『。！』

ユピーの返事。

その後、ピトーの声にならない信号が届いた。

自分の不注意を恥じ、身動きの取れない体を恨めしく思う。

(さて、あの ” 弾く何か ” を纏った生物をどうするか。

どうやら、アレは私の鱗粉も弾いているらしい。

この分身の体では攻撃力が劣る)

(しかし、本体は女王を守らなければならない。

背後へ向かわせた師団の一部を戻して、足止めをするか？

いや、ピトーが戻ってくるまで、背後を疎かにするわけに

はいかない)

巢に開いた穴。

その中ではアルカが暴れ回っていた。

その様子を、雨に打たれつつ、ププの分身が観察している。

『ペギー師団、コルト師団、メレオロン師団は巢の上部からの侵入

者を足止めしなさい。

『そのためならば、巢を破壊しても構いません』

戦闘力の低い師団。

それを選び、アルカの対応に当たらせた。

これにより、他の師団の撤退が進み、巢の背後へキメラアントが集う。

ププの分身。

それが新たに巢へ放たれた。

ユピーの守っている正面と、ユピーが守っていた背後へ向かう。

ユピーの守っている正面。

そこには3匹の侵入者がいて、ユピーと戦っていた。

その1匹は重傷を負っているものの、ユピーも妙なオーラを付けられてしまっている。

ピトーの守っていた背後。

そこには ” 1匹 ” の侵入者がいて、キメラアントを蹴散らしていた。

その側に現れる ” 何か ” が、瞬く間にキメラアントを吹き飛ばしていく。

(なんだ……アレは……？

不味い、攻撃が速過ぎる。 アレは師団長でも手に負えないだろう。

私が向かうか？ いや、私は女王を守らなければならない。

それに、もう1匹の侵入者は何所だ？

(ユピーの報告によると、背後からの侵入者は2匹だったはずだ。

まさか、あの ” 何か ” ではないだろう。

護衛軍ともあるう者が、オーラと生物を見間違えるはずがない

（

巢を覆うププのオーラ。

それを探ると、もう一匹の居場所が分かった。

巢の地下へ侵入し、女王とププのいる場所へ向かっている。

（ 巢の後ろに集めた師団を分けるか？

いや、そういえば私の繭で能力を開発していた連中がいたな。

アレを使うか ）

ププは分身を飛ばす。

そうして、繭だらけの部屋へ向かった。

その繭を破り、眠っているキメラアントを起こす。

目覚めたキメラアント。

それらはオーラを纏い、念能力を習得している。

ププの命令に従い、数十体の改造キメラアントが地上へ向かった。

キメラアント侵攻 4 (後書き)

”ミラーマン”

元ネタ『ミラーマン』ミラーマン

”ディフェンスミラー”

元ネタ『ミラーマン』ミラーマン

”武器を両手で握るカイト”

元ネタ『Fate/stay night』アルトリア・ペンドラ
ラゴン

キメラアント侵攻 5

巣へ侵入した討伐隊。

その目標は女王を討伐すること。

そのために、討伐隊は4つのチームに分かれた。

ネテロ、カイトは背後から侵入し、女王を探す。

アルカは上空から巣へ侵入し、敵を誘き寄せ。

モラウ、ナツクル、シユートは正面から侵入し、女王を探す。

最後のチーム。

そのメンバーはグラチャン、ノヴ、パーム。

それぞれの念能力を使って、他のチームを支援している。

その日は雨だった。

雨がグラチャンの念能力により制御下へ入る。

そして、キメラアントの巣へ押し寄せ、地下へ流れ込んだ。

(そろそろ突入から10分経ったか？

よし、下へ降りよう)

アルカは巣の壁に突っ込む。

そのまま突き破り、逃走を始めた。

10階ほど下の地面を目指して、部屋の端から飛び下りる。

アルカは着地した。

足首から下が、水に沈む。

押し寄せる水によって、地表は洗い流されていた。

足下で水が弾けている。

それを操作して、アルカは水の中を滑った。

地面を弾くのは違い、継続的に操作できるため速度が上がる。

水を弾いた。

そして、アルカは巢へ再び入る。

すると、モラウとナツクルが護衛軍のユピーと戦っていた。

モラウの煙。

それで作られたナツクルの分身が戦っている。

それに紛れて、本当のナツクルが攻撃の機会を探っていた。

護衛軍のユピー。

体から8本の腕が生えている。

その側には、ナツクルのオーラで作られた人形が浮かんでいた。

モラウの弟子、シュート。

それは部屋の隅に転がっている。

ユピーの攻撃を受けて、重傷を負っていた。

(シュートで良かったな。

重傷を負ったのがモラウだったら、ナツクルも殺られてただろう。

とりあえず、コレを運び出すか)

アルカに気付く2人と一匹。

しかし、モラウもナツクルも話しかける余裕が無い。

それに対してユピーは、アルカという鏡人間に目を向ける余裕があった。

シュートを抱え上げる。

そして、巢の外へ行き、影へ放り込んだ。
するとシュートは影に沈み、それと共にノヴの念能力で作られた影が消える。

すぐに巢へ戻る。

地面を弾き、勢いを付けた。

そして、そのままユピーに突っ込む。

「コツチ ヲ ミロ」

ユピーに声をかける。

すると、ユピーの肩に目が浮き出た。

その目は、突っ込んでくるアルカを捉える。

（ あ、やべつ。

そういえば、こいつは目を増やすことも出来るんだっけ。

まあ、いいや。 触れれば俺の勝ちだからな！ ）

アルカの飛び蹴り。

それをユピーは防いだものの、アルカに触れてしまう。

アルカのベクトル操作により、ユピーは上に向かって吹っ飛んだ。

「今だ！」

そこへナツクルが追撃を行う。

体からオーラを引き出し、両手にオーラを集めた。

巢の低い天井に減り込んでいるユピーに、その拳を叩きつける。

「オラオラオラオラオラ

オラオラオラオラオラアッ！」

この間、わずか一秒。

しかし、キメラアントの知覚は、ヒトよりも優れていた。

”体が上に飛んだ” ことを理解し、あらゆる攻撃を防ぐために体を液体へ変える。

しかし、それは無駄だった。

ナツクルの拳によるダメージは無い。

その代わり、ナツクルのオーラがユピーに貸し付けられた。

(貸し付けられたオーラには10秒に1割の利子が付く。

それがユピーの体内全てのオーラ量を超えれば破産。

30日間、強制的にオーラを封じることができる)

ナツクルのオーラで作られた人形。

現在の貸付オーラは、その額に表示される。

そこには ”1万4060” という数字が表示されていた。

(たしかユピーのオーラは推定70万だけ？

全然、ダメじゃん)

1万4060。

10秒が経過すると、その利息として1406増える。

簡単に言くと、4分経てばユピーは破産するのだが、アルカは計算が苦手だった。

(ナツクルとモラウを先に行かせるか。

このままじゃ、貴重な戦力が足止めされてしまうからな。

女王もとい腹の中にいる王を殺せば、後はネテロ会長が何とか

してくれるだろう。

それに、ピトーを足止めしておけば、利息も少しは増える
だろうしな」

「ここは私に任せて、先に行ってください。

なに、この程度の相手、すぐに倒して追いつきますよ」

アルカが言う。

すると、横から拳が飛んできた。

しかし、アルカに触れる前に弾かれしまう。

「馬鹿かデメエは！」

ナツクルが叫ぶ。

敵の前にも関わらず、ナツクルは怒っていた。

それに対してユピーは空気を読み、話が終るのを待っている。

「誰も死なせねえ！

帰るときはデメエも一緒だ！」

（ 重傷を負ったシュートさんの事を気にしてるんだろうな。

あとナツクル。それも微妙に死亡フラグだから止めてケロ）

「条件さえ満たせば、私は死にませんよ。

だから先に行ってください」

「だが断る。ボス！」

「おう！」

ナツクルの声にモラウが答える。

煙で作られたナツクルの分身が動き出した。
それはナツクルの姿を隠し、ユピーの視界も塞ぐ。

「いつまでも同じ手が通じると思うなよ！」

ユピーが吠える。

その体が水に変わり、崩れ落ちた。

足下を流れる泥水と一つになり、3人の前から消える。

（ 水に溶けた？

これは厄介なことになった。

この前会ったピトーなんて、素の筋力だけで俺の反転を突破してきたからな)

緊張する3人。

モラウとナツクルはオーラを広げ、周囲を警戒する。

しかし、巣を覆っているププの ” 円 ” によって、それが阻害されてしまう。

そうして4分が経った。

すると、ナツクルが微妙な顔をする。

さらにモラウが顎に手を当て、ナツクルとアルカに向かって呟く。

「あいつ……流されたんじゃないか？」

足下を流れる水。

それはモラウの知り合いが操っていた。

巣の周囲に降った雨を掻き集め、巣に流し込んでいる。

そう、水を操っている。

つまり、水に変化して、泥水に溶けたユピー。
その体は水として操られ、泥水と共に流されていった。

「どちらにしても、そろそろ破産の時間だ。

最後に見た貸付オーラから考えて、今頃70万を超えている。

ここまで増えれば、後は加速度的に貸付オーラが増えていく。

今頃、ポットクリンがトリタテンに進化している頃だろう」

「何と言うか……まあ、いいや」

「そうだな……先を急ぐか」

3人は進む。

その様子をププの分身が監視していた。

その情報は本体に伝わり、巢を覆っているオーラを利用してユピーを探す。

『どいつも……こいつも……何をやっているんですか！』

ユピーは女王の間へ。ピトーは早く戻ってきてください！』

『すまん』

『ごめん』

『あ、ボクは着いたよ。どうすれば良い？』

『正面から入った3匹を潰してください』

3人は進む。

その後ろからピトーが迫っていた。

その気配を感じ、3人の足が止まる。

「ここは私に任せて、先に行ってください。

なに、この程度の相手、すぐに倒して追いつきますよ」

「任せませ」

「また後でな」

「……なんか、さっきと違って軽くないですか？」

「さっきのは相手の目を欺くためだ。」

適当な所でボスの煙と置き換えて、先に行くつもりだった。

俺達の目標は女王の討伐だからな。

それに、オメーは体の一部があれば死なねえんだろ？」

「そーですね」

「まあ、それでも死ぬ時は痛いだろうからな。」

嫌だったら変わってやるぜ」

「冗談言ってないで……早く行ってください」

アルカを見るナツクル。

それに対して、アルカは目を逸らした。

そのまま体を回して、ナツクルとモラウに背を向ける。

「……早く行ってくださいよ」

「ああ」

「またな」

モラウとナツクルが先に進む。

残ったアルカは体からオーラを引き出した。

禍々しいオーラが体を覆い、アルカの気持ちを ” 切り替える ” 。

護衛軍のピトー。

それが宙を飛んできた。

禍々しいオーラを纏い、泥水に覆われた地面を蹴る。

反転の角度を微調整するアルカ。

すると、ピトーが地面を掴み、アルカの前で止まった。

地面の泥水を映し、ピトーを映し、天井を映すミラーマンを警戒している。

（今度は……油断しない。

プブによると、この生物も特殊能力を使えるらしい。

こいつの能力は姿を隠す能力か？

いや、足下の水が弾けている。

ただ姿を隠すだけの能力じゃない）

ピトーが手に持った複数の石を投げる。

すると、それはアルカに弾かれ、ピトーに向けて返った。

それを見たピトーは駆け出し、地面の泥水を踏み散らす。

（こいつの能力は反射らしき物。

少なくとも防衛型の能力だろう。

今は、それで十分だ。

むしろ、千切ったはずだが、なぜ付いている！）

アルカが水を弾く。

すると、ピトーの攻撃は外れた。

地面とは違い、水で常に移動を制御できるため、その動きは速い。

（一発でも当たれば致命傷。

いつまでも避け続けることはできない。

しかし、時間稼ぎには最適だ！)

ピトーの攻撃。

ひたすら、それを回避する。

回避するしかなく、アルカに攻撃をする余裕は無かった。

アルカの速さ。

それに慣れたピトーは、アルカの動きを見切る。

やがてアルカに追いつくと首を握り潰し、胴体から切り離れた。

『ププ、一人倒したよ。状況は？』

『女王はユピーと共に避難通路へ向かっています。』

私は侵入者の1匹と交戦中です。』

後は貴方が取り逃した2匹と、裏側の1匹です』

『分かった。』

ボクは取り逃がした2匹を片付ける』

ピトーは足下を見る。

そこにはアルカの胴体が落ちていた。

少し離れた場所に、その頭部も転がっている。

(オーラが消えない？)

アルカの胴体と頭部。

その2つから禍々しいオーラが滲み出していた。

どう見ても死んでいるはずなのに、それが止まることは無い。

(これはオーラで作られた人形。)

だから、千切ったはずの足が直っていたのか。

「いや、”直った” んじゃない。

この人形を操っている能力者が ”直した” んだ」

「ププ、倒した奴が人形だった。

このままだと復活する可能性がある。

本体が何所にいるか分かる？」

「いいえ、近くにはいないようです。

おそらく、巣の外から操っていたのでしょう。

それよりも、早く取り逃した2匹を追ってください」

「分かった。すぐに片付ける」

（ それにしても、他の生物にもいるのか。

ボク達と似たようなオーラを持つ奴って ）

アルカの頭部。

念のため、それをピトーは踏み潰した。

そして、巣の通路を奥へ向かって駆けていく。

頭部の一部。

それが泥水に流されていく。

やがて水の勢いが増して、胴体も流されていった。

数十分後。

巣の奥からカイト、モラウ、ナツクルが現れる。

その3人が巣を出ると、水が渦を巻いて巣を壊し始めた。

巣が崩れる。

それにキメラアントが巻き込まれた。

渦を巻く水に引き込まれ、その中に沈んでいく。

やがて雨が止み、水が引く。

すると、半径1キロほどの小さな丘が、巢の跡に出来ていた。泥で出来た丘は太陽に照らされ、表面が乾いて固まり割れていく。

そこへカルトが訪れた。

丘に登り、巾着袋から髪の毛を取り出す。

カルトと同じ黒色、それはアルカの髪の毛だった。

さらに袋を取り出す。

その中には100本の髪の毛が入っていた。

それを地面に撒いて、カルトは紙に書かれた文字を読み上げる。

「アレス・マークレイ、イリア・シュトルヴィ、ウーラ・マダルテ、
エジュ・ラーヤ、オールド・マゾツテ、カドウケス・アルケス、キ
ヤリー・カロール」

100人の名前。

それを読み終わり、念能力の制約を満たす。

すると、カルトの体から”禍々しいオーラ”が湧き出た。

”ライフメイカー
反転術式”

カルトのオーラ。

それは撒き散らされた髪に宿る。

そこからオーラが広がって行き、ヒトを形作り始めた。

やがて、アルカの再構成が終る。

カルトと同じ顔の子供が、土の上で横になっていた。

しかし、すぐにアルカの念能力が発動し、その全身が見えなくなる。

それをカルトは抱き上げた。

オーラの出力を絞り、アルカの念能力を突破する。

アルカを抱いたままカルトは丘を降り、森へ入って見えなくなった。

キメラアント侵攻 5 (後書き)

” アルカ「コッチ ヲ ミロ」”

元ネタ『ジヨジヨの奇妙な冒険 Part 4』シアーハートアタ
ツク

” ナツクル「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラアッ！」”
元ネタ『ジヨジヨの奇妙な冒険 Part 3』空条承太郎

” この間、わずか一秒”

元ネタ『宇宙刑事ギヤバン』ナレーション

” ナツクル「だが断る」”

元ネタ『ジヨジヨの奇妙な冒険 Part 4』ライフメイカー 岸边露伴

” 反転術式”

元ネタ『魔法先生ネギま！』造物主

” 反転術式”

元ネタ『魔法先生ネギま！』大規模反転封印術式

キメラアント追撃 1

キメラアントの王。

それが生まれ、ネテロ会長が戦った。

他のハンターは脱出し、キメラアントの巣を破壊する。

王とネテロ会長。

どちらの死体も発見できないまま1年が過ぎた。

ハンター協会が行っていた巣の跡の発掘調査も中止される。

ハンター協会の新会長。

それが選出され、ハンター制度も変わった。

念能力を協会に報告する義務が、ハンターに課せられる。

キメラアントの殲滅完了。

それをハンター協会の新会長は発表した。

しかし、カイトは独自にキメラアントの調査を続けている。

「世界の悪意が見えるようだよ……カルト」

ホテルの一室。

そこでアルカはパソコンを操作していた。

しかし、キメラアントに関する新しい情報は見当たらない。

（ いや、情報が無いんじゃない。

キメラアントに関する情報がフィルタリングされている。

混乱を生まないと聞けば聞けばいい。

しかし、実際はハンター協会が殲滅宣言を出したからだ)

パソコンの電源を切る。
種を握り、アルカは部屋を出た。
エレベーターに乗り、ホテルのロビーでカイトと合流する。

ロビーにあるソファア。

そこにカイトは座っていた。

その横には、ゴンとキルアもいる。

（まさか1年未満でグリッドアイランドをクリアするとはな。

まあ、バッテリーの雇われ組は解散してたし。

それに、爆弾魔のおかげでプレイヤーが激減してただろうから
な）

（念の応用技も習得しているみたいだし、ビスケにも運良く会っ
たんだろう。

それでも ”記憶” にあるキメラアント編の2人と比べ
ると劣るけど。

あのキメラアント編の特訓を受けていないんだから、当たり前
か）

ロビーの柱。

そこにカルトが寄り掛かっていた。

アルカが降りてきたことに気づき、視線を向ける。

「時間だ。 行こう」

カイトが言った。

すると、ゴンとキルアが立ち上がり、カイトを追う。

それにアルカも続き、ホテルに残ったカルトは4人を見送った。

4人は車に乗る。

カイトが車を運転し、助手席にアルカが乗った。後部座席にゴンとキルアを乗せ、舗装された道路を走る。

ゴンとキルア。

2人は会話を交わしていた。

その内容がカルトに及び、ゴンがアルカに尋ねる。

「ねえ、アルカ。

アルカとカルトって双子なの？」

「そうですよ。

私が四男で、カルトが五男です」

「へー、なんか良いね。

俺一人っ子だったからさ、そういうの憧れるな」

「止めとけよ、ゴン。

兄弟なんて疲れるだけだぜ。

”こいつら”なんて、わざわざ”交互に”付いてくるんだからな。

まったく、やってらんねえよ」

ヨークシンの郊外。

そこには茶色い荒野があった。

所々に、水に削られて出来た土の円柱が建っている。

それを見上げるカイト。

他の3人を集めて、地図を広げた。

現在位置に印を付け、それと重なるように縦線を引く。

「この柱で分けよう。」

西はアルカ、東を俺とゴンとキルアで搜索する。
何か見つけてもチェックするだけで良い。
この範囲が終わったら、ここに集合してくれ」

3人と別れる。

アルカはオーラを広げた。

半径20メートルほどの ” 円 ” を作ると、アルカの体が薄くなる。

（ 生身の部分が無くなったおかげだな。

オーラの量に頼った力技だけど、オーラを広げて ” 円 ” を
使えるようになった。

その代わり、復活に必要な体の一部が手に入らなくなった
けど。

まあ、まだ髪の毛はカルトが保存してるから大丈夫だろう ）

体を薄めながらアルカは歩く。

その状態で、地面を弾くことは出来なかった。

オーラを広げている状態では、風の向きを変えることすら出来ない。

アルカのオーラ。

それが地面の穴を感知した。

アルカは地図を広げ、その場所をチェックする。

搜索が終わる。

集合地点へ向かうと、カイト達がいた。

地図を広げて情報を交換し、これからの予定を決める。

「まずは、アルカの発見した穴へ向かう」

「たぶん当たりでしょう。」

わざわざ、穴の上に岩が乗っていましたから」

「隊列はアルカ、俺、キルア、ゴンだ。」

俺が撤退命令を出したらアルカが困になり、その間にゴンとキルア、俺が撤退。」

例のウイルスは王に対してのみ使用する」

「分かりました」

アルカが答える。

すると、ゴンがアルカを見た。

軽く答えたアルカに対して、ゴンは心配そう顔をしている。

「大丈夫なの、アルカ？」

「大丈夫ですよ、ゴンさん。 私は死にませんから」

車は置いていく。

4人は隊列を整え、ポイントへ向かった。

そして、アルカが岩を退けると、小さな穴が現れる。

小さな穴。

それは1人が通れるほどの大きさだった。

穴の中に顔を入れてみると、下に向かって斜めに掘られている。

「私が行きますよ。」

ベクトルを操作すれば、穴の中でも素早く動けますからね」

「そうだな、頼んだ。」

俺達は穴の見える場所まで下がるう。

それと、”円” で俺達の存在はバレていると考えた方が良い。

何かあったら、無線機を鳴らしてくれ」

穴に入るアルカ。
中は暗いものの、アルカに影響はなかった。
目に入る光は自動反転されているため、そもそも念能力の発動中は見えない。

（ もうちょいだな……もうちょい…… ）

穴の出口。

それを感じて、アルカの気が緩む。

その瞬間、出口の辺りで爆発が起こり、地面に衝撃が走った。

「うおおおおおおおおお！？」

後方へ体を打ち出す。

その間にもオーラは、襲い掛かる衝撃を弾き返していた。
しかし、その衝撃で穴が崩れ、アルカの体は埋まってしまった。

（ 圧力反転！ 引力反転！ ）

地面を押し退け、体を浮かせた。

そうして、アルカは地面から脱出する。

宇宙へ放り出される前に、すぐに操作を切った。

身に着けていた無線機。

その止め具が、地面との摩擦で壊れている。

そのため多段ロケットのごとく切り離され、無線機が空へ消えていった。

アルカは地上へ下りる。

すると、地面に大きな穴が開いていた。

そこでカイトと、キメラアントの王が戦っている。

（なんだ？ どうしてこうなった？

いや、それよりキルアとゴンは何所だ？）

キルアとゴン。

2人はオーラを絶つことが出来る。

その場合、アルカは2人を感知することができない。

そのためアルカはオーラを広げた。

しかし、穴の近くにゴンとキルアは居ない。

アルカはオーラを戻し、カイトと王のいる大きな穴へ向かった。

（ゴンとキルアは近くにいない。

おそらく、カイトが俺の代わりに足止めをしているのだろう。

ならば、早く交代してカイトを逃がさなければ！）

アルカは穴へ下りる。

再びオーラを広げ、王とカイトを取り込んだ。

それに対して王が反応するものの、カイトが必死に押し止める。

アルカは体からオーラを引き出した。

そのオーラを練って、オーラの濃度を上げる。

元に戻るうとするオーラを、強引にベクトル操作で押し止めた。

アルカは集中する。

広げたオーラに取り込んだ王。

その周囲にあるベクトルを感知し、操作する。

（空間掌握……！）

王との距離は8メートル。
アルカは10メートルまでオーラを狭めた。
さらに体からオーラを引き出し、オーラの密度を高めていく。

（ダメだ、オーラが薄すぎる。）

もつと王に近寄らないとダメか。

しかし、オーラを体の一部に集めることすら、俺には出来ない。
そんな状態で王の攻撃を食らえば一発KOだ（

王の動き。

それが僅かに鈍る。

よく見ると、王の足が地面を滑っていた。

（ 新手の能力か。

地面が少し掴みにくいが、この程度ならば特に問題はないな。

それに、これならば ” 食える ” ）

王が息を吸う。

すると、アルカのオーラが吸い込まれた。

王のオーラが増え、さらにアルカのオーラが薄くなってしまう。

（ …… 不味い。

なんだ、このオーラは？

まるで淀んだ沼の水だ（

アルカのオーラ。

それは、かなり不味かった、

そのため、吐き気を感じ、王の顔が歪む。

(王の能力は、オーラを食う能力。
たしかに、俺のオーラを食うこともできるだろう。
デタラメすぎるけどな！)

「カイトさん！ ダメです！
後は私に任せてください！」

オーラを戻すアルカ。

カイトに声を掛けるものの返事はない。

王の攻撃を防ぐのに精一杯で、逃げたり返事をする余裕はカイトには無かった。

(いつもの手を使うしかないな。

何が何でも、カイトが逃げる隙を作らなければ……！)

アルカは進む。

地面を弾いて、王の背後へ回った。

そうして王に触れようとすると、腹部を衝撃が打つ。

何も感知できない。

それほどの速さで、王の肘打ちが腹に入った。

オーラを軽く突破され、アルカは地面を弾きながら転がっていく。

(速過ぎる……無茶苦茶だ……！

でも、おかしい。なんで俺は生きているんだ？

それに、今の肘打ちに比べて、普通の攻撃が遅すぎる。

まさか手加減されいる？)

考えるアルカ。

その背骨は折れ、神経は押し潰されていた。

一度死ななければ再生できないため、アルカは体を動かせない。

（アルカは、もう無理か。そろそろ俺も限界だ。

どうやら相手は、俺達を生け捕りにするつもりらしい。

ここまで手加減されて手も足も出ないとは、情けない話だ。

だが、無傷で俺に勝てるとは思うなよ！）

クレイジースロット
”気狂いピエロ”

カイトは念能力を発動させる。

するとピエロが具現化され、カイトの側に現れた。

それを王は片手で吹き飛ばそうとするが、カイトの腕によって止められる。

その腕が千切れた。

王の力に耐え切れず、胴体から切り離される。

その間にピエロのルーレットは回り、3番で止まった。

『ヒヤハハハハ！

残念、ハズレ』

ピエロがマラカスに変化する。

先端が丸くなってソレは、どう見てもマラカスだった。

棍棒や杖にも見えなくも無いが、それは間違いなくマラカスだった。

「ちっ！」

舌打つカイト。

しかし、武器は使わなければ消えない。

そのため、カイトは片手にマラカスを握り、王に振り下ろした。

退くことは出来ない。

そうすれば、再び見えない一撃が放たれるだろう。

王の遊びに付き合わなければ、アルカと同じように瞬殺されてしまう。

（ カイトがピンチだ。 背骨が折れて動けない？

そんなことは無い。 何のためのベクトル操作だ？

動かないのならば、自分の体を操れば良い！ ）

アルカは体を打ち出す。

引力のベクトルを操作して、王へ突撃した。

しかし、王は体を捻り、片手でアルカを振り払う。

もう一方の手で、カイトの武器を弾いた。

そして、両手が塞がっているため、足でカイトを蹴る。

その衝撃でカイトは吹き飛び、地面に転がって動かなくなった。

（ 最後の一撃だ。

引力反転……！！ ）

アルカの手。

そこから種が飛び出した。

それは王に向かい、分厚いオーラによって弾かれる。

種が割れた。

すると、その中からオーラが漏れる。

それは宙に拡散し、風に吹かれて飛んでいった。

（ ああ、せつかくのウイルスが飛んでいく。

王がオーラを食ってくれると良いんだけど、あれはダメそうだな。

（こんな事なら、ウイルスを俺が飲んでいれば良かった）

倒れたままのアルカ。

首を動かし、王を見上げる。

すると、そこへ小さなキメラアントが飛んできた。

「御無事ですか、王！」

「無論だ。」

それよりも新しい素材だ。

息絶える前に保存せよ」

（あれは護衛軍のププもといシャウアップか？

たしか、ユピーやピトーと同じように死亡確認がされていたはずだ。

まあ、あいつ分身できるからな。それで死体を偽装した

んだろう）

オーラで作られた糸。

それをププが撒き、アルカとカイトを包む

そうしてププのオーラに包まれ、2人は意識を失った。

2つの繭。

それを小さなププが、頑張って運ぶ。

後には大きな穴と、潰れた弾丸が残された。

キメラアント追撃 1 (後書き)

” アルカ「世界の悪意が見えるようだよ……カルト」”

元ネタ『機動戦士ガンダム00』アレルヤ・ハプティズム

” アルカ「空間掌握……！」”

元ネタ『魔法先生ネギま!』ネギ・スプリングフィールド

キメラアント追撃 2

キメラアントの繭。

その中で、カイトは千切れた腕を治療される。

そして、改造キメラアントとして生まれ変わった。

別の繭。

その中にアルカはいた。

体の改造は後回しにされ、脳の改造が行われている。

脳の改造。

これが終わればキメラアントの奴隷となる。

しかし、その作業の進行は予定より遅れていた。

【目標】 キルアをゾルディック家の束縛から解放する

【手段】 ベクトル操作の念能力

【目標】 シャウアップの命令に従う

【手段】 ベクトル操作の念能力

2つの命令が争う。

体に宿るオーラは、キルアのために働くことを強制する。

繭に宿るオーラは、プフのために働くことを強制していた。

勝っているのはプフのオーラ。

命令が単純だったため、簡単に上書きした。

それに対して、アルカに宿るオーラも命令の単純化を行う。

【目標】 キルアをゾルディック家の束縛から解放する

【目標】 キルアをゾルディック家から解放する

【目標】 キルアを解放する

【目標】 キルアを自由にする

アルカに宿るオーラの単純化が終わった。

しかし、それでもププの命令に押されている。

それは、アルカに宿るオーラの命令が曖昧で、ハッキリしていないからだった。

【目標】 キルアをゾルディック家から解放する

反転

【目標】 カルトの命令に従う

カルトの命令。

それが分かり易い形で示される。

すると、カルトの命令とププの命令が拮抗した。

【目標】 カルトの命令に従う

【目標】 シャウアップの命令に従う

オーラは互いに打ち消しあう。

しかし、繭に宿るププのオーラには限りがあった。

それに対してカルトのオーラは、底が見えないほどの勢いで送り込まれている。

このままではカルトのオーラが勝つ。

そのためププのオーラは、外部とのラインを切断することにした。

脳の改造から離れると体の改造を始め、外部からのラインを切断する。

その瞬間。

カルトからのオーラが消える。

そして、アルカはキメラアントとして再構成された。

『目覚めなさい』

プフの分身が信号を送る。

それを受信したアルカとカイトは目覚めた。

体を包んでいた繭を破り、プフの前に2人は並ぶ。

「人間共が攻めてきました。」

それを貴方達は迎撃しなさい。

殺しても構いませんが、素材として使える物に止めを刺す必要はありません」

「分かった」

「りょーかい」

歩き出すカイト。

その後をアルカが付いていく。

さらに、その後ろにはプフの分身が付いていた。

足下は土、天井も土。

そこは地面を掘って作られたトンネルだった。

光も差さない闇の中を、2人と1匹は進んでいく。

「パー！」

かけ声が響く。
それと共にアルカとカイトに向けて、オーラが打ち出された。
しかし、ベクトル操作によってオーラは ” 上へ ” 逸らされ、天井に突き当たる。

天井が崩れた。
しかし、それを気にせず、カイトはピエロを具現化する。
その間、アルカは動かさず、オーラが飛んできた闇を見つめていた。

「カイト！」

天井から差し込む光。
それに照らされる双方の顔。
そこにいたのは、ゴンとキルアだった。

しかし、カイトに変化はない。
ピエロが変化したマラカスを、カイトは手に取った。
そして、オーラを放ったゴンに向かって走り、武器を振り下ろす。

「ゴン！」

隙だらけのゴン。
キルアはゴンの名を呼ぶ、
すると、ゴンはオーラを集めた腕で、カイトの攻撃を防いだ。

（ おや？ 敵の片方が動揺している？
思い出した。

アレは、この2匹を捕らえた時に逃げた奴らか ）

「どうしたの、カイト!」

「おや? この2匹のお知り合いですか?

そうだとしたら、残念ながら貴方の声は届きませんよ」

「お前、カイトに何をしたんだ!」

「特に何もしていません。少し頭の中を弄っただけです。

私達の命令を聞いてもらえるようにね」

「何て事を……カイトを元に戻せ!」

「おい、ゴン。落ち着けって」

「ええ、構いませんよ。

貴方達が私達を自由にしてくださいれば、すぐにでも元に戻しまし
よう。

なにしろ私の能力は、そういう物なのですから」

「お前達を自由にするなんて、出来るわけないだろ」

「それでは私を倒しますか?

そうすると、この方も元に戻らなくなりますよ」

「酷い茶番だ」

アルカが呟く。

そして、ププを握り潰した。

それに反応して襲い掛かってきたカイトに触れ、弾き飛ばす。

「おい、キルア。

俺を見てもノーリアクションっていうのは酷いんじゃないか?」

「アルカ?」

キルアが驚く。
無視していたのではない。
本当に気付いていなかったらしい。

「ちょっと髪の色を変えたせいかな？
でも、顔は変わってないし、普通気付くだろう？」

アルカの髪。

それはカルトのように黒くなかった。
キルアと同じように、髪が白くなっている。

「アルカじゃねえだろ。」

いつもの口調はどうしたんだよ」

「イメチェンだ、イメージチェンジ。」

実際、生まれ変わったようなもんだしな」

キルアとアルカが話す。

その間に、吹き飛んだカイトが戻ってきた。
カイトの顔に表情はなく、再びマラカスをゴンに振り下ろす。

振り下ろされるマラカス。

それはアルカの腕に当たり、弾き返された。
アルカはゴンを抱え、キルアのいる後方へ下がる。

「ところでカイトだが、アレは治らない。

さっきのキメラアントが言っていたのは嘘だ」

「でも、アルカはアルカなんでしょ？」

「俺はカルトの念獣」だった」からな。

頭の中を弄られても、組み替えることが出来たんだ。

でも、生きている人間は違う

そういう念能力があれば　ん？」

「どうしたの？」

「念能力が使えるってことは、カイトは生きている。

それなら、頭の中を弄れる奴がいれば、元に戻せるかもしれない

ぞ

「本当！」

「じゃあ捕まえるか。

ちよつと待つてるよ、2人とも」

アルカは地面を弾く。

そして、カイトの頭を掴み、押し倒した。

カイトがマスカラを振るうものの、アルカに弾かれてしまう。

（ ”ゴンの命令に従う” っていう方法もある。

だが、ダメだな。それは俺が気に入らない ）

【目的】ゴンを守る

クレイジーショット

【手段】気狂いピエロ

思考のベクトル操作。

それを行い、カイトの思考を ”切り替える”。

すると、カイトは大人しくなり、アルカも手を離れた。

「はい、終了」

カイトが立ち上がる。

そして、ゴンの側に立った。

その目は虚ろで、ゴンの事しか意識していない。

「やっぱり俺の能力じゃ、方向性を変えるだけだな。ちゃんと直さないと、ずっと、こんな感じだろう」

「……うん。」

でも、ありがとうアルカ。

”生きていれば、きっと何とかなるよ”
俺が何とかしてみせる」

「ああ、それじゃ俺は王をフルボッコにしてくるよ」
「俺も行く！」

「いや、ゴンとキルアは、カイトを安全な場所に連れて行ってくれ。今の俺なら念能力を100パーセント使えるから大丈夫だろう」

「カイト……うん、分かった。
頑張つてね、アルカ」

「キルアはどうする？」

「いかねーよ」

「でしょーね」

ゴンとキルア。

2人と別れて、アルカは奥へ進む。

暗いトンネルを抜け、広い部屋に辿りついた。

部屋の中央。

そこにキメラアントの王が立っていた。

腕を組み、仁王立ちで、アルカを見下げている。

「来たか」

「よお、慢心王。」

オーラの貯蔵は十分か？」

アルカはオーラを広げる。

堅く重いオーラが部屋を包んだ。

その重圧に負け、部屋の壁や天井が割れる。

（ まともに戦えば負ける。

だからこそ……空間掌握！ ）

「む……！」

王が滑った。

まるでバナナの皮を踏んだかのように滑った。

慌てて立ち上がるうとするものの、床が滑って足掻くことしかできない。

王はオーラ吸った。

すると周りのオーラが薄くなる。

それによって、ベクトル操作の影響力が下がった。

それに近づくアルカ。

王の頭を掴み、そのベクトルを操作する。

その腕を王が掴み、キメラアントの腕力で捻り潰そうと試みた。

（ オーラを集めて防ぐ。

今の俺ならば……出来る！ ）

体に纏うオーラ。

それをアルカは腕に集める。
すると、ベクトル操作の能力が強化された。

王の手を弾き、押し止める。

しかし、その手がアルカのオーラを吸い始めた。

それによって、王の手がオーラを食い破り、アルカの腕を掴む。

それだけでは無い。

王の周囲にある物が食われ始めた。

壁や床がヒビ割れ、粉々になって全てが崩れていく。

（ 触れただけじゃない。 近くにいるだけでオーラを食われる。

本当に無茶苦茶だな、この野郎！ ）

アルカの腕が軋んだ。

奪われたオーラが、王の一部に変わる。

そのオーラが王の力を強め、アルカの腕を折った。

右腕が折れる。

しかし、アルカは折れなかった。

足や首を握り潰され死んだ経験が、アルカの意思を保つ。

（ まだ右腕は千切れていない！

オーラを練って、練って、練って、固める！

あと少しだ、あと少しで良い 時間を奪い取れ！ ）

腕に集めたオーラ。

それを練って、強化する。

折れた右腕は、まだ繋がっていた。

王の手が滑る。
アルカのベクトル操作。
それによって、王の腕力は弾かれた。

ライフメーカー
”反転術式”

キメラアントの王。
その細胞がバラバラになる。
繋がっていた細胞が崩壊を始めた。

それに抗うことは出来ない。
”他人へのベクトル操作は、その全身に作用する”
そのため、瞬く間に王の体は粉々になり、崩れ落ちた。

「卑怯っぽいが、まあ許せ。
お前を生かしておく、死ぬほど厄介だからな」

王の肉片。
血の水溜りの中に、肉の粉が積もっている。
それを放置して、アルカはトンネルへ戻っていった。

折れた右腕。
それは歩く度に揺れている。
王に握られた部分には、その手形が残っていた。

トンネルを抜ける。
すると、荒野が広がっていた。
辺りにハンターの姿はなく、ゴンとキルアも見当たらない。

（おいおい、王への直通通路だったのか？

見合っアルカとカルト。
それにキルアが突っ込む。
その前に立ち、カイトはゴンを守っていた。

「其の1！ 俺を殺して、念獣として再構成した！

其の2！ ベクトル操作の能力を使って、俺の意思を書き換えた！

其の3！ キルアを虐待していたミルキを俺に殺させた！

其の4！ 俺の再構成に必要な人間を、俺に殺させた！

其の5！ 人間を殺させるために、殺し屋の仕事を俺にやらせた！

其の6！ 危険なイベントに放り込んで俺を殺した！

其の7！ その間に自分は、キルアとキャハハウフだ！」

「なんで……？」

「なんで意識があるのだった？」

そんなことあ、どうでもいい！

受けるよ！ 10年の痛みを！ てめえの罪を思い知れ！」

アルカのオーラが左手に集まる。

それを振り上げ、カルトに叩き付けた。

しかし、それをカルトは受け流そうと、ベクトルを操作する。

「右腕が折れてるんでしょ？」

それじゃボクには」

「ダメだな、全然ダメだ！

そんな物で、俺の痛みを受け流せると思うなよカルトオ！」

アルカのオーラが膨らむ。

その堅く重いオーラが、カルトの禍々しいオーラを打ち砕く。

そうして、カルトの ” 反転 ” を打ち破り、その頭部を左手で掴んだ。

「俺のこの手が光って唸る！」

お前を倒せと輝き叫ぶ！

必殺！ シャアアアアイニング フィンガアアアアアアア！」

【目的】 シャアアアアイニング フィンガアアアアアアア！

【手段】 シャアアアアイニング フィンガアアアアアアア！

カルトの頭部。

それから手を離し、アルカは息を吐いた。

熱くなっていた頭が冷え、カルトに背を向ける。

「さて、早く折れた右腕を固定しないと じゃあな、ゴン、キルア。」

ゾルディック家は俺が守ってやるから、たまには帰って来いよ」

「おい！ カルトはどうするんだよ！」

「なに、カルトは強い子だ。」

きっと、いつか自力で立ち直るさ」

「そういう問題じゃねえだろ！」

カルトに何したんだよ！

シャイニング フィンガーって何なんだよ！」

叫ぶキルア。

その後ろでは、カルトが魔法の呪文を唱えている。

アルカの熱さを引き継いだかのように、空に向かって叫んでいた。

「シヤアアアアイニング
「シヤアアアアイニング
「シヤアアアアイニング
フィンガアアアアアア
フィンガアアアアアア
フィンガアアアアアア

おわり

ゾルディック家。

その庭の片隅で、お茶会が行われてた。

と言っても、参加者はアルカとカルトだけだ。

「もう……死のう……」

「おいおい、俺の10年に比べれば軽いもんだろつ。

すぐに戻してやったんだから、ありがたく思えよ」

落ち込んでいるカルト。

魔法の言葉を7日7晩叫び続けたことに、ショックを受けていた。

その間、アルカに観光旅行と称して連れ回され、全国に名を知られてしまっている。

ゾルディック家のシャイニング フィンガー。

そんな二つ名がカルトに付けられ、ネットで噂になっていた。

顔写真も名前もネットに出回ってしまったため、カルトは家に引き籠もっている。

「シャアアアアイニング フィンガーアアアアア！」

シャアアアアイニング フィンガーアアアアア！」

「ギヤアアアアアアアアアアア！」

アルカが魔法の言葉を叫ぶ。

するとカルトは頭を抱え、足をバタバラさせ始めた。

アルカと同じ10才、推定小学4年生のため仕草は可愛いのだが、叫び声は最悪だった。

茶を飲むアルカ。

左手でコップを握っている。

反対側の右手は、右腕ごと失われていた。

（ やれやれ、やっぱり王は許してくれなかったか。

おかげで、傷を治すのに時間がかかった。

まあ、このハイスペックな体の代金とでも考えておくか）

「さて、そろそろ時間だな。俺は先に行くぞ、カルト」

アルカが席を立つ。

しかし、まだカルトは悶えていた。

魔法の言葉が、かなり身に染みているらしい。

アルカは屋敷を通り過ぎる。

そして、木々が薙ぎ倒された場所へ出た。

そこには、現当主シルバ・ゾルディックが立っている。

「覚悟はいいな」

「もちろん」

見合うアルカとシルバ。

そして、次の瞬間、2人の姿が消えた。

その代わりに、桁外れのオーラが溢れ、衝撃波が飛び交う。

ベクトル操作。

それによって、アルカは音速を突破する。

発生した衝撃波を操作して、攻撃に使っていた。

それに対してシルバ。
アルカのように音速は突破できない。
しかし、鍛えた足で避け、練ったオーラで防いでいた。

瞬く間に地形が変わった。

地面が剥がれ、土砂が舞い上がる。

それを離れた場所から、母キキョウと一男イルミが見守っていた。

「ああ、アルカ。」

あんなに立派になって……ママは嬉しいわ！」

「前から人間っぽくなかったんだけど、ついに人間止めちゃったんだね」

飛んでくる余波を避ける2人。

その足下では、執事が呆然としていた。

人為災害の後片付けを考え、脳が機能停止を起こしている。

吹っ飛んでいく木々。

その光景は、さらに遠くからも見ることが出来た。

ククルーマウンテンに向かうバスからも、空に舞い上がる土砂が見える。

「ほお、今日は何かイベントでもあるんですかねえ」

「イベントって……ゾルディック家は新型爆弾でも開発したんですか？」

最初に気付いたのは運転手。

その言葉に釣られ、バスガイドもククルーマウンテンを見上げる。

運悪くバスに向かって木が飛んで来たものの、運転手の急旋回によって回避された。

「あれがアルカの言っていたパーティーか？」

カイトが呟く。

バスに乗っている他の乗客も騒ぎに気付いた。

そんな中、バスの屋根に登ろうとするゴンを、キルアが止める。

「ねえ！ 凄いや、キルア！」

「バカ、落ちるだろ！ 窓から身を乗り出すんじゃないよー！」

ゾルディック家の敷地。

そこで行われている当主争い。

その戦いは長くは続かず、やがて終わりを迎えた。

アルカとシルバの戦い。

それによって生み出されていた爆音が、聞こえなくなる。

しかし、アルカのせいで広範囲に砂埃が舞っているため、2人の様子は分からない。

時間が流れる。

少しずつ砂埃が晴れていく。

その時、魔法の言葉がククルーマウンテンに響き渡った。

「シャアアアアイニング フィンガアアアアア！」

「ギヤアアアアアアアアアアア！」

おわり（後書き）

” アルカ「シヤアアアイニング フィンガアアアアア！」”

元ネタ『機動武闘伝Gガンダム』ドモン・カッシュ

” ベクトル操作の念能力”

元ネタ『とある魔術の禁書目録』一方通行

初期設定

アルカ・ゾルディック

ゾルディック家第4子、ゾルディック家第5子のカルトと双子。子宮での発育中、カルトのオーラに当てられ、精孔が開く。

その際、オーラを制御できず、体内のオーラが流れ尽きて死亡。

しかし、カルトの念能力によってオーラを供給され、カルトの”念獣”となる。

双子という事実によつて、アルカとカルトには強い繋がりがあ

る。そのためアルカの意識は、カルトの意思に左右されてしまう。

アルカとカルトが幼児である3歳の頃、ミルキがキルアを虐めている光景をカルトが目撃。

シヨックを受けたカルトは心の中で助けを呼び、それを念獣であるアルカが受ける。

その時、曖昧だった念能力が”ミルキを殺す”という目的を達成するため形を得た。

生から死へ、死から生へ、”ライフメーカー反転術式”。

ミルキはオーラを扱えなかったため、その生命活動を反転させることにアルカは成功。

その際、間接的に殺した事実をカルトが否定したため、アルカは強い自由意思を得た。

ちなみに、虐められていた8歳のキルアは、その光景を目撃。

殺人の経験もあつたキルアだったが、兄を弟が粉微塵にする姿は記憶に残る。

その後、殺人を嫌う行動が見られたため、イルミの念能力によつて記憶を封じられた。

カルト・ゾルディック

輪廻した者であり、原作の知識を持つ。

子宮での発育中、カルトのオーラに当てられて死んだアルカを念獣として再生した。

初期のアルカは言葉を喋れず、感情も無く、カルトも上手くアルカを操作できなかった。

しかし3歳の頃、カルトの願いを受け、アルカがミルクを殺害。その事をカルトは否定し、”アルカが自分の意思でミルクを殺した”と思い込む。

それによってアルカは意思を持つ念獣となり、自動で動くようになった。

その後、アルカを見る度に、間接的にミルクを殺した事実を否定し続けることになる。

そのストレスを避けるためにアルカを嫌うようになり、アルカに対する扱いが雑になる。

しかし、念獣であるアルカは逆らわないため、アルカの扱いは、さらに酷くなっていった。

さらにさらに、カルトのオーラもメモリも、アルカを維持するので精一杯。

オーラは最低でも半分ほどアルカに向かって流れ続け、”練”を維持する余裕はない。

メモリにも余裕が無いため他の能力は作れず、そのストレスは半端ではなかった。

・カルト語録

「それと、あまり死なないで」

ヨークシンで団長に殺され、ゾルディック家で復活したアルカに言ったカルトの言葉。

「それと、あまり死なないで」 「回収しに行くのが面倒だから死ぬな」

その1年後、キメラアントの巣を調べに行って焼死したバカを

回収しに行ったカルト。

カルト、マジ切れ。 アルカの頭を小突く程度で済ませたカルトはマジ天使。

キルア・ゾルディック

アルカがミルキを殺す場面を目撃し、イルミの”針”によって記憶を封じられた。

しかし、アルカに対する不安は消えず、アルカを見る度にストレスが生まれる。

そのストレスを避けるために、アルカを避けるようになるキルア。

という設定だったが、いつの間にかゴンLOVEになってたでござる。

ゴンと2人きりになるためにアルカを振り切るキルアの図。

はじめり（前書き）

こちらは”3時間で分かる【転生】アルカ・ゾルディック”を再構成したものです。

はじまり

超能力の開発を施された学生の住む学園都市で、オレは実験に協力する。

それはレベル5からレベル6へ、超能力者から絶対能力者へ至るための実験だ。

コンピューターの出したプランに従い、2万通りの環境で2万体のクローンを、オレは殺す。

だが、連日で何度も行われる実験の途中に、この世界の主人公がオレの前に現れる。

”とある魔術の禁書目録”の主人公である制服を着た青年が、原作通りに現れる。

そして、オレの超能力を打ち消した青年は、オレを殴り倒して実験を中止させる。

「んな面倒な事、やるわけねエだろ。能力開発ウ？ やらねエよ。お断りですウ」

ん？ ちょっと口調がオカシイな。 緑の薔薇乙女みたいな口調になつてンじゃねエか。

まア、いいか。 ンな事より話をしよう。 あれはア、まだオレが子供だった頃の話だ。

オレが”一方通行”だと気付いたのは能力開発を受け、一方通行の能力を得た後だった。

いわゆる原作知識のあるオレは、このままじゃ”とんでもねエことになる”と知っていた。

原作通りに進めば、2万体のクローンもとい御坂妹を殺し、上条さ

んに殴られ、
頭に銃弾を叩き込まれ、8兆円の借金を擦り付けられ、メルヘン野
朗に襲われちまう。

そんな中で生き残るのは、”一方通行”の能力があったとしても、
オレには出来ねエ。

いや、出来るのかもしれないねエが、オレはやりたくねエ。 先のこと
を考えただけで嫌になる。

だからオレは能力開発を断った。 オレに触れようとする研究者達
を、能力で弾き返した。

「ここから出て行けたア？ おいおい、いいんですかア？ もう戻
って来ねエかも知れねエぞ。

構わねエ？ ……あア、そう。 じゃア、お別れだ。 もう二
度と会えない事を祈ってるぜエ」

研究所から出ててもオレは油断しなかった。 簡単に手放すとは思っ
ていなかったからなア。

事故って”相手”を殺さないために反射の防壁を切り、まずは学園
都市を出ることにした。

学園都市の中じゃ、どこから最大権力者の手が回って来るか分かっ
たもんじゃないねエ。

んな事を考えながら歩いていたオレは早くも、都市を徘徊する無人
機の特攻を受けた。

たしか清掃ロボットだったか……そいつをオレは反射的に”反射
”した。 あア、反省してる。

どうもオレの身に危険な物が触れると、反射的に”反射”して、弾
いちまうみてエだな。

”一方通行”の能力を把握して切ったつもりだったがア、まったく出来ていなかったわけだ。
”反射”で打つ飛んだ筒型のロボットは、爆弾みてエに中身を辺りにバラ撒いた。
それが原因で警備員を呼ばれ、銃を向けられ、最後には戦車を呼ばれちまった。

今思えば、さつさと学園都市を囲む壁を越えるべきだったなア。
まア、今更な話だ。

今なら空を飛ぶなんざア簡単だが、あの頃のオレは、上条さんと同じくらい頭が悪かった。

一方通行の能力を信じ切れていなかったし、なにより空を飛ぶ勇気がなかったからなア。

オレは見つともなく、アリみてエに地面を逃げ回るか、建物の中へ逃げ込むしかなかった。

その時、都市の監視カメラに顔を撮られたせいで、オレは様々な罪を被せられた。

殺人罪または過失致死罪、傷害罪または過失傷害罪、公務執行妨害罪とかなア。

オレは現行犯になっちまった。これじゃア、学園都市の外へ出ても身元がバレちまう。

だが、その状況を”どうにかする”方法が、心優しい学園都市様からオレに差し出された。

レベル5になれば免責してやるってなア。ちなみに、その頃のオレはレベル3だった。

ちよっと考えたがア、学園都市の保護を受けるしか、オレが生活する方法はなかった。

戦車をブチ壊すような危険なガキを、学園外の奴等が受け入れるはずがねエからな。

ロボットを弾いた所を、カメラで撮られていた時点で、オレは詰んでたってこつたア。

んな訳で、オレは今日も元気に、誰かさんのクローンを殺す実験に参加している。

コーヒー缶を片手に持って立っていれば、勝手に相手が自滅してくれる簡単な御仕事だ。

それにしても、我等がヒーローは未だ来ねエのか？ もう夏休み入ってんだが……。

あ？ 誰だ、テメエ。 御坂妹じゃねエな。 あア、クローンのオリジナルか。 忘れてた。

だが、テメエは呼んでねエ。 オレが会いてエのは上条さんだ。 上条さん連れて来い。

だいたい、テメエの声は頭に響くんだよ。 キャンキャンうるせエ 雌犬だなア、オイ。

「お待ち下さい」

「計画外の戦闘は、予測演算に誤差を生じる恐れがあります」
「と」

「ミサカは警告します」

戦闘なんてしてねエよ、シスターズ。 オレは美味しいコーヒーを飲んでただけだからなア。

そこにいるオリジナルもとい御坂美琴が、勝手に暴れて実験場を壊したんだろオが。

なにか飛んで来たみてエだが、自動で反射されてたからなア。 知ったことじゃねエ。

そオいや、いつの間にかレールが辺りに突き立ってんだが、これも
テメエの仕業か。
まったく所構わずビリビリさせやがって、周りの迷惑も少しは考え
たらどうなんだア？
じゃア、オレは行くから後片付けヨロシク。 次の実験場へ急がな
くちなア。

「・・・アンタ達・・・何なの・・・？」

「おかしいよ・・・何で、こんな計画に付き合ってるの？ 殺され
ちやうのよ？」

「こんなのワケ分かんない・・・」

おい、片付けの邪魔になるから退けよ、オリジナル。 復旧が遅れ
るだろオが。

誰のせいで、こんなに散らかってると思ってんだア？ 何しに来た

んだよ、オリジナル。

あア、邪魔しに来たんだつたなア。 テメエのクローンを殺す実験
を止めるために。 なア？

「あんたはアアア、黙ってるオオオオオオ！」

おオ、もう復活したか。 それで、どオするんですかア？ またコ
インでも飛ばしますかア？

第三位の超電磁砲ってエのも、たいした事ねエな。 第三位だから
仕方ねエか。

まア、レベル5の順位は、戦闘力や演算力で決まっている訳じゃね
エンだけだよ。

だとしても、原作に比べてオレの扱いが悪い。研究者共は、オレを過労死させてエのか？

上条さん、早く止めてくんねエかな。後は、オレを殴れば実験は中止されるってエのに。

なにしろ、実験のプランを出した”お空の上の計算機”は、もう壊れているはずだからなア。

そんで、さらに120体ほど殺した頃、オレの期待を裏切ることなく上条さんが姿を現した。

どうやって判別したかだア？ 一目見れば分かるだろオが。あのウニ頭は間違いねエ。

そんじゃア、原作通りに派手なプラズマ作って、上条さんを受け待ちましょオかねエ。

「うるせえよ。ちっせえ事情なんて知ったことじゃねえ。オレは、お前を助けるために、ここに立ってんだよ。お前は世界で、たった一人しかいねえだろうが」

「勝手に死ぬんじゃねえぞ。

お前には、まだ文句が山ほど残ってた。

今から、お前を助けてやる。お前は黙って、そこで見てろ」

やべエ、プラズマを作るのが早すぎた。説教なんてしてる場合じゃねエぞ、上条さん。

目の前にあるのがプラズマって分かってねエのか？ シスターズが慌ててんじゃねエか。

オレは説明する余裕がねエしなア。プラズマを作るのって、けっこう忙しいんだよなア。

「歯を食い縛れよ、最強！

俺の最弱は、ちつとばつか響くぞ！」

おオ、やっとシスターズへの説教が終わったのか。　さアて、このプラズマどうすっかなア。

空気を圧縮した副産物だからなア。　上条さんの右手で触れても消えねエンだよなア。

消すのは不自然だし、空に打ち上げるか。　ほーれ、とんでけー、つてなア。　キハハ。

さア、来いよオ。　今なら殴り放題だぜエ上条さん。　確実に一発、いやア二発だア。

オレの顔面に渾身の拳をブチ込んで、この最低エな実験を中止させることが出来るぜエ。

ちゃんと見てろよオ、シスターズ。　まずは御坂妹の分、次も御坂妹の分だア。　クハハ。

しかし、おかしいなア、オレ。　シスターズもとい御坂妹のこと、そんな好きじゃねエのに。

いやア、むしろ、殺す気で掛かって来やがって、いけ好かねエ奴とか思ってたのになア。

いつの間にオレの中で、こんなにシスターズのランク上がってたんだ？

まア、やつぱ、一万回を越える実験つてエ死線を、一緒に潜ったのがデケエのかもな。

実際に死線を越えたのはシスターズだけなんだがよ。　オレは立ってただけ、だからなア。

だからオレの一方的な感情だがア、シスターズを戦友って呼んでも違和感はねエ。

つてオレすげエな。今、人生で一番、頭回転してンじゃね？ 世界が止まって見えるぜ。
まだ、上条さんが拳振り上げてる途中？ おそらく300文字以上考えてっけど・・・あれ？
これって・・・アレじゃねエか？ 時間が、ゆっくり・・・周りがすげエスローになるって・・・、

死ぬ前の

ンで気が付いたら、また生まれ変わってやがった。何が何だかサッパリ分からねエ。
上条さん、天使かと思ったら死神だったのな。おまけに一方通行の口調が直ってねエ。
あー、あー、テスト。ただいまマイクのテスト中。せーの、上イイ条くウウウウウン。

よおし、これで一方通行の口調は直ったはずだ。え？ うるさいって？ 悪イな、弟君。
お兄ちゃんは、ちよつと前世の記憶を魂から読み込んで、肉体の記憶と統合中なんだ。
なんて言っても、3歳じゃ意味わかんねエよな。分かっちゃっても困るんだけどよオ。

あー、カワイソウな物を見る目で、弟君がオレを見てやがる。お兄ちゃんハートブレイク。
やめる！ そんな目でオレを見るんじゃねえ！・・・あれ？ なんかゾクゾクしてきたなア。
あアー、ダメだ、すげエ気持ちいい。お前そんな表情されたら。

あ、もう、我慢できねエ。

ムニユムニユー！

あれ？ どうしたんだア弟君。 そんなに怖い顔して、拳を握り締めて。 なんか萌える。

あ、待った。 痛い、痛いって、殴っちゃダメだって弟君。 え？

弟君じゃなくて、カルト？

誤解されそうな名前だなア、宗教的な意味で。 ハマちゃってるヒトの仇名みてエだ。

さアて、そろそろ記憶の統合が終わるな。 肉体の年齢が低いから、不具合も起こらねエ。

そういえばオレの名前って何だ。 アルカ・ゾルディック？ どこかで聞いた覚えがあるな。

あア、”ハンター×ハンター”のゾルディック家四男が、そんな名前って予想だったっけ。

つまり、”ハンター×ハンター”のゾルディック家四男であるアルカに転生したってことか。

3歳になるまで前世の記憶が無かったのは、肉体に魂が定着していなかったからか？

そオいや、3歳頃は第一反抗期だからなア。 その影響で思い出したのかも知れねエ。

よオし、記憶の統合が終わって、ようやく頭がスッキリしたぜ。 最高にハイツてやつだア。

しかし、おかしいなア。 記憶が虫食い状態で、自分が、どんな性格だったか覚えてねエ。

本来のアルカも”ハンター×ハンター”では後ろ姿しか見せてねエ

から、参考にならねエし。

いわゆる原作の情報は、魂にバツチリ保存されているから問題なく読み取れるか。

もつとも、まだ連載中だったから、カイトが幼女でワケワカメになつた所までだがなア。

あの後、いつたい、どうなったんだか・・・こうなったら、自分の目で確かめるしかねエな。

あー、なんか、また頭がモヤモヤしてきた。 カルト君をムニユつて、スッキリするかア。

前の世界じゃア、近くにいたのは研究者と、武装したシスターズだけだったからなア。

癒されるぜエ。 悪くねエな。 いや、むしろ最高だア。 よく殺つてくれた、上条さん。

オレも今日からアクセロリータだア！

あ、待った。

痛い、痛いって。

殴っちゃダメだってカルト君。

はじまり（後書き）

” お断りですウ ”

元ネタ 『ローゼンメイデン』 翠星石

” ンな事より話をしようぜ ”

元ネタ 『エルシャダイ』 ルシフェル

” ダメだなア、全然ダメだ ”

元ネタ 『うみねこのなく頃に』 右代宮戦人

” 一方通行の走馬灯 ”

元ネタ 『ハンター×ハンター』 ナツクル

” 上条さん、なんで殺してしまウン？ ”

元ネタ 『火垂るの墓』 節子

” そんな目で俺を見るんじゃねえ！ ”

元ネタ 『遊 戯 王デュエルモンスターズ』 闇遊戯

” あアー、ダメだ、すげエ気持ちいい ”

元ネタ 『ハンター×ハンター』 キメラアントのラモット

” 最高にハイッてやつだア ”

元ネタ 『ジヨジヨの奇妙な冒険』 D I O

原作前 ソルディック家（前書き）

【あらすじ】

一方通行に転生した者が、
上条さんに殴られた衝撃で、
殺し屋一家に転生しました。

原作前 ソルディック家

ハンター世界にある念能力ってエのは、生命エネルギーであるオーラに関する技術だ。
体から噴き出るオーラは水蒸気みてエなものだが、水蒸気みてエに白く濁ってはいねエ。
アニメ版じゃ色が着いてたが、具現化系でもない限り、色なんて着いてねエだろオナ。

この念能力ってエ不可視の技術は、修行に時間を掛ければ、誰にでも習得できる。

もつとも、掛ける時間は年単位な上に修行もキツイから、普通の奴等は習得していねエ。

力尽くでムリやり起こす方法もあるが、500万人のうち495万人は、失敗して死ぬ。

「まア、2年で起こせりゃ良い方だよなア。しかも自力でだ。すげエだろ」

つてな感じで弟のカルト君に自慢したんだが、とんでもなく冷てエ視線を返されちまった。

ありゃア、かつて無いくらいにキレてるな。右ストレートで打っ飛ばされるかと思っただぜエ。

だがア、オレを鋭い目で見た後、拳を握り締めたままカルト君は何処かへ行っちまった。

やべエ、そんなに悔しかったのか？ まさか、あんなに怒ると思っっていなかったんだが。

我が家ではカルト君だけじゃなくて、兄のキルア君も念能力は覚え

ていないんだがなア。
兄弟がいるなんて初めてだから失敗したなア。　これが兄弟間の劣等感ってエやつか。

もつと言葉に気を付けねエと、大人になった時、弟君に後ろから刺されるかも知れねエな。

無いとは言えねエが、有るとは言える。　常識じゃ量れねエ殺し屋一家だからなア。

未来の話だが、原作ではキルア君が、兄と母を刺して家出しているから油断はできねエ。

後で御菓子か何か与えねエとな。　念能力者と言っても、オーラは万能の盾じゃねエ。

多少は軽減されるが、刃物で刺されれば怪我は負うし、高熱に触れば火傷を負う。

どんなに優れた念能力者でも、下地となる体の力が弱ければ、銃で撃たれて終わりだ。

「家に置いてある菓子じゃ逆効果だろオな。　カタログ雑誌で菓子を注文するか」

なんで雑誌かって言うと、今の時代は、携帯電話やパソコンが珍しい物だからだ。

ゾルディック家のある場所が、日本みてエに発展している国じゃねエのもあるけどなア。

携帯電話に折り畳み式はねエし、ネットも使えねエ。　使えるのは電話とメールだけだ。

パソコンはねエし、まだワープロだ。　そもそも、この国にネット回線は敷かれてんのか？

ゾルディック家の払う税金と外貨獲得で、儲けているはずなんだがなア。おかしいなア。

この前だって、消費税を3パーセントから5パーセントに上げるって話が出てたしなア。

まア、そんな事アどうでもイイか。

カルトの怒りを静める菓子を注文するために、兄のキルア君を探して、家の中を歩き回る。

なんでキルア君なのかって？ お菓子のことなら、キルア君に聞いた方が早いからなア。

この前も、チヨコロボ君ってエ名の菓子を、ケース単位で取り寄せたから詳しいはずだ。

「オレが買うのって駄菓子系だからさー。カルトの好みとは違うんじゃないの？」

カルトはチヨコロボ君とか食わねーし。アルカと同じで小食だろ？」

なるほどなア。チヨコロボ君の入った箱を、部屋の隅に山積みしているだけの事はある。

駄菓子系がダメならデザート系にするか。例えば、アイスとか、ゼリーとか、ケーキとか。

オレならアイスだがア・・・そういえば、カルト君の好物って何だア？ キルア君、知ってる？

「兄貴を君付けで呼ぶんじゃないよーよ」

それじゃ長男のイルミ君と被るだろオ？ まア、他にも呼び方は色々あるけどんだけだよ。

例えば、お兄様、お兄ちゃん、あにい、にいにい、ブラザー、兄殿、大統領オーツとかなア。

え？ 最後は違う？ 細けエこたアいいンだよ！ さア選べよ、ハリー！ ハリーハリー！

「じゃ、兄貴で」

おい、カルト君にはお兄様って呼ばせてるくせに、オレには兄貴って呼んで欲しいのかよ。

まったく仕方ねエなア。 そんなにカルトのことが好きなのかよ。

オレ、嫉妬しちゃうよオ？

え？ 気持ち悪い？ なアに、すぐに気持ち良くなるさ。 体の力を抜けよオ、兄貴イ。

「いてっ」

痛い、痛いって、殴っちゃダメだって・・・あれエ？ 痛くない？

今の声は、兄貴の声か。

うわア、どうしたんだア兄貴。 手首が曲がっちゃいけねエ方向に曲がってるじゃねエか。

もしかして新技かア？ え？ 違う？ オレに触ったら、急に手首が折れ曲がったア？

あー、見覚えのある現象だなア。 え？ 心当たりがあるのかわかって？ いや、ねエな。

嘘じゃ無いって。 兄貴に捉え切れないほどの速さで、オレが動けるわけねエだろオ？

たぶん、気付かない間に疲労が溜まっていて、それが原因で骨折したんじゃないか？

兄貴さア。 2年前に天空闘技場へ放り込まれて、この前帰ってき
たばかりだろオ？

きつと兄貴、疲れてるンだよ。 執事に言っつて、ちゃんと検査して
もらつた方がいぜエ。

だが、まずはア、その手を治療しねエとな。 よオし待つてるよ、
すぐに執事呼んで・・・

「キルア様、ご安心ください」

おオ、キタ、執事キタ。 早い、さすが執事。 良かったなア、兄
貴。 これで助かるぜエ。

じゃア、オレは邪魔になるから出て行くか。 いやア、執事が有能
で良かった良かった。

え？ ちよつと待て？ どうしたンだア、兄貴。 もしかして、手
を握つてて欲しいのか？

「・・・待てよ」

ダメだつて兄貴。 離してくれよ。 オレ達、兄弟だろ？ そんな
ことしちやダメだつて。

ほら、執事さん達も見てンじゃねエか。 こういうのは2人きりの
時にやるモンだろ？

だから、その握り拳を下ろせつて。 そんなことしたら、無事な方
の手まで折れちまうぞ。

「やっば、アルカのせいじゃねーか！」

あ、バレたア？ いや、悪いねエ。 まさかオレも、こうなるとは
思つてなかつたンだ。

どうも、オレの隠された真の力が目覚めたらしいなア。 わざとじ

やねエんだけだよ。

え？ グダグダ言ってるんで、さっさと説明しろ？ 分かったよ。

じゃあ、まずは念……

……あれ？ おかしいなア。ここは何所だア？ あア、オレとカルトの子供部屋じゃねエか。

よオ、カルト君。オレの記憶飛んでんだけど、なんか知らねエか？ おーい、もしもーし？

ダメだ、カルト君まだ怒ってるのか。って事は、そんなに時間は過ぎてねエのかもなア。

兄貴に念能力のことを話そうとしたら、意識を失ったんだっけ。きつと犯人は執事だなア。

だがなア……何も言わずオレを気絶させるなんて、ゾルディック家の執事らしくねエ。

反射的に手が出たなんてありえねエから、きつと父や母から何か命令されてたんだらうな。

もしかして、兄貴に念能力の存在を教えちゃいけねエのか？ だつたら早く言えつてエの。

まア、念能力を使えるようになったのは今日だし、すぐにカルト君に見せに行つたからなア。

あア？ よく考えたらオレが念能力者になった事って、カルト君以外の奴に言ってるねエな。

まア、いいか。オーラを纏ってるんだし、同じ念能力者なら一目で分かるだろオ。

念能力者じゃねエ兄貴にオーラは見えてなかっただろオが、執事は

念能力者だからなア。
その執事から父や母に、オレが念能力者になった事は報告されてい
るはずだ。

そオいや、オレを気絶させた奴は、どうなったんだ？ ”反射”を
突破されたんだよなア。
思考する間も無かったから情報が足りねエが、前世みてエに万能じ
やねエってことか。
オーラの解析は終わっていたから、オーラの性質がヒトによって違
うのが原因だろうなア。

原作知識によると強化系・変化系・放出系・操作系・具現化系・特
質系の6種だったな。
だがア、これはネテロ会長が師範の心源流による分類であって、世
界の法則じゃねエ。
変化系よりの強化系や、放出系よりの強化系なんて、曖昧な言い方
になるからなア。

念能力による攻撃を反射するためには、オーラを解析し、正しい値
を知る必要がある。
そのためには自分のオーラだけじゃ情報が足りねエ。最低でも数
百人の情報が必要だ。
多ければ多いほど良いが、完全な反射を得るためには数千人の情報
が必要だなア。

だがア、この世界に、そんなに念能力者はいねエよな。おまけに
念は秘匿するものだ。
念能力を解析したいって言って、素直に解析させてくれる奴は、よ
ほどのバカだろうなア。
もしくは、解析に協力する振りをして、オレの能力を盗み取ろうと

する奴かも知れねエ。

”レベル6シフト”でシスターズと戦った時みてエに、念能力者を殺す方が安全だなア。

原作知識によると、兄貴の行っていた天空闘技場の200階以上は、念能力者の巣だ。

どうせ兄貴と同じように、オレも天空闘技場へ放り込まれるだろうから、急ぐ必要はねエ。

そオいや、オレの系統は何だア？ さっき言った心源流の水見式で調べてみるか。

コップに水を入れて、木の葉を浮かべて、その前でオーラを練れば良いんだっとなア。

・・・ああ？ なんだア？ オーラを練れねエ。 なんか、疲れてんなア。 ガス欠みてエだ。

体内のオーラが残り少ねエのか。 でも、なんでだア？ そんなに使ってねエよなア？

気絶する前は十分にあったんだが・・・ああ、もしかして反射はオーラを消費するのか？

気絶させられた時に、執事の攻撃を反射し切れず、オーラを使い切ったのかも知れねエ。

つまり、この能力は”一方通行”の超能力じゃねエ。 オーラで能力を再現したものは、

反射を突破されたのは情報不足が主な原因じゃなくて、単純に力不足だったんだらうな。

そうなると困るなア。 攻撃に対する自動反射で、オレのオーラが勝手に消費されちまう。

前世の超能力なら自動反射をオフに出来るんだが、この念能力じゃオフに出来ねエ。

自動反射がデフォルトなのは、前世で自動反射を使いっ放しだったからだなア。

念能力の制約として、”攻撃は自動で反射する”って条件付けされちまってるんだ。

超能力じゃねエから、他にも前世と違う部分があるかも知れねエな。ちよつと確かめるか。

カルト君、オレちよつと出かけるよ。え？ 家出するのかつて？

それはねエよ。

双子の弟と抱き枕を兼ねるカルト君を置いて、オレが家出するわけねエじゃねエか。

え？ さつさと家出しろ？ 酷いなア、カルト君。子供部屋を一人で使いたいから？

おいおい、一人になって部屋で何をやる気なんだア？ あア、分かってるよ、アレだろオ？

電動マッサージ機を股に当てて・・・あ、痛い、痛いつて、物を投げちゃダメだつてカルト君。

「変態、出て・・・なんでもない」

クールだなア、カルト君。耳まで真っ赤だけど。そんなに興奮するこたアねエだろ。

あア、分かった分かった。しばらく一人にしてやるよ。その間に終わらせておけよオ。

何をつて？ そりゃアお前・・・言わせんなよ恥ずかしい。じゃアな、カルト君。キハハ。

・・・さアて、どうやら弟のカルト君は、オレの能力について詳しく聞いているらしいなア。
じゃなきゃア、カルト君の投げた物を反射した時、あんなに早く反応できるはずがねエ。
まア、自動反射の向きを下に変えたから、カルト君の方には飛んで行かなかったんだが。

さすがゾルディック家だなア。 さアて、どこまでオレの能力は解析されちまったのかなア。

ゾルディック家の外で戦う時は、ちゃんと相手を殺すように気を付けねエといけねエな。

それと、自動反射が働かないように、攻撃を回避する必要もあるのか。 面倒くせえ。

よオし、ここら辺で良いなア。 どうも監視されている気がするんだが、まアいいか。

監視を振り切れる気がしねエし、どうせゾルディック家の敷地内は執事の監視範囲内だ。

それに、” 兄貴を傷付けてしまった力を把握しようとする様子” を見せるのも良いしなア。

そオいや、兄貴はどオなつたんだ？ オレに話を聞きに来ると思っ
ていたんだがなア。

手の治療が終わってねエのかも知れねエし、執事に妨害されているのかも知れねエ。

まア、同じ家に住んでいれば話すチャンスは数多くあるし、急ぐ必要はねエなア。

「カルトと思つたら・・・なんだ、お前か」

おオ、長男のイルミ君じゃねエか。 わざわざ兄貴が、オレに会いに来るなんて珍しいなア。

なんか用か？ え？ 今から一緒に出かける？ ダメだって兄貴、オレ達”家族”だろ？

もうすぐ日が沈むのに2人きりでデートだなんて、下心があると思われても仕方ないぜエ？

え？ 2人きりじゃない？ カルトも連れて行く？ おイおイ、正気ですかア、イルミ君。

5歳くらいの小さな子を、森の中へ連れ込む趣味が兄貴にあったとは思わなかったぜエ。

オレは汚い物を見る目で、あんな事や、こんな事を考えている兄貴を見ちゃうよオ。

え？ 行き先は森の中じゃない？ 天空闘技場へ行く？ それは、また急な話だなア。

じゃア、ちよつとキルア君に挨拶して行こうかなア。 ダメ？ ダメかア。 そうですかア。

仕方ねエな。 じゃ、ちよつと行ってくるか。 原作が始まる5年後までに帰って来ねエとな。

原作前 ソルディック家（後書き）

” 右ストレートで打つ飛ばされる”

元ネタ 『幽々白書』 浦飯幽助

” ハリー！ ハリーハリー！”

元ネタ 『Hellsing』 アーカード

” きつと兄貴、疲れてるんだよ”

元ネタ 『Xファイル』 スカリー 捜査官

” おオ、キタ、執事キタ”

元ネタ 『FF11』 ブロントさん

原作前 天空闘技場 1 (前書き)

【あらすじ】

念能力者になったアルカは、
兄弟の一部を押し折ったため、
天空闘技場へ放り込まれました。

原作前 天空闘技場 1

天空闘技場ってエのは参加資格無条件で、対戦相手に勝てば金を貰える場所だ。

ただし、勝つと階層が上がるので、弱い相手と戦い続けて金を稼ぐことは出来ねエ。

その代わり、階層が上がるとファイトマネーが増え、個室を使えるようになつたりもする。

そんな場所にオレとカルトの2人は放り込まれ、200階まで勝ち上がるように言われた。

オレとカルトは双子で、共に5歳だ。同じ頃に兄貴も天空闘技場へ放り込まれている。

これだけ聞くと、年齢を除いて不自然な所はねエ。まア、年齢が不自然すぎるんだが。

「とばつちり」

カルト君も分かってんのな。 そうだなア。 兄貴からオレを引き離すことが目的だろオナ。

カルト君まで天空闘技場行きになったのは、オレだけ行かせるのは不自然だからだ。

それは主に、兄貴に説明する時になア。 よほど兄貴に、念のことを知られたくねエらしい。

聞かれたから教えようとしただけで、自分から教えようとしたンじやねエんだけどな。

なんか、キルアの手首を折ったことで、妙な勘違いをされている気がするんだよなア。

やっぱり、3歳頃にアルカがオレになった変化を、不審に思われているのかも知れねエ。

3歳以前のアルカって、どんな奴だったんだろオナ？ カルト君に似てたのかも知れねエ。

原作知識に情報はねエし、統合後の記憶に有ったのはアルカって名前だけだったからな。

今なら”昔はどんなだった？”って聞けるが、それで今から演技するのは不自然だしなア。

まア、いいか。 どうせ、天空闘技場の200階に上がるまで、家には帰れねエからな。

体を鍛えながら、戦闘経験を積みながら、念能力の鍛錬をしながら、ゆっくり考えるかア。

念能力者のオレなら200階まで力押しで行けるだろオが、それじや鍛錬にならねエ。

さアて、そこで問題になるのがオレの念能力だ。 ”一方通行”とでも名付けるかねエ。

こいつは、力の大きさに比例する量のオーラを消費して、力の向きを操作できる能力だ。

向きを変えるだけであって、力を生み出したり、力を消滅させたりする事はできねエ。

向きの操作範囲は体に触れている場所に限られるがア、これは違ってもかも知れねエな。

前世の超能力時代と違って、操作範囲が広がっているような気がするんだよなア。

攻撃を受けてみねエと分からねエが、おそらく、体を覆うオーラに判定があるはずだ。

ンで、何が問題なのかって言うത്”自動反射”だ。勝手に兄貴の攻撃を弾いたアレな。これが有ると前世みてエに、ただ立っているだけで、オレの対戦相手が自滅する。分かり易く言うと、殴りかかってきた相手の腕が、オレに触れただけで押し折れる。

自動反射の向きを別の方向へ変えても、その方向に相手の腕が折れるだけだろオナ。自分に攻撃が通るように向きを変えても、デフォルトである向きの反転に戻るだけだ。睡眠中に襲われても良いように、前世で自動反射を使いつ放しにしていたからだろオナア。

このままじゃ、戦闘経験を積めないまま、200階の念能力者コースへ直行するだろオ。オレも念能力者だがア、戦闘経験の差で負けちまうなア。なによ、5歳だしなア。自動反射だって、オーラが尽きると発動しなくなるし、オーラが尽きればオレは気絶する。

そんな間抜けを晒さないために必要なのが、対戦相手の接触を防ぐための防具だ。体に纏うオーラを覆うほどの厚さがある防具なら、相手の自滅を防ぐことが出来るだろオ。対戦相手の直接攻撃が当たっても、その反動で防具が跳ね上がるだけで済むはずだ。

そのためには、薄い鉄の板じゃ厚さが足りねエ。装甲の厚さは3

ミリほど欲しいなア。

だがア、全身の装甲が偏りなく3ミリ以上ある甲冑なんて、どこかに注文しない限りねエ。

注文する金がねエし、注文してから出来るまでに時間が掛かるから、全身甲冑は無理だ。

どうしようかと思いつつ、天空闘技場の受付に出来た列に、とりあえずオレは並んでいた。

そこで、人体着用の動物型又イグルミを着た不審者が、列の前の方にいる事に気付いた。

武器持ちは禁止されているはずなんだがア、もしかして着グルミはギリセーフなのかア？

「それって……」

どうしたんだア、カルト君。 そんなに呆然としていると可愛くて、誰かに浚われちゃうぜエ。

え？　なんで、着グルミを着ているのかって？　さっき、親切な人からコレを貰ったから。

あア、もしかしてカルト君も着てみたかったり……え？　近寄るな？　そうかア、残念だア。

アニメのファンシーな犬とネズミを合わせた感じの着グルミなんだけど、よく出来てんなア。

普通の着グルミは胴体部分が薄い布なんだがア、ちゃんと布を重ね合わせていやがる。

試合で受ける衝撃を吸収するために、厚い布の間には綿が詰め込まれているしなア。

欠点と言えば視界が狭くなることか。　目となる穴が5センチほど

上にあるからなア。

まア、このまま視界を塞いで戦えば、相手の動きを読む訓練になるから構わねエな。

飛び道具で自動反射を引き起こされたら、自滅するからなア。ま
ずは回避を覚えねエと。

あア、いつの間にかカルト君が参加受付を終えて、試合会場へ行っ
てンじゃねエか。

酷いなア、カルト君。わざわざ、オレに気付かれないように気配
消して行く事アねエだろ。

オレは列を抜けたから並び直しだなア。まア、カルト君と戦う可
能性が減るから良いか。

それにしても、やつぱりダメだなア。視界に入っ
てねエだけで、弟君の動きに気付
けねエ。

オレが無意識の内に演算しているみてエに、兄貴なら無意識の内に
気配を追えるンだが。

これは歳の差って言うよりも、才能の差だな。そもそも体の作り
が違っ
つのかも知れねエ。

そオイヤア、兄貴の手首を事故で折った後、兄貴に会ってねエンだ
が、どう
なったンだ？

もしも、オレの力である”一方通行”が、オーラで直接攻撃するタ
イプなら
アウトだったア。

”自動反射”は受けた力の向きを反転させるだけだから、念能力者
には成
ってねエだろオ。

さアて、やっと参加受付ができるなア。登録する名前は面倒だか
ら、アル
力で良いか。

この世界には名字の無い奴なんて珍しくねエし、ゾルディックは無

くても構わねエだろ。
それに、天空闘技場の登録名簿を手に入れて、ゾルディックを追う復讐者もいるからなア。

さアて、どうやって相手を倒そうかねエ。　まずは、時間ギリギリまで回避の練習だなア。
手エ抜いてンのがバレると警告を受けるかも知れねエから、最後は相手を打っ飛ばすか。
”子供で打たれ弱いから回避しまくって、最後に決死の一撃を入れました”ってな感じで。

「子供と戦うなど考えられぬ」

対戦相手である白髪ポニーテールの渋い爺さんが、そう言ってリングを降りちまった。
・・・おい、それで良いのか？　一階のリングは、入場者のレベルを調べる場所なんだが。
そんな訳でオレは、次の対戦相手が決まるまで、リング外の壁際で待機する事になった。

「おい見ろよ、ガキだぜ」

「ヘイ、ボウヤ逃げるなら今だぜ」

「遊びじゃねーんだぜ、ギャハハハ！」

「でつかいの！　運がいいなー！　一発で場内へたたき出してやれやー！」

5歳くらいの子供相手に容赦ねエなア。　まア、雑魚に容赦される必要はねエんだけどよ。

オレは容赦してやるよ。　本気でやると、相手が死んじまうからなア。　3分間待ってやる。

でっかい人、ちゃんと準備しておかねエと、オレの一撃に耐えられねエかも知れねエぞオ？

「ここ一階のリングでは入場者のレベルを判断します。

制限時間3分以内に、自らの力を発揮して下さい」

だがア、とりあえず回避だ。誰に何と言われようと回避・・・と思つてたんだが、ダメだな。

相手の動きが遅すぎるから、歩いて避けるのも難しくねエ。こっちは着グルミなのになア。

入場者の選別つて言つても、弱い奴ばかりとは限らねエンだが、こいつはハズレだなア。

こっちは大人用の着グルミを着ているから上に、視界が塞がれているってエ悪条件だ。

着グルミの奥まで手足が届かねエから、着グルミの奥を手足で掴んだまま動いている。

分かり易く言つと、両手足の潰れたファンシーな着グルミだ。あ、今、ピリッて音がした。

これだけのハンディキャップをオレが負っているってエのに、相手の攻撃は掠りもしねエ。

まア、そろそろ制限時間だし、格下の相手で遊ぶのは止めるか。なんか気の毒だしなア。

必死で子供を捕まえようとして、歩いて避けられる奴の評価って、良いわけねエよな。

ドオン

つて擬音を言葉にしなから、でっかい人の脚を片手で殴り、打っ飛

ばしてみるテストオ。
その結果、着グルミの腕は破れ、でっかい人は観客席の下にある壁まで飛んでいった。
胴体じゃなくて脚を殴ったんだがなア。まさか回転しながら飛ぶとは、芸の細かい奴だ。

見ての通り、”自動反射”の暴発を防ぐという役割を、着グルミは立派に果たしたがア。
その代わり、オレの体と相手の体に挟まれた着グルミは”自動反射”で破れちまった。
”でっかい人に”自動反射”が届いてねエのは、ヒトの形を保っている事から分かるだろオ。

ちなみに、でっかい人を打つ飛ばしたのは、着グルミってエ緩衝材を伝わった素手の力だ。
ゾルディック家名物である試しの門を2トンまで、5歳のオレは開ける事ができるからなア。
着グルミってエ緩衝材を挟んだとしても、上手く当てれば相手を打つ飛ばす事ができる。

「キミは50階へ」

しかし、丈夫だなア、この着グルミ。素材からして、普通の着グルミと違うんじゃないか？
まア、オレが相手を殴り終えるまで耐えた時点で、普通の着グルミじゃねエんだけどよ。
普通の着グルミだったら殴った瞬間に潰れて、”自動反射”が相手に通ってただろオな。

「おめでとう。しかし、着グルミを引き摺っているような状態で、

よく勝てたものだ」

あア、着グルミを譲ってくれたヒトか。助かったぜエ。思った以上に良い出来じゃねエか。

ちよつと破れちまつたが、あと一試合くらいは、この着グルミで何とか成るだろオナア。

ところで、この着ぐるみは何所に売ってあるんだ？あと数着ほど欲しいんだがア。

「一つ30万ジエニード。良ければ、次の試合が終わるまでに持って来よう」

高エよ。普通の着グルミの6倍以上じゃねエか。そんな値段で売れると思つてんのか？

え？売れる？おいおい、そんなドヤ顔されると、右ストレートで殴りたくなつちゃうぜエ。

ダメだなア、全然ダメだア。そんな大金を、5歳の子供が持つているわけねエだろオ？

「これから稼ぐのだろう？足りない分は後払いで構わない」

現在のオレに支払能力はねエ。50階クラスのファイトマネーは5万ジエニードだからなア。

6回ほど戦わねエと30万ジエニードは支払エねエし、試合の度に着グルミが必要になる。

着グルミは最悪、1回の試合で使い潰すだろオから、試合の度に支払う金は増えていく。

このままじゃア、赤字だ。だがア、100階クラスに上がれば、ファイトマネーは上がる。

50階クラスのファイトマネーは5万ジェニーだがア、100階クラスは100万ジェニーだ。さらに、100階に上がれば待遇は良くなり、個室を与えられ、宿代も必要なくなる。

つまり、コイツはオレが弱くて100階以上に行けねエと、ずっと赤字のまま損をする。

そして、オレが金を払わずに逃げる可能性だってあるのに、コイツのドヤ顔は揺るがねエ。

5歳のオレが支払金を踏み倒さず、100階まで上がって支払うと本気で思ってたのか？

ありえねエ。

じゃア、この提案はなんだ？ この提案をオレにする事で、こいつに利益は出んのか？

もしもオレを対象として、コイツが誰かと賭けをしているのなら、大金持ちってエことになる。

金持ちの道楽か？ 違うなア。コイツは着グルミを着て、試合に出ようとしてたんだぜ？

コイツの余裕は金持ちだからじゃねエ。思い当たる他の理由も、今一つ合理しねエ。

暗殺の復讐か？ 着グルミに何か仕込むのか？ いや、コイツと会ったのは偶然だ。

コイツだって、オレが着グルミを着て戦うとは思わなくて、言った時は驚いていたからなア。

いや、待てよ。

この世界には念能力者がいる。 思考や記憶を読む念能力者がいたって不思議じゃねエ。
ゾルディック家の子供だったことや、200階に行くまで帰って来ないように言われたこと。
推測の一つだがア、それらの事がバレているのかも知れねエ・・・
ちよつと考え過ぎかなア？

やっぱり情報が足りねエなア。 固有能力の発動に使われるのは、体外のオーラなのか？
オレの場合は体外だがア、能力によっては体内のオーラが使われているのかも知れねエ。
目の前にいるコイツはオーラを纏っていねエが、体内でオーラを使っているかも知れねエ。

だんだんコイツが物凄く怪しい奴に見えて来たア。 落ち着けよ、K O O Lになるオゼオレエ。
ファンシーな着グルミで、試合に出ようとしていたアホに、そんな裏があるわけねエだろ。
証拠がねエことを疑い始めたら切りがねエ。 今、オレに出来るのは気を抜かねエ事だ。

それに、コイツが無限転生者で、オレの正体を予測しているってエ事も考えられる。
アルカッて名前と、子供であること、ゾルディック家は子供を天空闘技場へ行かせること。
その事を原作知識で知っている転生者なら、評価が上方修正されても不思議じゃねエ。

なにより、この”ファンシーな犬とネズミを合わせた感じの着グルミ”ってボン太くんだろオ。

ボン太くんってエのは、他作品である”フルメタル・パニック！”のマスコットキャラクターだ。無限転生者でもないねエ限り、ここまで原作のボン太くん似せて作ることは出来ねエ。

「私が君のための特別な着グルミを用意し、君が私に30万ジエニ―を差し出す。

どうかね？ 契約するかね？ 私と契約して、着グルミ少年になっても良いのだよ！」

コイツが裏声で妙な事を言った今、この瞬間、コイツが無限転生者である事は確定した。

どうして最後までキャラを賣けないのか。 どうして最後に茶目っ気を出してしまったのか。

オレがコイツのために出来ることは、今のセリフを聞かなかった事にしてやる事だろオ。

そんで・・・ちょっと考えたがア、着グルミは今すぐ必要な物だ。

だからコイツと契約する。

契約書を書くのは次の試合が終わってからだなア。 次の試合には、もう間に合わねエ。

新しい着グルミが届くまでは、前の試合で手の部分が破れたコレで何とかするしかねエ。

まるで”アンパンマン”だなア。 コイツはジャムおじさんか？

キハハ、良いねエ。

いつまでも”コイツ”じゃ不便だし、ジャムおじさんで良いよなア。

え？ マジで良いの？

じゃア・・・ジャ、ジャムおじさんっ。 新しいパンを焼いて、オ

レの帰りを待っててくれエ！

そうして、オレは戦つたために天空闘技場を上り、ジャムおじさんは地上へ下りて行った。

ああ？ 無限転生者なのか聞かなくて良いのかだつて？ そりゃア、無粋つてもンだろオ。

オレが金を払い、ジャムおじさんから新しい体を貰う関係。それで良いじゃねエか。 それ

原作前 天空闘技場 1 (後書き)

” おい、それで良いのか？ ”

元ネタ 『FF11』 ブロントさん

” 3分間待つてやる。 ”

元ネタ 『天空の城ラピュタ』 ムスカ大佐

” 右ストレートで殴りたくなる ”

元ネタ 『幽々白書』 浦飯幽助

” ダメだなア、全然ダメだア ”

元ネタ 『うみねこのなく頃に』 右代宮戦人

” コイツのドヤ顔は揺るがねエ ”

元ネタ 『ハンター×ハンター』 クロロの予言詩

” KOOLになるオゼオレエ ”

元ネタ 『ひぐらしのなく頃に』 前原圭一

” 私と契約して、着グルミ少年になっても良いのだよ！ ”

元ネタ 『魔法少女まどか マギカ』 キュウベえ

> i 3 2 1 5 1 — 3 2 6 3 <

原作前 天空闘技場 2 (前書き)

【あらすじ】

天空闘技場に放り込まれたアルカは、
反射無双してしまうピンチに晒されましたが、
ジャムおじさんから着ぐるミを貰って助かりました。

原作前 天空闘技場 2

無傷のまま天空闘技場の50階へ上がったオレは、その日の内に再び試合が組まれた。

だがア、人体着用又イグルミ”ボン太くん”は片手部分が、前の試合で破れちまっている。

もしも、この部分で相手に触れれば、オレの意思に反して”自動反転”が発動するだろオ。

天空闘技場で学ぶべき事は、固有能力に頼らない戦闘方法と、そのための技術だ。

よって破れた右手を含む右腕を使わずに、相手に触れず触れさせず、試合を終わらせた。

まア、左腕の一発を当てただけで相手は壁まで飛んで、そのまま気絶したんだがア。

「専用の個室が用意されるのは100階からだからなア。 しばらくはホテル暮らしだなア」

50階のファイトマネーとして5万ジェニーを手に入れたんだけどよオ。 金が足りねエなア。

宿に泊まる金としては十分なんだが、着グルミ代は一着30万ジェニーだからなア。

まア、ジャムおじさんは”後払いで良い”って言っていたから、節約する必要はねエか。

そオいや、ジャムおじさんとは”一着30万ジェニー後払いOK”ってエ話しかしてねエなア。

もちろん支払期限は無期限だよなア？ 損傷した着グルミは無料で

修繕するだよなア？

そんなわけねエって？ いや、無期限で無料に決まってるんだろ？
なア、ジャムおじさん。

「着グルミ」ボン太くん”代の支払期限は、天空闘技場の150階
に君が上がるまでだ。

150階クラスのファイトマネーは1000万ジエニーを越える
からね。払えるだろう？

損傷した着グルミの修繕費用は一定ではなく、損傷の程度によっ
て変えさせて貰おう。

例を挙げると、片手の修繕ならば5万ジャニー、頭部の修繕なら
ば10万ジエニーだ」

支払期限は妥当だな。確かに払えねエわけがねエ。だが、修繕
費用はいけねエなア。

無料ってエのは欲張り過ぎだってエ自覚はある。だから、無料に
しろとは言わねエよ。

だがア、頭部に10万掛かるってエのは納得がいかねエ。なんで、
そんなに掛かるんだ？

ボン太くんの顔を造形するために掛かるってエンなら、そりゃア余
計な御世話ってエモンだ。

オレはボン太くんに拘りなんてねエからな。面が平らでも、覗き
穴があれば十分だ。

それは他の部分についても言えるなア。大きな丸い耳も、邪魔に
なるからいらないぜエ。

「これでもサービスしている方なのだよ？ 着グルミを作るのは手
作業なのだから。

しかも、特殊な繊維を使用して耐久性を高めた、戦闘にも耐える

特別な着グルミだ。

よく考えてくれたまえ。　少なくとも、30万ジェニー程度で作れる物ではないのだよ」

なんで、そんな物を作ったんだか。　そして何で、それで試合に出ようとしたんだか。

ジャムおじさんは弱そうだし、最初から試合に出るのが目的だったてエことはねエよなア。

いくら防御力があっても、アレじゃ勝てねエ。　じゃア、着グルミを作った理由は何だ？

前は否定した金持ちの道楽ってエ線が、着グルミの値段を聞いて再浮上してきたなア。

そもそも、考えれば考えるほどオカシイんだよなア。　謎過ぎるぜエ、ジャムおじさん。

まア、オレは着グルミが有れば良いんだけどよ。　支出が少なければ、もつと良いなア。

天空闘技場は1勝すると1階上がる。　常に勝ち続ければ、後150勝ほどで200階だ。

だがア、兄のキルア君でも2年かかったってエのに、それより早く上げれるとは思えねエ。

そして、1着を2試合持たせて、修復に約10万ほど掛かるとすると、750万ジェニーだ。

その倍の1500万ジェニーかかると考えても、150階クラスで2回勝てば返せちまうなア。

じゃア、ジャムおじさんの言い値で良い気もするがア・・・ダメだ。それじゃいけねエ。

1000万と比べると10万は小せエ。　だがア、よく考えれば1

0万は10万でも大金だ。

どうも今世といい前世の一方通行といい、手に入る金が大き過ぎて感覚がマヒしやがる。

そオいや、前世の貯金はどうなったんだろオな。例の計画で、かなり入ってたんだがア。

アレイスターに盗られちまったのかも知れねエなア。あア、今になっても忌々しいぜエ。

おっと、今考える事はソレじゃねエ。本体の値段は良いとして、着グルミの修繕費用だ。

片腕の修繕に1万ジエニー。それでもダメなら片手の修繕に1万ジエニーでも構わねえ。

でも、頭部は整えるのが難しそうだからなア。作業が遅れても困るし、5万ジエニーだ。

「あまり私を怒らせない方がいい・・・」

えー、ダメエ？ 仕方ねエなア。5の倍数じゃねエと計算が面倒だし、言い値で良いぜエ。

んで他の項目は、どうなってんだ？ かくかく、しかじか。よオし、この条件なら良いぜエ。

あー、ダメエ？ それなら、かくかくしかじか。よオし、契約成立だ。よろしくなア。

それにしてもジヤムおじさん、さっきは本気で怒ってたなア。やっぱ金持ちじゃねエのか。

中小組織の金は動かせねエが、それらと同じレベルの個人的な貯金があるのか？

着グルミを売って稼いだんなら凄エ。宝クジで当たったんなら使

い道が間違つてやがる。

なんて考えてるだけで、本人には言つてねエぞ？ 真面目な顔して血判押してるからなア。

お涙頂戴の昔話を聞かされても反応に困るしなア。 そんな時はア、笑えば良いのか？

つて言うか、この契約書はオーラとか付いてねエよなア。 もし隠されていても見えねエぞ。

さアて、契約書も貰つたし、さつそくジャムおじさんに頼みてエことがあるんだ。 後払いで。

新しい着グルミを用意するか、両手が破れた今の着グルミを直して欲しいんだが……。

あア、新しい着グルミが有んのか。 明日には持つて来るつて？ よオし、分かつたぜエ。

「明日、新しい着グルミを持つて、闘士の控室前で待つているよ」

あア、また明日だ。 じゃアなア、ジャムおじさん。 さアて、カルト君を探しに行こうかねエ。

だがア、オレより先に天空闘技場に入ったから、どの階まで上がったのか分かんねエな。

受付の御姉さんに聞くかア。 なア、カルトつてエ名前の闘士は今何階にいるんだ？

……いない？ あー、もしかしてカルト君は、偽名で登録してんのかも知れねエなア。

弱過ぎて1階で落ちたつて可能性はねエ。 カルト君、素手だとオレよりも強エからな。

念能力が無かつたら負けるね。 双子だし、いつか木原神拳を習得

するかも知れねエ。

しかし、どうすっかなア。これじゃア、カルト君と同じベッドと一緒に眠れねエじゃねエか。

あの柔らかくて温かくて心臓の音が聞こえて背徳感溢れる抱き枕がねエと熟睡できねエ。

まア、数日なら眠らなくても問題ねエンだけど、あんまり長くは持たねエな。理性が。

一緒のベッドで寝るなんて出来るのは、カルト君が小さい間だけだし、無駄には出来ねエ。

大きくなってから一緒に寝ようとすると、絶対零度の冷てエ死線を返されちまうからなア。

まア、今でも時々、冷てエ視線を向けられる事があるがア、そんな細けエこたアいいンだよ！

とりあえず気配を感じる方向を探すか。カルト君が逃げ回らなければ見つかるだろオ。

あっち行ってカルトくん、こっち行ってカルトくん！・・・ダメだなア、見つからねエ。

んな事やってる間に日も沈んじまったし、そろそろ天空闘技場を出て、宿を探しに行くか。

ところで御兄さん達イ、なんかオレに用ですかア？ さっきから邪魔なんで退いてくんねエ？

金を寄越せ？ ふーん。あア、物乞いね。その歳で人生に迷うなんて、大変だなア。

分かるぜエ。オレもカルト君を見ると、忍び寄ってムニユムニユせずにはいらねエンだ。

だが断る。

おっと、脚を振り回すなんて危ねエなア。もしオレに当たってたら骨が折れてたぜエ？

ナイフよりも足が先に出るなんて短気だなア。オーラを無駄遣いする所だったじゃねエか。

しかし、キックは良い判断だア。オレの身長が低いから、パンチは当たり難いもんなア。

キックの速度から察するに、少なくとも素人じゃねエな。こいつらは闘士かも知れねエ。

相手は3人、1対3か。 天空闘技場は1対1しかねエから、少しは経験になるなア。

よオし、いいだろオ。 多人数を相手にした回避の練習も必要だし、ちよつと遊んでやるか。

「こんな小さな子供相手に、恥ずかしいとは思わんのか」

あア、1階で試合放棄した見知らぬ爺さんじゃん。オレの代わりに相手してくれんの？

オレの出番が・・・まア、いつか。相手のナイフで怪我をしないように気を付けてなア。

つて言っている間に終わっちゃまった。 戦い慣れてるな。この爺さん、意外に強いのか。

「その着グルミ・・・」

おオ、誰かと思えばカルト君じゃねエか。一緒にホテルへ行こうと思って探してたんだぜ。

え？ この着グルミが欲しいのか？ カルト君の頼みなら、断るわ

けには行かねエなア。

違う？ そうかア。 まあ、この着グルミは試合中に破れちまったから、貰っても困るよなア。

じゃあ、ホテルを探しに行こうぜエ。 え？ いや？ ガーン。

お兄ちゃんシヨック。

もう泊まる場所は決まってる？ さすがカルト君、5歳とは思えねエ行動力だなア。

そこへ一緒にオレも泊めてくれんのか。 いやア、悪イな。 妹に何でも任せちゃって。

妹じゃない？ 分かっているよ。 わざとじゃねエって。 ちよつと舌を噛んじまったのさア。

じゃア、オレ達の愛の巣へ行こうぜエ。 あ、痛い、痛いつて、殴つちやダメだつてカルト君。

・・・ン？ あれ？ カルト君、手は大丈夫か？ 大丈夫だなア。 いや、オカシイなア。

ムニユムニユー！

おオ、やっぱり”自動反射”が発動しねエ。 これが愛の力かア。

愛の力、ハンパネエ。

でも、自動反射の通過条件は何だア？ 兄弟でも、兄のキルア君は弾いちまったよなア。

オレと弟君が双子である事に関係してんのか？ いや、肉体的な要素だけとは限らねエ。

精神に関する事なら、一定以上の好意を持つ相手には発動しないのかも知れねエな。

もしくは、念に自覚める前から毎日ふれていた相手には、発動しな

いのかも知れねエ。
ちなみに、弟君の服は力が小さいせいかなア？ オレに触れても能力は発動していねエ。

兄のキルア君が天空闘技場に連れて行かれたのは、オレがアルカになつた2年前だ。

そして最近帰つて来たから、突然現れて突然消えるイルミ君よりも接触回数が少ない。

だからキルア君に対して発動したのか？ いや、帰ったら両親に突撃して試してみよオ。

この”自動反射”は力の向きを反転させる。単に、反対側から押している状態じゃねエ。

力が反転していない場所と、力が反転している場所の境が、内部に出来るつてエことだ。

だから、相手が少しの力で触れても、”自動反射”が発動してしまえば簡単に壊れる。

たぶん。

いや、まだ分かんねエよ。兄貴に自動反射が働いて、カルト君に働かない理由もなア。

前世の超能力時代と違って、オーラって言う訳分かんねエ物が作用しているんだからな。

オレは仮説を作って並べて、忘れないように、無限に転生する魂にブチ込んでもらうだけだア。

このアルカって体は、前世で一方通行だった頃と違って、物忘れが激しいんだよなア。

特にヒトの名前とか顔とか覚えられねエし、一方通行ほどの演算能

力も期待できねエ。

記憶の方は魂に入れて置けば良いのだが、演算能力の方は何か引つ掛かるんだよなア。

まア、星の自転を利用した攻撃なんて、そもそもオーラが足りないから使えねエだろオ。

大規模な攻撃を放つても、悪名高いキメラアントの王には余裕で避けられそうだしなア。

いや、数百メートル先から一瞬で近付かれて、発動した瞬間に潰されるかも知れねエ。

まア、それは6年ほど先の話だ。

それよりもオレが抱き付いて、カルト君の着物を破つちまった今の方が重要だなア。

あア、悪イ、反省してる。カルト君をムニユムニユできると分かって、舞い上がったんだ。

許してくんねエかな。ダメ？ ガーン。カルト君に嫌われたら・・・存在していらねエ。

「アルカ君と言ったかな・・・君は」一番大切な事”を言っていない。

”それでは”君の気持ち”は、カルト君に伝わらないよ「

貴方は・・・！ 1階で試合放棄して、3人組を倒した爺さんじゃねエか。まだ居たのか。

いやア、それよりも”一番大切な事”とは？ え？ 自分で考えないと意味がない？

それもそうだなア。 ”一番大切”な”オレの気持ち”か・・・そうか！ 分かったぜエ！

カルトー！ カルトー！ 大好きだー！ ムニユムニユできるのは
オレだけだアー。
カルトー！ カルトー！ 大好きだー！ オレの最高の抱き枕アー。
カルトー！ カルトー！ 大好きだー！ 一緒にホテルへ行きたい
ぞオー。

・・・ふう。 あれ？ どオしたんだア、カルト君。 そんなに怖
い顔して、拳を握り締めて。

あ、待った。 痛い、痛いって、殴っちゃダメだってカルト君。
なんか癖になりそオ。

え？ 本名隠してたの？ それは知ら・・・いや、知ってたなア。
うん、マジごめん。

あア、だんだん意識が遠くなってきたア。 カルト君・・・オレ、
そろそろ飛ンじゃうかも。
もし生まれ変わったら、次はカルト君の弟に生まれてエなア。 ち
なみに名前はトルテで。
いいかア、カルト君。 強く生き・・・てるから、それは、もう、
いらねエか。 キハハ。

原作前 天空闘技場 2（後書き）

”あまり私を怒らせない方がいい”

元ネタ『FF11』エースシリーズ

”そんな時はア、笑えば良いのか？”

元ネタ『エヴァンゲリオン』碇シンジ

”だが断る”

元ネタ『ジヨジヨの奇妙な冒険Part4』岸辺露伴

”ちよつと噛んじまったのさア”

元ネタ『化物語』八九寺真宵

”そうか！ 分かったぞ！”

元ネタ『名探偵コナン』江戸川コナン

”カルトー！ カルトー！ 大好きだー！”

元ネタ『ニコニコ動画』恋のエイラーニヤ

原作前 天空闘技場 3 (前書き)

【あらすじ】

天空闘技場に放り込まれたアルカは、
ジャムおじさんと着ぐるミについて熱く話し合い、
弟のカルトによってタコ殴りにされました。

オレが兄弟に付ける敬称は”君”だ。イルミ君、ミルキ君、キルア君、カルト君とかな。

ただし、キルア君は”兄貴”ってエ呼ぶ事になった。長男のイルミ君を差し置いてなア。

まア、そんな事ア、イルミ君は気にしねエだろ。しないうぜ？・・・しないと良いなア。

逆に、オレに敬称は付かねエ。誰からもな。兄貴からはアルカって呼ばれている。

イルミ君はオレを、お前って呼ぶなア。キルア君はキルで、カルト君はカルトのままだ。

そして弟のカルト君は、オレをアルカって呼ぶ。名前で呼ばれるほど親しい仲って事だ。

「もう朝かア。おはよオ、カルト君」

ベッドが2つあるなア。ここはホテルの部屋か。窓の外が明る

いんだけど、今何時だ？

あー、朝の6時かア。オレは12時間くらい気絶・・・じゃなくて眠ってたみてエだな。

久しぶりに家の外へ出たし、試合で2回も戦ったし、きっと疲れていたんだろオな。

おかげで、オレとカルト君の部屋に、見知らぬ爺さんがいる幻まで見えて来やがる。

いや、幻じゃねエなア。なんで、オレとカルト君の部屋に見知らぬ爺さんが居るんだ？

つて言うか昨日、1階で試合放棄した爺さんじゃねエか。　　なんで、ここにいるんだ？

「ボクだけだと、ホテルに泊まれないから」

そオなのかア。　　まア、オレとカルト君は5歳だから、普通に考えれば泊まれねエよなア。

いや、待てよ。　　こっちの世界では、金さえ出せば泊まれる場所もあつたような……。

まア、いいか。　　せつかくカルト君が誘ってくれたんだ。　　余計な事は言わねエで置こう。

よく考えてみると、この部屋にベッドは2つしかねエ。　　なのに、泊まっているのは3人だ。

あの爺さんがベッドを使えば、もう一方のベッドをオレとカルト君が使う事になるだろオ。

公然とカルト君を抱き枕にできるってエことだ。　　そのチャンスを自分から潰す必要はねエ。

「アルカ君には自己紹介をしていなかったね。

君達と同じ天空闘技場の闘士で、ボドロと言う者だ。

カルト君との試合後、ホテルに泊まるための保護者代わりになる事を求められてね。

そこらのカプセルホテルに子供2人だけで泊める訳にはいかないと思ひ、「承諾した」

カプセルホテルねエ。　　あア、今の時代にネットカフェとか漫画喫

茶は無いんだつたか。

中世と近世くらい時代に差があれば、世界に有る物と無い物が分かり易いんだがなア。

でも、ネットを通して手続きを行えるポストとかあるよなア。謎
過ぎるぜエ。　　まア、いいか。

そオイヤア、どこかで見た覚えがあると思ったら、原作でキルアに
殺されたボドロクさんか。

5年後に行われるハンター試験の最終試験中に、背後から急襲され
たんだつたな。

たしか、イルミ君が念能力でキルア君を操っていたとか何とか、考
察されていたっけなア。

原作について、カルト君に話した覚えはねエ。　　だから、この事力
ルト君は知らねエよなア。

偶然かア？　　天空闘技場の1階でもボドロクさんは、偶然オレの対戦
相手になつたしなア。

そして偶然、カルト君と出会って同行し、カルト君を探していたオ
レと再会したつてか？

運が良過ぎるだろオ、どこの主人公だよ。　　このボドロク、まさか転
生者じゃねエだろオな。

何らかの情報源からゾルディック家の者だと知っていて、カルト君
に声を掛けたとか。

いや、考えすぎだなア。　　作為があるとすれば、試合を組んだ天空
闘技場の方だろオ。

あれエ？　　ちよつと待てよ。　　ボドロクが言うには、先に話し掛けた
のはカルト君の方だ。

カルト君はホテルに泊まるために、対戦相手を誘つたんだよなア。

誰でも良かったのか？

そんな訳ねエよなア。　　誰でも良い訳ねエ。　　なア、カルト君。

なんでボドロクを誘つたんだ？

「・・・子供と戦うのを嫌がっていたから」

あア、なるほどオ。 1階で行われたオレとボドロの試合を、カルト君は見ていたのかア。

つまり、オレの事が心配で、こっそり試合を見ていたんだなア。

気付かなくて悪イな。

よオし、それなら今度はオレが、カルト君の試合を見に行くぜエ。

あア、楽しみだなア。

そオいやア、カルト君。 偽名で登録しているんだっけなア。

なんて名前なんだ？

登録している名前が分からねエと、どれがカルト君の出る試合か分からねエンだけど。

え？ ヒミツ？ そオかア、恥ずかしいのかア。 じゃア、オレが頑張って探さねエとな。

「カルト君、アルカ君、朝食へ行こうか」

分かったぜエ。 カルト君は行けるかア？ 行けるみてエだな。

じゃア、食堂へ行くかア。

食堂はホテル1階か・・・せっかくだからエレベーターを使わず、オレは階段で行くぜエ！

え？ 騒がしい？ 迷惑になる？ それもそうだなア。 じゃア、エレベーターで行くか。

朝食は食べ放題かア。 ゾルディック家みてエに毒とか混じってねエよな。 当たり前か。

ゾルディック家じゃ毒が混じっているせいで、美味しく御飯が食べなかつたからなア。

よよし、まずはコーヒーを飲むか。　固形物を急に食べると、喉を通らねエかも知れねエ。

ゲフツ

あれ？　飲めねエ。　って言うか口に含んだ後、喉を通らねエ。

どオ言うことだ、オイ。

まさか、毎日ゾルディック家の毒料理を食べていたから、食道が傷付いて弱ってんのか？

それとも毒料理を食べ過ぎて、毒の入っている料理しか食えなくなつちまつてんのか？

「はい、これ」

おオ、いつもの毒入り栄養パックじゃねエか。　コレだよコレエ。

ありがとオ、カルト君。

え？　昨日オレが気絶・・・じゃなくて眠っている間に執事が持つて来た？　なるほどなア。

ゾルディック家から出ている間も、欠かさず毒を摂り続けろってエことか。　容赦ねエなア。

まア、たった今、普通の食事を出されても喉を通らねエってエことが分かったンだけだよ。

兄貴やカルト君は普通に食ってるのに・・・やっぱり、体のスペックが違うンだろオな。

おかしいなア。　カルト君とは双子なンだけどなア。　どオして、こんな差があるンだア？

この毒物に対する耐性ってエのは、毒物の症状が出なければ良いって物じゃねエ。

毒は、少量では無害とされる物質が体内に蓄積されて、一定量を超えると症状が出る。
重要なのは、少量では無害な物質を、無害なまま蓄積し、体外に排出するシステムだ。

それは発生した後、遺伝によって伝えられる物で、一つの個体に来る事じゃねエ。

いや、訳分かんねエ理由で、毒物を排出できるよう変異した個体になら出来るだろオ。

だが、その仕組みはDNAの一部が偶然壊れただけで、遺伝しねエから意味がねエ。

ゾルディック家の持つ様々な毒物に対する耐性は、オレの祖先によって発生した物だ。

きつと、限界まで毒物を摂取して子供を産む、つてエ行為を繰り返していたんだろオ。

そう考えると、世界のゴミ箱である流星街が、我が家の起源地である可能性もあるなア。

ンで、毒物耐性のスペック差が、なんでオレとカルト君の間にあるのかって話だったか。

双子ってエことは、2つの卵子または2つの精子から、オレとカルト君は生まれている。

つまり卵子と精子に問題があったのか。もしくはオレに変異が発生したのかも知れねエ。

「ごちそうさまでした」

あア、やっと食事が終わったのか。オレの食べ物、毒入り栄養パックしかねエからな。

待ってる間に余計なこと考えちまったぜ・・・もう何を考えてたのか忘れちまったけどなア。

たしか、カルト君の毒耐性は何でオレよりも高エのか何とかカルト君かわいよいよカルト君。

「アルカ君、今日も試合があるのだろうか？　その栄養パックで大丈夫なのかね？」

えエ、もちろんでさア。　いろんな意味で非売品の、ゾルディック家特製栄養パックだ。

砂漠や海中などの過酷な環境でも使えるように、成分が粒子に加工されているんだ。

一見、空気しか入っていないように見えるんだがア、中は栄養に満ちているんだぜエ。

でも、毒入りだからなア。　耐性の無いヒトが吸うと、すぐに中毒症状が現れちまう。

手足や唇の痺れ、呼吸困難、平衡感覚の乱れ、息苦しさ、眠気、耳鳴り、悪寒とかなア。

ってカルト君が言ってた。　本当かって？　カルト君が言ってたんだから間違いないエ。

そオ言えば、ホテルの宿泊代は何ジェニーなんだ？　ツインルーム朝食付きで2万くらい？

じゃア、オレとカルト君は子供だし、2人合わせて1万ジェニーを払えば良いよなア？

え？　良いの？　2人よりも階層が上で、オレ金持ってるんだけど。　構わない？　そうかア。

さアて、出発の準備も終わったし、そろそろカルト君達と一緒に天

空闘技場へ行くか。

そ言えば、ホテルの部屋には無かったんだけど、ボン太くんの着ぐるミは何所だア？

え？ カルト君が捨てちゃった？ ガーン。　まア、両手の部分は破れていたしなア。

まア、ジャムおじさんが昨日、新しい着ぐるミを持って来るって言うたから構わねエか。

新しい着ぐるミが間に合わなくても、せいぜい2勝して2階上がるだけだからなア。

よオし、じゃア何時までも落ち込んでねエで、さっさと行こうぜエ。
カルト君、気にすんなよ。

と言う訳で空闘技場2日目だ。　カルト君とは所属階層が違うから、また別行動だなア。

さアて、ジャムおじさんが闘士の控室前で待っているはずなんだが・・・おオ、居た居た。

あア？　なんか着ぐるミが小さくねエか？　いや、この大きさなら丁度いいんだけどよ。

「君のために一晩で作り上げたよ」

マジかよ。　子供用とは言え、半日ほどで着ぐるミを作り上げるなんて人間業じゃねエな。

いや、一人で作ったとは限らねエし、作り置きかも知れねエ。　まア、どうでも良いか。

単にジェバンのセリフを、ジャムおじさんが言いたかっただけかも知れねエしなア。

じゃア、一着30万ジェニーの着ぐるミも着たし、今日も試合に勝

つて稼がねエとな。

あれエ？ ちよつと待てよ。 着グルミは小さくなったけど、30万ジェニーのままなのか？

もちろん？ マジかア。 せめて20万に下がらねエの？ そうかア。 ダメかア。 めるぽ。

「ガッ」

天空闘技場3回目の試合は、結果だけ言うと勝った。 だがア、5歳だけで楽勝だったな。

着グルミのサイズが昨日よりもマシになった事で、体を動かし易くなったからだろオ。

この調子じゃア100階越えねエと、固有能力に頼らない戦闘方法は身に付かねエな。

なんて調子に乗ってたら、相手の攻撃を避け切れなくて、4回目の試合で負けちまった。

負けたから今日のファイトマネーは5万ジェニーで、階層は変わらず51階のままだ。

攻撃には足を使ったから、着グルミの損傷は脚部の底が破れた程度で済んでいる。

これで今日の試合も終わったし、偽名で登録しているカルト君を探しに行こうかなア。

あア、ジャムおじさん。 予備の着グルミを後2つほど用意してくんねエか？ 後払いで。

ン？ ジャムおじさん。 その手の平サイズで、液晶画面の付いている機械は何だア？

「私の名で登録したポケットベルだよ。 連絡手段があれば便利だ

からね。

「遠慮なく受け取りたまえ」

おお、これが携帯電話の前に流行ったポケットベルか。現物を見るのは初めてだなア。

たしか、数字しか送れねエンだよな。え？ 違う？ 文字も遅れんのか。そオなのかア。

あー、使いながら使い方を覚えんのは面倒臭エな。ちょっと説明書を見せてくんねエか？

ふむふむ、オレが持つてんのは受信専用なんだな。送信側からの一方通行ってエ事か。

受信できるのは、この世界の公用語っぽい、いわゆるハンター文字で10文字までか。

だがア、送信文字数の限界が10文字とか少な過ぎねエか？ いや、こんな物なのかなア。

さアて、ジャムおじさんとは別れたし、今度こそ、どこかに居るカルト君を探しに行くぜエ。

昨日、カルト君は40階クラスにいたなア。1階から送られるのは10階単位だっけエ？

カルト君が昨日と今日で合わせて4回戦った場合、36階以上44階以下にいるはずだア。

さらに、双子ってエ事に関係してんのか分からねエが、オレにはカルト君リーダーがある。

機械式じゃなくて感覚式だから正確な位置は分からねエが、居る方向は分かるンだぜエ。

イメージとしては糸だな。オレが生まれた時から、カルト君と運命の糸で繋がってんだ。

さアで、とりあえずエレベーターに乗って上往下往して、カルト君のいる階層を探るか。
丁度良く、カルト君の試合中だったら良いんだけどなア。もう終わっているかもなア。
ポケットベルをカルト君にプレゼントするか？ いや、無視される様が目に見えるぜエ。

ン？ 今、自動反射で何か弾いたな。後ろから、誰かに首を少し切られたみてエだ。
いけねエな。兄貴だったら華麗に避けつつ、相手の足を引っ掛けられている所なんだがア。
直感力つてエのが足りねエンだろオな。でもオレに、そんなエスパースキルねエから。

「うおっ、いてえ、なんだコレ」

誰かと思えば昨日、カルト君を探している時に会った、物乞いの御兄さんじゃねエか。
あー、後ろからオレをナイフで刺そうとしたんだなア。そこで自動反射が発動したと。
少し切られたけど、途中でナイフは曲がってんな。危ねエ。何気に死ぬ所だったぜ。

あ、こら、逃げんじゃねエ。大丈夫だ。安心しろ。殴ったり蹴ったりはしねエから。
オレはジャムおじさんに90万ジェニーの未払金があるから、金は恵んでやれねエ。
その代わり、オレの食料を恵んでやる。栄養パックだ。さア、遠慮せず飲んで良いぜエ。

おオ、物乞いの人の手足がケイレンしてきた。 毒に耐性が無いと、
こうなのか。

ゾルディック家じゃないヒトに飲ませた事が無いから、こうなると
は知らなかったぜエ。

でも、即死状態にならねエし、強い毒じゃねエンだな。 これじゃ
ア武器としては使えねエ。

おい、生きてるか？ 生きてるよな。 じゃア、いいや。 片付け
る手間が省けた。

こんな所で寝てねエで、ちゃんと家に帰るんだぜエ。 え？ なに
？ クソ野郎？ ヘエ。

そオ言えばさア、今なら出来る気がするんだ。 兄貴がやってた、
心臓を盗むってやつ。

よオし、あつちで話をしようぜエ。 え？ いや？ 遠慮すんなよ。
すぐに済むからさア。

あんまり暴れんなよ・・・ほら、オレに触れたから骨が折れちまっ
た。 仕方ねエなア。

うるせエから喉も潰すか。 ブチツと。 あ、ミスった。 悪イ、
神経潰しちゃった。 キハハ。

原作前 天空闘技場 3 (後書き)

”そオなのかア”

元ネタ『東方Project』ルミア

”せっかくだからエレベーターを使わず、オレは階段で行くぜエ!”

元ネタ『デスクリムゾン』越前康介

”どオ言うことだ、オイ。”

元ネタ『魔法少女まどか マギカ』佐倉杏子

”カルト君かわいいよカルト君”

元ネタ『能登麻美子』中毒症状

”一晩で作り上げたよ”

元ネタ『デスノート』ジエバンニ

”ぬるぽ”

元ネタ『2ちゃんねる』ぬるぽ

初めてメッセージボックスにメッセージが届いた。

まさか、2話前に貼った擬装アフェリエイト広告に対する警告か！
と思つて開いたら運営からではなく、他ユーザーからの感想で、

あ……ありのまま今起こつた事を話すぜ!

『オレは物語を読み始めたと思つたら、いつのまにか終わっていた』
な……なにを言つているのか分からねーと思うが、

オレも何が起こつたのか理解が追いつかなかつた。

混乱して頭がどうにかなりそうだった……。

超展開だとか打ち切りだとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。

もつと訳が分からないものの片鱗を味わつたぜ……。

- - - - -

(要約)てなことが書かれていた。

ちなみにメッセージの件名は”＼(^o^)/”オワタだった。

これは1作目のキメラアントENDのことなのか。

それとも2作目の幻影旅団ENDのことなのか。

まさか3作目のホムンクルスENDのことなのか。

もしか4作目の強制排除ENDのことなのか。

心当たりが多過ぎて困るんだぜー。

と思ったけど、きつと説明不足が原因なのだろう。

でも、この再構成版は説明セリフを増やしつつ進めているので・・・

大丈夫なんじゃないかな・・・(タブン

原作前 天空闘技場 4 (前書き)

【あらすじ】

天空闘技場に放り込まれたアルカは、カルトやボドロ爺さんと共にホテルへ泊まり、ジャムおじさんからポケベルを貰いました。

原作前 天空闘技場 4

”ボン太くん”ってエのは、”フルメタル・パニック！”に登場する人体着用又イグルミだ。

丸い耳を持ち、キリツとした眉毛で、半球型の帽子を被り、赤い蝶ネクタイを着けている。

原作知識を持つているオレと同じ無限転生者なら、一目でボン太くと分かるだろオ。

そう、一目で分かる。その目立つ着グルミを着て、オレは天空闘技場の試合に出た。

着グルミを着た小さな5歳の子供だア。その珍しさに一目見ようってエ観客が集まる。

しかも着グルミの損傷を抑えるために、オレは回避しまくって一発KOを繰り返していた。

「ハハハハハハ、ハヒフヘホー！」

”アンパンマン”に登場するバイキンマンの着グルミを着た闘士が、オレの前に現れた。

この世界にバイキンマンは存在しねエ。正確に言うと、この世界じゃヒットしていねエ。

原作の”アンパンマン”をパクって出版しても、この世界で売れるとは限らねエからなア。

八行で笑うコイツが無限転生者か。もしくは着グルミを作った奴が無転生者だろオ。

天空闘技場でボン太くんが戦っているってエ噂を聞いて、来たのかも知れねエな。

いや、こんな着グルミを作る奴なんて少ねエだろオし、ジャムおじさんの知り合いかア？

それにしても、着グルミなんて重石を着て戦おうとするバカが、他にもいるとはなア。

それも普通のバカじゃねエ。オレ達が居るのは、天空闘技場100階クラスのリングだ。

ファイトマネーが100万ジェニーを超える、このクラスまで上がる奴等は、それなりに強エ。

「さあ皆様、お待たせいたしましたア！次は異色の組み合わせ！何と着グルミ同士の戦いです！しかし、あなどってはいけません！

2人共、この100階クラスへやってきた強者です！」

「それでは2人の戦いっぷりを、VTRで御覧いただきましょう。

アル力選手は時間ギリギリまで手出しせず、相手の攻撃を避け続け、最後は瞬殺！

着グルミの足による一撃で、相手をリングの外へ弾き飛ばしました。

対するバイキンマン選手は20勝0敗！

試合開始と同時にパンチ一発で相手をリングの外へ弾き出しました！」

「投票の結果、倍率ではバイキンマン選手が優勢！

バイキンマン選手の一度も負けた事が無いというデータが有利に働いたのでしょうか？」

バイキンマンの戦闘記録を見て分かる通り、試合開始の直後に攻撃される確率は高エ。

その事は今までの対戦相手も分かっていたんだが、初撃を避け切れなくて負けてんだ。
ぶっちゃけオレも回避できる気がしねエ。　　ありゃア、着グルミを着たヒトの動きじゃねエよ。

っていうかバイキンマンがパンチ一発？　アンパンマンの方が似合っ
ってんじゃないか？
なんでバイキンマンの着グルミなんだ？　オレがアンパンマンっぽい
立ち位置だから？
でも、オレの着グルミはボン太くんだからなア。　それに正義の味
方は似合わねエ。

「それでは3分3ラウンド。　P&KO制、始め！」

あア、やべエ。　バイキンマンの着グルミを、内側から溢れたオー
ラが覆って行きやがる。
オーラを練ったのか？　いや、違うなア。　　ありゃア、着グルミに
オーラを纏わせたんだ。
オーラを纏う”纏”とオーラを練る”練”の応用技で、たしか”周
”って名前だっけなア。

着グルミにオーラかア。　そオいや、”自動反射”はオーラに触れ
ると発動するんだっけな。
武器にオーラを纏わせても発動すんのか？　オーラを地面に置いて、
罾は作れんのか？
それが出来たら小技が作れるなア。　　まア、まだオレの熟練度が低
いから出来ねエけど。

相手は念能力者だ。　しかも、今のオーラの動きからすると、かな
り熟練してやがる。

おい、こんな奴、さつさと念能力者のいる200階に送り込めよオ。
なんの嫌がらせだア？

もしかして、オレが念能力者だから、相手も本気を出しても良いっ
て思っちゃったのか？

ちなみに、この間わずか一秒だ。 走馬灯かよ。 まさか、また死
ぬんじゃないエだろオナア。

相手が近付いて来るぜエ。 だがア、オレは何も出来ねエ。 意識
に体が付いて行かねエ。

相手のオーラ量からすると、”自動反射”は余裕で突破されそうだ
なア。 役に立たねエ。

・・・あア、ここは何所だア？ リングの上じゃねエな。 医務室・
・・・いや、ホテルの部屋か。

よオ、カルト君。 バイキンマンとの試合は、どうなったんだ？
あア、やっぱり負けたのか。

何時間くらいオレは寝てたんだ？ え？ 15時間？ そうかア。
もう翌朝なのかア。

手も足も出ねエとは、この事だなア。 危うく死ぬ所だったぜエ。

え？ 一回死んだ？
そんなにヤバイ状態だったのか。 悪いな、カルト君。 ずっとオ
レを看ててくれたんだろオ。

お礼に・・・お礼に・・・あア、やべエ。 オレが念能力に目覚め
た時の件、忘れてた。

たしか、念能力に目覚めた事をカルト君に自慢したら、冷たい目を
返されたんだよなア。

だがア幸い、天空闘技場で溜めた金が・・・ほとんど宿代やビデオ代で消えてンなア。

100階クラスのファイトマネーである100万ジエニーは、試合で負けたから手に入らねエ。

おまけに、100階クラスの個室も使えねエから、次に試合で勝つまではホテル暮らした。

あア、やベエ。2、3日は金欠状態が続いて、カルト君にプレゼントなんて出来ねエぞ。

いや、もう開き直るか。あれから数ヶ月過ぎてンだ。今から1月ズレても同じだろオ。

でも、なんでオレは”忘れた”ンだア？

とりあえず、まずは今日の試合だ。負けて一階下がったから、9階での試合だろオ。

怪我をしない限り、一日に2回は試合を組まれるから、今日勝てれば100階に上がる。

よオし、じゃアカルト君。対戦相手を調べるために、オレは先に天空闘技場へ行くぜエ。

と言うわけで天空闘技場だ。いつもより早く来たからヒトが少なエ。歩き易いなア。

これなら闘士用のエレベーターじゃなくて、一般用のエレベーターでも空いてンだろオ。

闘士用の方は、たまに待ち伏せされているからなア。ファンらしいカメラを持った人とか。

「おっ、昨日の子じゃん」

ン？ 誰だア？ 知らねエ顔だなア。 闘士か、観客か。 昨日つてエのは、どっちだ？

闘士？ じゃア、昨日戦った奴か。 あア、バッグにバイキンマンの着グルミが入ってンな。

でも、控室で会った事もねエのに、ボン太くんの中身がオレだって、よく分かったなア。

調べた？ ……ヘエ。 まあ、対戦相手の事を調べるのは、普通だったら普通だよなア。

だがア、あんなに強エなら、下調べする必要はねエだろオ。 オレも一瞬で倒されたしなア。

200階へ行つても十分に戦える強さだ。 あんたと同じ念能力者だから警戒してたのか？

「当たり前じゃん。 どんな能力か分からないんだから、先手必勝つてね」

…こいつオーラを纏つてねエ。 オーラを絶っている、いわゆる”絶”つてエ状態か？

もしくは”絶”を応用した高等技術である”隠”で、常にオーラを隠しているのかも知れねエ。

一瞬で着グルミにオーラを纏わせるような奴だからなア。 できても不思議じゃねエ。

やべエな。 隠されたオーラを見破るには、一定以上のオーラを目に集める必要がある。

いわゆる”凝”つてエ状態だがア、その状態にオレが成るまでに10秒ほど掛かっちゃう。

今、こいつがオレに何か仕掛けても、オーラを隠されているから見破ることはできねエ。

いやア、待てよ。相手が触れば、オレの意思とは関係なく”自動反射”が発動する。だから隠されていても分かるはずだ。だがア、相手のオーラが持つ効果は弾けるのか？前世の一方通行時代なら、超能力による空間移動だろオと何だろオと弾き返せたんだが。

そオいえば、オレがオーラを絶つと”自動反射”は、どオなるんだ？ 試した事ねエなア。オーラの噴き出る精孔を閉じ続ける、いわゆる”絶”ってエ状態は、まだ難しいンだよな。もしかすると、”自動反射”を抑えられるかも知れねエ。今日から優先して練習するか。

ところで、その・・・いや、”バイキンマンの着グルミ”ってオレが言うのはマズいなア。この世界でもバイキンマンって名前なのか確かめてねエ。名前が違うかも知れねエ。この世界で生まれた物語じゃなくて、他の転生者がパクって広めた物かも知れねエ。

「あ、これ？ 最近、天空闘技場に着グルミの子供闘士がいるって話を聞いてさ。 ついでに、オーラを隠せるかもって思って着てみたんだ。 どうだった？」

何の事だ？ あア、その着グルミでオーラの気配を遮断できてたのか否かって事か。

そりゃア無理だろオ。 オレの着グルミと違って、あんだのは胴体

部分が薄いからなア。

その薄さじゃア、体表の数ミリから数センチ上まで纏われているオ
ーラは隠し通せねエよ。

「あちゃー、そつか。厚さが足りないのか。でも、薄いタイプ
しか売ってないんだよね。」

そっちの着グルミは何所で買ったの？　もしかして手作り？」

このボン太くん着グルミの出所ねエ。嫌なことを聞くなア。意
図して聞いてンのかア？

ボン太くんは別世界のアニメに登場するマスコットをパクって作ら
れているからなア。

どこで買ったのかを話すってエことは、着グルミを作った奴の情報
を与えることになる。

ジャムおじさんへの連絡手段が、あっちから一方通行のポケベルし
かねエのは面倒だな。

まア、いいか。こいつと仲良くしたいわけじゃねエんだから、答
える必要はねエだろオ。

と言う訳で、どこで買ったのかは秘密だ、答えられねエ。オレは
忙しいから、もう行くぜエ。

「ちえー」

しかし、あいつの持っているバイキンマンの着グルミは、何所で手
に入れたんだろオな。

この世界じゃ有名なのかア？　あア、インターネットに繋がらねエ
のは不便だなア。

ホテルの部屋にテレビはあるんだけど有料だからなア。長時間見
るのは気が進まねエ。

さアて、今日の対戦相手について調べるか。金を払って、過去の試合記録を見るンだ。

試合の行われている階が高いほど、値段も高くなるからナア。フ
イトマネーが消える。

だがア、この作業を欠くことは出来ねエ。負けたらフイトマネーは入らねエンだからナ。

100階だ。100階クラスに上がれば、フイトマネーとして100万ジェニーが手に入る。

個室も手に入るから、ホテル代を払う必要が無くなる。一気に生活環境が変わるンだ。

原作知識によると、その待遇の差から、手段を問わずに勝ち残るオとする奴もいるらしい。

ちなみにカルト君のいる階層は未だに分からねエ。隠ぺい技術が高過ぎるぜエ。

オレが上がつちまった分、距離が離れて、カルト君が姿を隠す余裕が増えたからナア。

それにカルト君を追い回して嫌われると困るしナア。最近は下層へ探しに行つてねエ。

そオいや、なんか受付にいたヒトの様子が変だったナア。オレを見て驚いてたンだがア。

いつもより手続きに時間が掛かったし、どこかに確認を取ってたみてエだ。怪しいナア。

まさか・・・オレの命を狙う組織の構成員か！なるほどナア。
エル・プサイ・コングルウ。

よオし、試合の時間だ。いつものようにボン太くんの着グルミに、

控室で着替えるぜエ。

相手は何とか彼とかつてエ拳法の使い手だ。 100階まで後一歩で届かねエ強さだな。

過去に行われた試合の映像を見た限りでは、念能力を使わなくても何とか成るだろオ。

そして試合が始まるんだがア、今日は観客席が盛り上がってんなア。なんかあったのオ？

ン？ 今、観客席から死ナントカって聞こえた気がするなア。 昨日、オレに賭けた奴か？

賭けに負けたからって、逆恨みはダメだよなア。 よし、リングの石版を投げてやるオ。

という訳で勝った。 そんなに怪我は負ってねエから、また試合が組まれるだろオ。

でも、また着グルミがボロボロになっちまったから、ジャムおじさんに直して貰わねエと。

100階近くになってから着グルミの損傷率が高エ。 未払い金がドンドン増えて行くぜエ。

・・・あれエ？ いつもなら控室前にいるんだが、今日はジャムおじさんが見当たらねエ。

珍しいなア。 なんか遭ったのか？ 困ったなア。 着グルミの替えは持ってねエンだよな。

昨日と今日で2着を潰しちまったからなア。 今のオレは使える着グルミを持っていねエ。

ン？ ポケベルが鳴ってんな。 この一方通行の機器で繋がる相手は一人しかいねエ。

いつものジャムおじさんの呼び出しかア。 そオいや、昨日と今日

は会ってねエな。

今までは試合が終わると、ジャムおじさんが控室の外で待ち伏せしてたんだがア。

えーと、メッセージは”819109150”。　　なんだコレエ？

あア、これが語呂合わせか。

なんか、途中までは思い付いたけど、後は思い付かなかった感じの組み合わせだなア。

でも、なんでジャムおじさんが、バイキンマンの危険性についてオレに伝えるんだ？

わざわざ語呂合わせにしたのは、他の転生者に読み取られる可能性を減らすためか。

まア、知っている奴なら瞬時に解読できるだろオが、素のまま何もしねエよりはマシだろオ。

ってエことは、さっき会ったバイキンマンの着グルミを持っているアイツは転生者なのかア？

昨日、ジャムおじさんに会えなかったのは、試合後に朝までオレが気絶していたからだ。

だが今日ジャムおじさんに会ってねエのは、バイキンマンから身を隠しているからだろオ。

でも、オカシイなア。　　99階の時点で、オレとバイキンマンは同じ階にいたはずなんだが。

なんで今なんだア？　　99階までは、運良くバイキンマンと出会わなかったってエのか？

いや、出会った事が問題なんじゃなくて、そもそも出会ってすらいねエのかも知れねエ。

何か起こったとすれば昨日だ。　　朝起きてから、オレがバイキンマ

ンに負けるまでの・・・

・・・ああ、ここは何所だア？ ポケベルから目を離すと、景色が変わってたんだがア。

瞬間移動っばいな。放出系の念能力か？ このポケベルに何か仕掛けてあったのか？

メッセージが語呂合わせだったのは、罠に掛ける隙を作るためだったとか・・・まさかなア。

さアて、ここは・・・あれエ？ カルト君？ なんで、ここに居るんだ？ まさか敵の狙いは。

いや待てよ。分かった。ここはカルト君やポドロ爺さんと泊まっているホテルの部屋だ。

ンでもって、部屋の入口前で倒れているポドロ爺さんの前にいのは・・・バイキンマンだ。

原作前 天空闘技場 4 (後書き)

” 八八八八八八、ハヒフヘホー!”

元ネタ『アンパンマン』バイキンマン

” アルカVSバイキンマンの解説”

元ネタ『ハンター×ハンター』キルアVSズシの解説

” この間わずか一秒だ”

元ネタ『宇宙刑事ギャバン』ナレーション

” エル・プサイ・コングルウ”

元ネタ『シユタインズ・ゲート』鳳凰院凶真

原作前 天空闘技場 5 (前書き)

【あらすじ】

天空闘技場に放り込まれたアルカは、
ジャムおじさんからメッセーヂを受け取り、
カルトの側へ転移して、バイキンマンと遭遇しました。

双子の弟であるカルト君と比べると、オレの素質は低エ。喧嘩すれば確実に負ける。

兄のキルア君と比べると、同じ血が流れているとは思えねエほど、才能の差がある。

転生者は子供の頃から鍛えるから強エンだが、ゾルディック家じゃ珍しくねエからなア。

原作知識によると兄貴は、念に目覚めて半年以内に、基本である四五行を形にした。

それに対してオレは、半年過ぎた今でも、オーラを纏って練習することしかマトモに出来ねエ。

まア、自動反射でオーラを使い果たさないために、”纏”と”練”の習得を優先したんだが。

(カルトヲ護ル。 ナントシテモ・・・！)

オレが転移した場所は、カルト君やポドロ爺さんと一緒に泊まっていたホテルの4階だ。

オレから5歩進んだ左斜め前に並んでいる、2つのベッドの間にカルト君は立っている。

オレから20歩進んだ正面にある部屋の出入口には、バイキンマンとポドロ爺さんがいた。

6歳になった子供の足で20歩だ。バイキンマンなら8歩で、オレ達に近付けるだろオ。

それも歩いた場合だ。バイキンマンが走ったら、オレ達との距離は無いも同然になる。

バイキンマンが歩いてくれると良いんだがなア。　このまま帰ってくれると、もつと良い。

だがア、バイキンマンは1歩踏み出した。

やっぱりダメかア。　バイキンマンの着グルミを着た謎の人物が、こっちに向かって来る。

その着グルミにオーラが纏われているんだがア、着グルミの中身は昨日の対戦相手か？

着グルミで顔が見えねエから分からねエなア。　分かるのは、相手が強エって事だけだ。

相手はカルト君を見てやがる。　なんでオレじゃねエンだ？　カルト君は念能力を使えねエ。

狙うとしたら念能力者であるオレだと思うがア・・・やっぱり昨日の対戦相手かも知れねエ。

負けたオレを侮ってンのか？　実力の分からねエカルト君の方を危険に思ってるのか？

いや、カルト君が狙われればオレは妨害する。　それで、オレの行動は限定されるんだ。

昨日、オレとしては初めて会ったバイキンマンに、カルト君の事を話した覚えはねエ。

直感に従っただけなのか、オレの動きから見抜いたのか、事前に調べたからなのか？

まア、いいや。　敵の正体については生き残ってから考えよオ。

まずは、戦うか？

いや、無理だろオ。　体に纏うオーラの総量や、念を操る技術の熟練度が違い過ぎる。

敵の攻撃に一回当たっただけで、”自動反射”によってオーラを使
い果たすかも知れねエ。

詳しく言うと、オレの総オーラ量よりも、敵の顕在オーラ量が多く
て防ぎ切れねエ。

分かりやすく言うと、敵の拳とオレの拳が打ち合つと、オレの体ご
と砕けるってエことだ。

普通は目視じゃオーラの差なんて分からねエもんだが、今回は見て
分かるほど差がある。

というわけで戦わねエ。バイキンマンの攻撃は避けるしかねエだ
ろオ。当たつたら死ぬ。

オレだけなら兎も角、カルト君がいるんだ。まずは、この部屋か
ら逃げることを考えよオ。

出入口は敵の後ろにある。だがア、オレの後ろには光が差し込む
窓ガラスがある。

と言うか、他に脱出する場所がねエ。部屋の壁や床を壊すのは時
間が掛かり過ぎる。

こちらに向かつて来るバイキンマンを避けて、その奥にある出入口
へ行くのは無理だ。

もし運良くバイキンマンを抜けたとしても、出入口である扉を壊す
間に捕まっちゃう。

まずは、オレの5歩左斜め前にいるカルト君の確保だ。置いて逃
げるわけにはいかねエ。

今日の朝だって、バイキンマンとの試合で倒れたオレを看病してく
れていたんだからなア。

起きた時、カルト君が側にいたんだから間違いねエ。オレを心配
してたんだろオなア。

いつもはオレに対して冷てエ態度のカルト君だが、無表情に見えても本当は優しいんだ。

弟君は神経質な所があるからなア。けっこうテキトーなオレの事が苦手なンだろオ。

だがア、相性が悪いってエだけで仲が悪いわけじゃねエ。カルト君は良い子だからなア。

んなこと考えている間に、バイキンマンは2歩踏み出した。

あア、家族関係について考えている時間はねエな。早く、弟君を確保しなくちゃならねエ。

だがア、普通に走るだけじゃバイキンマンに接近されて、カルト君と一緒に殺されちまう。

だから、オレの固有能力”一方通行”のメインである”ベクトルを操作する能力”の出番だ。

前世と違ってベクトル量を増やすことは出来ねエし、ベクトルを操る度にオーラを消費する。

ベクトル量を増やせねエのは、オーラで物を形作る具現化系の範囲に入るからだろオなア。

まア、ベクトル量が足りねエのなら、毎日鍛えたオレの腕力や脚力を加えればいい。

オーラを消費する代わりに、大気による抵抗を無くし、弟君に向かって体を吹っ飛ばす。

この大気による抵抗を無くしたってエのは、体に掛かる気圧を弾き返したってエことだ。

けっこうヤバい圧力差が出来ちまうが、そオいうのは自動反射が防いでくれるだろオ。

弟君に向かって体を吹っ飛ばすってエのは、オレの体に掛かる重力を操作するからだ。

だがア、この重力ってエのは引力と遠心力の合力で、下手に扱おうとトンでもねエことになる。

例えば、急に体が動かし難くなったり、体が浮かび易くなって走り難くなったりするなア。

んなことが戦闘中に起こったら隙を生む。　バイキンマンの前じゃ、死に至るほどのミスだ。

んな事故を防ぐためにも、体表で消費するオーラの分量を量り違えるわけにはいかねエ。

間接的な干渉とは言え、相手は馬鹿でかいスカラーを持つ地球なんだからなア。

だからオレは体勢を変えず、棒立ちのままカルト君に向かって体を吹っ飛ばした。

バイキンマンには、オレが見えないトラックと衝突して弾き飛ばされたように見えただろオ。

もしくはムーンウォークのように、不自然な移動を行ったように見えただかも知れねエ。

だがア、予備動作が無いまま体を強制的に動かすコレが、一番良い移動の方法だ。

普通に走ったら、オレが体勢を整えている間に、バイキンマンがカルト君を捕まえちまう。

相手の意表を突くためにも、バイキンマンより速く移動するためにも、必要なことだった。

いやア、ボン太くんの着グルミを着ていなくて本当に良かったぜエ。

着てたら死んでた。

あの着グルミは”自動反射”を封じるために着てるんだが、ベクトル操作も封じるからなア。

ジャムおじさんから新しい着グルミを今日も貰っていたら、バイクンマンに負けてたぜエ。

そんな訳で、固有能力を発動した瞬間に横へ吹っ飛び、オレはベッドに衝突した。

まア、当たり前だな。目標のカルト君は、2つ並んだベッドの間に立っているんだから。

だがア、オレが止まる事はねエ。この程度の障害は”自動反射”が勝手に弾いでくれる。

兄貴の手首を折ったり、勝手にオーラを消費した罪は、この働きに免じて許してやるオ。

200階直行の死亡フラグを避けるために、高い着グルミを買ったりもしたが許してやるオ、

あと、カルト君に触れても”自動反射”が反応しなかったのは、よくやったと言っしかねエ。

ところでベッドに当たった衝撃を弾いたのは良いのだがア、ベッドまで弾いちまった。

気圧と重力を操作して体を吹っ飛ばしていたから、1秒間に8メートルを進むくらいかなア。

その速さでベッドへ当たった上に、”自動反射”で衝突した衝撃がベッドに返された。

その結果、2つのベッドの間に立っていたカルト君を、オレが吹っ飛ばしたベッドが襲う。

いやア、吹っ飛ばそうと思って、ベッドを吹っ飛ばしたわけじゃね

エ。これは事故だ。
ベッドは普通に重力の影響を受けていたんだがア、車に跳ねられたみてエに宙を飛んだ。

「ひゃあ！」

おオ、レアなカルト君の悲鳴だア。こりゃヤベエ。一度聞いただけで癖になりそうだア。
ン？アレ？こつちを見てカルト君が睨んでいるなア。いや、わざとじゃねエンだって。
こオいう時はアイコンタクトだ。オレとカルト君の仲なら・・・
あア、分かってくれねエか。

それにしても、瞬時にジャンプしてベッドを踏み台にするなんて凄エなア、カルト君。
つて言うか、オレが事故つてベッドに衝突する前から、ジャンプする準備をしていたよなア。
直感力やベエ。それとも幸運度が高エのか？思わず、主人公補正を疑いたくなるぜエ。

さアて、困ったなア。ベッドを弾いたオレの体は、その勢いで横になっっているんだ。
正確に言うつと、ベッドに脚が引つ掛かったから、自然と頭部が前になっちまったんだがア。
そして1秒間に8メートルを進むオレは、その勢いで当たって弾いたベッドよりも速かった。

当然だなア。その結果が、カルト君と擦れ違ったオレの図だ。
どオしてこオなった。

とりあえずカルト君を確保しなくちゃならねエンだがア、向きを変

える手順が面倒だ。

オレの速度は殺すかア。　　ソンでもって、体に掛かる重力を操作して、再加速するンだ。

バイキンマンは4歩踏み出した。

目の隅に映ったバイキンマンは4歩進み、あと3歩くらいでオレ達に、その手が届く。

困ったなア。　カルト君を抱えて脱出の事まで考えると、間に合わねエかも知れねエ。

まア、急ぐしかねエ。　向きを変えてカルト君を確保したら、そのまま窓を壊して逃げるかア。

ところで、向きを変えるってエのは体の向きじゃねエ。　体に掛かるベクトルの向きだ。

だから、前に向かって突進していたオレは、後ろに背を向けたまま、後方へ吹っ飛んだ。

反動で内臓は破裂しねエのかって？　　あア、”自動反射”が勝手に何とかしてくれた。

体に掛かるベクトルの向きを変えた時、オレは2つのベクトルの影響を体に受ける。

1つ目は、体に掛かる重力の向きを前方へ変えて、弟君へ向かって進んだ時の速度だ。

2つ目は、体に掛かる重力の向きを後方へ変えたことで、体を後ろへ引っ張る重力だ。

この2つのベクトルの引っ張り合いを受けた肉体が、どオなるのかは予想できるだろオ。

1秒間に8メートル進むくらいの力に体が耐え切れず、文字通り空

中分解する所だった。

”自動反射”が無ければ即死だった。　今頃、猟奇殺人の事件現場
になっていただろオ。

あア、自分でやったんだから事故か。

オレの意思で体内のベクトルを操作して、向きを変えて反動を無効
にすることも出来る。

だがア、そのためには体内への適切なオーラの配分と、必要量の計
算が必要だ。

計算を誤れば、自爆スイッチを押す事になっていただろオ。　見直
したぜエ、”自動反射”。

だがア、向きを変えたり、反動を無効にしたせいで、オーラは残り
半分になってやがる。

ベクトルを操作し始めて、そろそろ2秒か。　もう4500文字く
らい考えてンじゃねエか？

次こそカルト君を捕まえなけりゃア、大事な弟君が悪イバイキンマ
ンに盗られちまう。

だからカルト君を捕まえるために、オレは後方へ加速しつつ、左手
を横へ伸ばした。

とは言つても、5歳の短い腕と小さな手だ。　これじゃ、カルト君
に届かねエかも知れねエ。

だがア、さつきベッドを踏み台にした弟君と擦れ違つたから、まだ
近くにいるはずなんだ。

そんな事を考えている間にオレの加速は進み、再びカルト君が視界
の端に映った。

ついでに、宙を舞っていたベッドにオレの体が衝突したみてエだが、

気にする必要はねエ。

オレから離れた位置にいる弟君を、どうやって捕まえるのか考えなくちゃならねエからな。

さつきみてエに向きを変えるか？ いやア、今変えると2回向きを変える必要がある。

カルト君を捕まえるためのベクトル転換と、窓を破って逃げるためのベクトル転換だ。

弟君を捕まえた後の事を考えると、後2回も向きを変えるほどオーラは残ってねエ。

カルト君を捕まえた後、そのまま壁を壊して進むか？ いやア、それは後が続かねエ。

壁を壊して隣の部屋へ逃げたとしても、オーラ切れでバイキンマンに捕まっちゃう。

方向転換するとしても、しないで壁を壊すとしても、どちらにしてもオーラが足りねエなア。

オーラが無ければ体を使えば良いって？ 速度が落ちたら、バイキンマンに捕まるだろオ。

今もオレが無事なのは、ベクトル操作で1秒間に8メートル進む速度を出しているからだ。

その速さが無かったら、これまでの2秒は瞬く間に過ぎて、バイキンマンに倒されていた。

しかし、どうすっかなア。 方向転換するか、しないで壁を破るか。

あんまり時間はねエ。

脳の使い過ぎで気持ち悪くなってきたしなア。 いや、これは、さつき脳が揺れたせいか。

前世と違って神の電卓ならぬ我が身では、処理できる情報量にも限

界があるからなア。

2秒でコレだから、オーラを使い切った場合を除いた全力稼働の限界は5秒くらいか。

勝手に防いでくれる”自動反射”が無かったら、最初の方向転換で限界だったなア。

オーラを勝手に消費するから”使えねエ”とか思ってたんだがア、そんな事ア無かったぜ！

(アルカ、ボクを・・・)

あれエ？ 今、カルト君がオレの名を呼ぶ幻聴が聞こえた。 あア、脳が疲れてるんだなア。

そんな事より、どうすつかなア。 そろそろ、またカルト君の横を通り過ぎちまうぜエ。

仕方ねエ。 とりあえずカルト君を捕まえてから、バイキンマンから逃げる方法を考えよオ。

さアて、カルト君のいる方向へ、オレの体に掛かるベクトルの向きを変えて行くかア。

いや、待てよ。 カルト君がオレに向かって手を伸ばしている。 これは幻覚かア？

いや、幻覚じゃねエ。 間違いなく、カルト君がオレに向かって手を伸ばしている。

マジか。 自分の目が信じられねエ。 まさか、こんな日が来るなんて思わなかったぜエ。

一緒のベッドで寝ようとすると、布団に潜り込んだオレを蹴り飛ばすカルト君だぜ？

そんなトゲトゲシイカルト君が、自分からオレに必死で触れようと

するなんて初めてだ！

ああ、嬉しいなあ。例え、生き抜くために仕方なく、オレに手を伸ばしたとしてもなあ。

原作知識にあるキメラアートの王に身を捧げた護衛軍の気持ちが、分かる気がするぜエ。

そオ、これが愛だよ。こんな幸せな気持ちは初めてだア。もう何も、何も怖くねエ！

よし、カルト君の手は掴んだ。もう何があっても、この手は放さねエ。放しはしねエ。

もし放したら、オレの魂ごと放してしまう気がするからなあ。しっかり握り返してくれよオ。

さア、カルト君。このまま窓を突き破って外へ飛び出すぜエ。じゃアなあ、バイキンマン！

(ボクを・・・ゾルディック家へ連れて行って)

あい。

原作前 天空闘技場 5 (後書き)

” カルトヲ護ル。 ナントシテモ・・・!”

元ネタ『ハンター×ハンター』ネフェルピト―

” オーラが無ければ即死だった”

元ネタ『機動戦士ガンダム』シャア・アズナブル

” そォ、これが愛だよ”

元ネタ『らき すた』泉こなた

” こんな幸せな気持ちは初めてだア”

元ネタ『魔法少女まどか マギカ』巴マミ

” オレの魂ごと放してしまおう気がするからなア”

元ネタ『ICO』イコ

原作前 ソルディック家（前書き）

【あらすじ】

天空闘技場に放り込まれたアルカは、
バイキンマンの襲撃から逃れるために、
3秒くらい頑張りましたが、無駄な努力でした。

原作前 ソルディック家

バイキンマンに襲われ、弟君の手を握った後、なぜかオレは我が家の子供部屋にいた。

わけが分からねエ。 ソルディック家から遠く離れた天空闘技場近辺にいたはずなんだが。

執事か誰かに助けられて、ソルディック家に着くまで寝てたとか？
いや、寝すぎだろオ。

しかも、オレのために用意されたベッドの上で・・・なぜか隣で寝ているのはカルト君だ。

んなこと誰がやったんだア？ オレのベッドじゃなくて、カルト君のベッドに載せてやれよオ。

おかげでカルト君がオレに抱き付いてンじゃねエか。 起きたら大変な事になるぜエ。

（よオし、こつそり抜け出して・・・あれ？ 締め付けが強くて、カルト君から抜けねエ。

やべエ。 カルト君には、なぜかベクトル操作が効かねエからなア。 抜け出せねエぞ。

っていうかカルト君。 締め付ける力が強過ぎて、オレが折れそうなんだけど・・・）

・・・ああ、手遅れだった。 目を開けたカルト君の顔が、オレの顔の5センチ前にあるぜエ。

これはア、危険な距離だ。 下手に動くと、ギャルゲーの如き展開になるかも知れねエ。

具体的に言っと、オレの唇が事故って、目の前にある弟君の顔に当たるとかも知れねエ。

上から順に額と目、鼻と頬と唇、あと首もあるなア。どこに当たってもオレの命がヤベエ。いや、事故らなくても、オレとカルト君が体を密着させている時点で、すでにアウトだろオ。ベクトル操作が通じない上に、締め付けられている。カルト君の攻撃は回避不可能だ。

だがア、カルト君はオレの目を見つめるだけで、密着しているオレを怒りはしねエ。あれエ？ おかしいなア。どオしたんだ、カルト君。なんか、いつもと様子が違うなア。予想した反応が無いと不安になるぜエ。オレが寝ている間に、なんか有ったのか？

「アルカ」

ン？ なんだア、”カルト君”。どオしたんだ？ オレなら見ての通り、目の前にいるぜエ。もしかしてコレって、オレの行動待ちの状態なんじゃねエか？ いや、落ち着けよ、オレエ。そんな急展開になるようなフラグを建てた覚えは・・・まア、無いわけじゃねエけどよ。

いやいや、ねエよ。カルト君が自分の意思で、オレのベッドに入るなんて有りえねエ。

これには、きつと深い理由が有るはずだ。だから静まれエ。オレのバーニングハート！

女の子の気持ちを勘違いすると恥を掻くって、どこぞの黒魔道士も言ってたしなア。

そんな感じで欲望を抑えていると、カルト君は起き上がって、子供部屋から出て行った。

どオでも良いけど、カルト君は女の子じゃなくて男の子だったなア。

危なかつたぜエ。

それにしても結局なんで、カルト君に抱き締められた状態で、オレは眠ってたんだア？

アー、分カンネ。誰かに聞いた方が早エ。ヘーイ、その執事サーン。カモーン。

オレとカルト君は、どオやって家に帰って、なんで2人一つのベッドで寝てたんだ？

もしかして意識不明の重体になって、数ヶ月ほど寝過ごしてたり、してねエよなア。

え？ 屋敷で仕事をしていたら、オレを背負ったカルト君が帰って来た？ そうかア。

他の仕事場の事なんて分かんねエよなア。でも、各所を回って話を聞くのは面倒だなア。

執事のマトメ役に聞いた方が、もっと早エか。でも、きつと執事用の住居にいるんだろオ？

無駄に緊張させそうだし、執事達の空間に踏み込むのは気が進めなア。あと面倒だ。

まア、電話で良いか。えーと電話・・・この屋敷の電話って、何所に置いてあつたっけ？

家で電話を取った事ねエから忘れちまつたぜエ。えーと、執事さん。電話って・・・コレ？

『移動手段については分かりませんが、

本日の朝10時頃にカルト様がアルカ様と共に、正門より御帰りになられました。

御2人は浴場にて1時間ほど入浴され、12時頃に子供部屋へ戻り、就寝されました』

うん？ うん・・・え？ 天空闘技場辺りから、ずっとオレは気絶したままだったのか？

いや、問題はソコじゃねエ。その後だ。浴場でオレとカルト君が一緒に入浴した？

マジで？ 全然オレの記憶にねエンだけど。冗談じゃねエの？ マジで言ってるのか。

ああ、神は死んだ。

なんてこった。カルト君のサービスを、オレは気絶したまま受けちまったってエのか。

一生に一度の超レアなチャンスを・・・！ なんとる失態・・・！

！ 万死に値する・・・！ どうしたこうなった！ びっくりするほどユートピアだったのにイ！

おっと、オレの奇行を見た執事が退いてるなあ。ふう・・・落ち着け、K O O Lになるんだ。

なあに、オレの叫び声なんて、ゾルディック家では日常と同化している程度の物音だ。

それに屋敷は広いし、壁は石造りで厚イ。だから、他の連中には聞こえてねエだろオ。

それにしても、”入浴”に”添い寝”か。1時間の入浴なんて新記録なんじゃねエか？

いつもオレはシャワーだからな。　　いったい風呂の中で、オレとカルト君は何してたんだ？
気になるぜエ。　　でも、カルト君に直接聞いても、恥ずかしいから教えてくれねエよなア。

そんな特大の地雷を踏むほどオレは不用意じゃねエし、何があつたのかは予想できる。

きつと、脱出に成功したものの気絶したオレは、家へ帰るまでに雨か何かで汚れたんだ。

そんなオレを哀れに思った弟君が、脱出成功の褒美として風呂に入れてくれたんだろオ。

さアて、謎も解けたし、両親へ挨拶に行くかア。　　自動反射の条件を知りてエからな。

兄貴は弾いて、双子の弟君は弾かなかったんだよなア。　　通過条件は好意の程度か。

それとも念に目覚める前の接触回数に左右されるのか。　　もしくは遺伝子的な物なのか。

まずは父親へ挨拶しに行くかア。　　タイミング良く、家に帰って居ると良いんだがなア。

なア、執事さん。　　父さんは居ンのか？　　居る？　　そうかア。　　自分の部屋に居ンのかア。

そんじゃア、ちょっと張り切っちゃオかなア。　　この扉の奥だな。
よオし、扉に手を付けて。

せーの

会いたかったよオオオオオオ！　　父さアアアアアん！　　オレを抱き締めてエエエエエエ！

扉を開けて父親らしき物が目に映った瞬間に、大気の圧力と、重力を操作して突撃だア。
ソファ―に座る父親との距離が長いがア、距離が長エほど加速できるから、まアいいか。

だがア、抱き締めたのはソファ―だった。抱き締めたつて言うか、弾き飛ばしたんだがア。

まア、ソファ―は放つて置いても構わねエ。それよりも、父親の姿が・・・消えた・・・!?

いったい何所に・・・! まさか・・・部屋の外へ!? だがア、部屋の扉は一つだけ・・・!

「こつちだ」

声が後ろから! やはり、オレのスキンシップを大人気なく避けて、回り込んでいたんだ!

方法は分からねエ。だがア、1秒にも満たない間に移動したんだ。

オレの背後まで!

なんて大人気ねエンだ。半年ぶりの家族の再会なンだぜ? ここは受けるべきだろオ。

・・・ふう、ピトーこつちは疲れるなア。あんまり遊ぶと怒られるから、この辺で止めとこオ。

ン? なんか足に触れたな? あア、ペットの犬か。そオいえば、そんなのも居たなア。

”自動反射”に弾かれたのか? 牙が曲がって、血が出てやがる。

悪イ悪イ。キハハ。

そオそオ、天空闘技場の200階に行くまでに帰って来ちゃったンだけど、どオなるンだ?

200階に行くまで帰って来るなって言ってたよなア。　また行かなくちゃアならねエの？

え？　しばらくは家に居ても良い？　そおかア。　まア、あっちで一騒動あつたからなア。

じゃア、オレとカルト君は試合放棄扱いか。　そのままだと闘士登録は取消されるよなア。

連続試合放棄で悪質な参加者と思われる前に、天空闘技場へ連絡をしなくちゃならねエ。

放置したままだと、二度と天空闘技場に参加できなくなっちゃうかも知れねエからなア。

200階で念能力者と戦いたかつたんだがア、しばらく出場できないとなると登り直しだな。

最後に戦ったバイキンマンは力の差が有り過ぎたから、オレの攻撃が入ってねエし。

父親や長男のイルミ君も念能力者だけど、欲しいのは個体別のオーラ情報だからなア。

そおいや、オレとカルト君がホテルでバイキンマンに襲撃されてから、何日過ぎてるんだ？

え？　まだ半日も過ぎてない？　ハハハ、またまた御冗談を。　その顔で冗談なんて・・・。

いや、何でもねエ。　オレは何も言っただけ。　空耳なんじゃねエの？　うん、きつと、そう。

それよりも、逃げ出してから半日ねエ。　まさか、1日も過ぎてねエとは思わなかったぜエ。

さつき執事から聞いた話によると、カルト君がオレを背負って帰って来たのは朝10時だ。

バイキンマンに襲われてから間を置かずに、ゾルディック家へ着いたってエことになる。

ゾルディック家と天空闘技場は同じ大陸にある。　だがア、歩いて行ける距離にはねエ。

1時間以内に移動するなんて、この世界で主な航空機である飛行船でも無理だろオ。

うーん。　移動手段は念能力だろオな。　カルト君か？　でも、弟君は念能力者じゃねエ。

ン？　あれ？　どオしたンだア、父さん。　そんなに怖い顔して。

いや、顔は元からか。

ああ、犬を傷付けた事を怒ってンの？　だつてさア。　噛み付いた

犬の方が悪いだろ？

え？　自分の力を制御できるようになれ？　ガーン。　”自動反射

”の性質がバレーテラ。

だがア、自動でダメージを防いでくれる”自動反射”は、オレに欠かせねエ能力なんだぜ？

身を守るためにオーラを配分する計算をしなくて良い分、攻撃を全力で行えるからなア。

攻撃が当たると勝手にオーラが消費される欠点もあるがア、避け続けければ問題ねエ。

おオ、父親の手がオレの頭を撫で・・・いや、掴んでいやがる。

ああ、こりゃヤベエ。

調子に乗っちゃってスンマセーン。　反省シテマース。　手に力を入れるのは止めてエ。

ダメ？　ダメかア。　そうかア。　少しずつオーラが削られて行くぜエ。　あばばばばばば。

・・・あれ？ 目に映る景色が変わってねエなア。 オーラが尽きて気絶・・・してねエのか。
なんてエ寸止めだ。 圧倒的、寸止め・・・！ 太陽の光を浴びただけで気絶する・・・！
滑って転んだり、誰かと打ち当たっただけでも気絶する・・・！
ナンという生殺し・・・！

そして、”自動反射”は血の繋がった父親相手でも発動するらしい。
なるほどなア。

そんじゃ父さん。 オレ、次は母さんで実験・・・じゃなくて、半年ぶりに会いに行くぜエ。

えーと・・・今の所、カルト君は通過して、兄貴もといキルア君と父親の2人は弾いたのか。

血肉による判定ならば、父親はダメでも、産み親である母親は通過できるかも知れねエ。

いや、できても困るンだけだよオ。 カルト君は兎も角、弱点を突かれるのは困るからなア。

まア、通過条件が肉体であれ精神であれ、最高でも2人に減ったのは良い事だよなア。

「アルカじゃん。 もう戻って来たのかよ」

おオ、兄貴じゃん。 いや、戻って来たって言うても、200階へ上がったわけじゃねエよ。

子供を狙う変質者に襲われたンだ。 それで、200階へ上がる前に帰って来たンだ。

え？ 犯人はオレ？ オレは変質者じゃねエよ。 興味が湧くのはカルト君だけだ。

あア・・・やっぱりカルト君と反応が違うなア。 ” 兄貴の4倍も早く、200階へ上がった”。

つて弟君に言ったら機嫌が悪くなるけど、兄貴に言ったら、逆に機嫌が良くなりやがった。

才能に期待されるのが嫌だからだろオナ。 原作通り、反逆の芽は育っているわけだ。

そオいえば、兄貴とは手首を折って以来だなア。 そんなで折れた手首は、どオなつたんだ？

オレとカルト君が天空闘技場へ行ってから、半年すぎてんだっけ。

もオ治ってるよなア？

もし、異常や違和感があるンなら、今の内に文句は言ってくれよ。

後じゃ聞かねエから。

その代わりに、後になって手首の件で文句を言ったり、特に顔面や脇腹を刺すのは無しな。

そんな事しないって？ そオだと良いんだがなア。 兄貴、本当に怒ってねエのか？

え？ 怒らない代わりに賠償金を払えって？ 良いぜエ。 その方が分かり易いからなア。

そんで、いくらだ？ 10万ジエニー？ おーけー。 兄貴の口座に、後で振り込むぜエ。

てつきり100万くらい強請られると思ってたんだがア、兄貴が良心的で助かったぜエ。

え？ 冗談なの？ 賠償金なんて、いらねエ？ そうかア。 やっぱ兄貴は良い人だなア。

そんなンで外に出て、大丈夫だったのかって？ 大丈夫だって。

誰にも騙されてねエよ。

泊まっていたホテルに掛かって来た勧誘の電話は、フロントで全部拒否してたからなア。

直接オレに話し掛けようと、待合室の前で待っていた奴等は、無視したから問題ねエ。

「でも、これアルカだろ？」

これってテレビか？ テレビにオレが映ってんのか？ あア、ホテルで襲われたからなア。

いや、待てよ。 その程度でニュースになって、オレの顔写真と名前まで載ンのか？

え？ 違う？ 殺人事件のニュース？ もしかしてボドロ口爺さん、死んじやつたのかア。

『人気のドラマ”ボン太くん”で有名になった着グルミ職人のグルミさんが、

本日の午前12時頃に、天空闘技場の通路にて、重傷を負った状態で発見され、

運び込まれた病院で、午後2時頃に死亡しました』

『その2時間ほど前には、

”ボン太くん”の広報活動を行っていたアルカさんが泊まっていた宿の部屋が壊され、

同じ部屋に泊まっていた紳士のボドロさんが重傷を負った状態で発見されました。

ボドロさんは、運び込まれた病院で治療を受け、今も意識不明の重体です』

『アルカさんは、同じ部屋に泊まっていたオンドウルさんと共に行

方不明で、

治安組織は、2人が詳しい事情を知っているものと見て、行方を捜しています

また、アルカさんは暗殺一家として有名なゾルディックの一員であるという情報が……』

オレだな。素性までバレテラ。っていうかオンドウルってエのが、カルト君の偽名か。

ソンでもって、ジャムおじさんは死んじゃったのか。ツケを返し損ねちまったなア。

ジャムおじさんに騙されていたわけじゃねエと思うんだがア……思うんだけど……思うよ？

いや、やっぱり騙されてねエ。オレが金を払い、相手から新しい体を貰う関係だったんだ。

どっちかって言うと騙したのは、代金を払い損ねたオレだな。それ以外の事は関係ねエ。

それにしてもオレって、けっこう有名になってたんだなア。名前バレするくらいの勢いで。

原作前 ソルディック家（後書き）

- ” そんなこたア無かったぜ！”
- 元ネタ『ソードマスターヤマト』ヤマト
- ” 女の子の気持ちを勘違いすると恥を搔くつて”
- 元ネタ『FF10』ルールー
- ” アー、分カンネ”
- 元ネタ『初音ミク』弱音ハク
- ” なんとたる失態・・・！ 万死に値する・・・！”
- 元ネタ『機動戦士ガンダム00』ティエリア・アーデ
- ” どうしてこうなった！”
- 元ネタ『2ちゃんねる』アスキーアート
- ” びっくりするほどユートピア！”
- 元ネタ『2ちゃんねる』アスキーアート
- ” KOOLになるんだ”
- 元ネタ『ひぐらしのなく頃に』前原圭一
- ” 父親の姿が・・・消えた・・・！？”
- 元ネタ『BLEACH』黒崎一護
- ” 八八八、またまたご冗談を”
- 元ネタ『プリンセスチュチュ』猫先生
- ” スンマセーン”
- 元ネタ『（アニメ）とある魔術の禁書目録』前方のヴェント
- ” オンドウル”
- 元ネタ『仮面ライダー剣』オンドウル語

並列過程のパライノイア（前書き）

【あらすじ】

天空闘技場から帰ってきたアルカは、

着グルミ職人のジャムおじさんが死んだ事と、

自分の本名と顔が広く知られていた事を知りました。

並列過程のパラノイア

シルバ・ゾルディック

カルトが兄を殺したと執事から報告があっても、俺の感情が揺れ動くことはなかった。

だからと言って、ゾルディック家の一員が死んだ事を、小事と思っているわけではない。

その損失は大きく、残る3人の子供達に広がった影響は、大きな問題として残るだろう。

そのため、影響を抑える事ができる年齢になるまで、キルアの記憶を封じることにした。

暗示を掛けて忘れさせる方法もある。だが、暗示とは記憶を思い出させない方法だ。

暗示を破る訓練を受けているキルアでは、予定している年齢まで抑え切れないだろう。

なので長男であるイルミの力を使い、一時的にキルアの記憶から”無かった”ことにする。

記憶を消すわけではない。キルアが思い出せないように、一時的に切り離すだけだ。

行動を制限するための仕掛けとなる道具を、タイミング良く、別の理由で作っていた。

しかし、暗示よりも長続きするとはいえ、道具を使う方法が絶対安全という訳ではない。

キルアが急激に成長するような事があれば、予定よりも早く、仕掛けは外れるだろう。

だからと言って、キルアを家に閉じ込めるのは、キルアの精神衛生上いいとは言えない。

狂ってしまうだろう。それが力となる場合もあるが、キルアには必要のないものだ。

家に閉じ込めれば、様々な物に対する基準が固定され、融通が利かなくなってしまう。

キルアに必要なのは狂戦士としての素質ではなく、命令に従う殺人人形としての素質だ。

仕掛けを施すイルミに対しては、キルアと同じように記憶を封じるわけにはいかない。

カルトに対して悪意を抱かないように、大事が起こる前に調整する必要があるだろう。

兄が死んだ原因は、カルトでもなく兄でもなく、別の物にあると教えなければならぬ。

最後に兄を殺した末っ子のカルトだ。殺害の原因となった物は、

カルトの”能力”だった。

その”能力”を封じる事は不可能だろう。だが、カルトごと”能力”

を封じても通用しない。

カルトが”能力”と共に在る限り、脱出は容易であり、”能力”を切り離す事もできない。

あの力を制御できるのはカルトだけだ。そのカルトでさえ、下手をすれば殺されてしまう。

独立しているのではなく、カルトの”能力”の一部として存在しているだけマシだったのか。

いや、”能力”が独立しているのならば外部から隔離して、力のみを封じることも出来た。

結局、”能力”に対する対策は、保有しているカルトが眠り、一晩過ぎると解決していた。

”能力”には安全装置が組み込まれ、カルトが望まない限り、他人の願いは聞こえない。

その代わり”能力”が別の意識を持ち、好き勝手に行動し始めたが、
・・まあ、良いだろう。

俺の言うことも少しは聞かし、むしろ前よりも”能力”が扱いやすくなった事を喜ぶべきか。

他人の願いを叶えると、代償を支払うまで制御不可能になるという問題も残っているが。

これはカルトの純粋な能力ではなく、”能力”に外からバグを挟んだような物だからだろう。

この事で”能力”に対する扱いが難しくなった。カルトのペットという扱いは変わらない。

だが、その事を”能力”は知らず、ゾルディックの一員であるかのように振舞っている。

”能力”の元となった体は確かにゾルディックだ。だが、今では全くの別物になっている。

そもそも生物ではない。事情を知らない者から見れば、人の皮を被った化物だ。

ならば、生物ではないという真実を、ペットという扱いを、”能力”に教えるべきか？

だが、”能力”に芽生えた意識が死に、再び制御不可能になってしまっても知れない。

それは惜しい。願いを叶えた後に代償を求められるもの、おそ

らく無制限の力だ。

願いを叶えて貰った本人が代償を払う必要は無いため、他人を生贄に捧げればいい。

例え”能力”が死んでも問題はない。 本体が生きている限り、能力は不滅だからな。

”能力”が自分の正体に気付かないように、”能力”が言うことに話を合わせるか。

いつかバレるだろうが、キルアへの処置と同じだ。 ”能力”が成長することに期待する。

真を知り、自身の根底を覆されても耐え切れるように、ゾルディックの一員として育てる。

だが忘れてはならない。

アレは人ではない。 家族だと思っではいけない。

アレは別の何処かから来た”何か”だ。

それから2年すぎて、カルトが5歳になった頃のことだ。 あの”能力”に変化があった。

能力であるはずの”能力”が念能力に目覚め、今までとは全く別の力を身に付けた。

そして、その力でキルアを傷付け、”能力”を止めようとしたキキヨウの骨を押し折った。

どうやら触れた物を弾く力らしいが・・・その程度の力で、キキヨウの骨を押し折れるのか？

キキヨウが加えた力を弾き返したとすると、それ以上、前へ進めなくなる程度の力だ。

だが、その力はキキヨウの骨を押し折った。 もっと別の能力だと考えるべきだろう。

問題なのは、2年前に芽生えた意識が、自分の意思で力を使えるようになってきている事だ。

いずれは願いを叶える力を自身のみで使い、その代償を他人に押し付けるかもしれない。

あらゆる願いを叶える力と、相手を即死させる力だ。力は有用だが、両刃の剣となる。

暗殺にも使える力だ。まさか、”おねだり”を断っただけで殺されるとは思わないだろう。

だが、”能力”に対して表では家族らしく接しても、裏ではカルトのペットと認識している。

今更、”能力”をペットから格上げした所で、家族に染み付いた感情は変わる物ではない。

カルトの制御下にある間はいい。だが、いつか”能力”は制御を打ち破るかも知れない。

そうなれば、植え付けられた好意は消えて、悪意に変わり、アレは飼い主を噛むだろう。

”能力”が己の存在を掛けて戦いを挑めば、ゾルディックは誰一人生き残る事はできない。

せめてカルトが兄を殺していなければ、不満・不信・疑惑と言った感情は生まれなかった。

だが、もう遅いようだ。その種は残された者達の心に、ズッシリと根を下ろしてしまった。

そんな”能力”に対する感情のベクトルを変えようと試みても、策は一つ残らず失敗した。

そしてカルトの”能力”がキルアを傷付けた翌日に、カルトを天空

闘技場へ送った。

提案したのは”能力”に腕を折られたキキヨウだ。　同じ事を長男のイルミも提案した。
キルアから離すためと、天空闘技場で戦わせ、”能力”の手に入れた力を知るためらしい。

提案されたと言っても、採用するのか否かは俺が決める。　そして・
・俺は採用した。

このままでは、家族の間にある溝は深まり、2年前と同じ事が起こってしまうからだ。

次に死ぬのはカルトか、それともキキヨウやイルミか、あるいは親父や俺かも知れない。

思えば、もっと疑うべきだった。
誰よりも、己を疑うべきだった。

天空闘技場へ送ったカルトは、”能力”よりも遅れて、少しずつ階を上がっていた。

それは予想よりも遅い。　監視している執事見習いによると、手加減しているようだ。

これは金を稼ぐためか。　貯金を見てニヤニヤしている所を見てしまったと報告にあった。

なるほど。　5歳の子供が貯金を見てニヤニヤしている所を見て、ショックを受けたのか。

見習いには刺激が強かったのかも知れないな。　だが、その程度で執事は勤まらない。

カルトの目的を察する事はできたが、意図して引き出した結果ではないから、減点だ。

”能力”の方は、やけに頑丈な人体着用又イグルミを着て、試合に出ているらしい。

大きな丸い耳、キリツとした眉毛、円らな瞳が特長だという・・・
どうして、こうなった？

いや、報告によると自分の力を封じるためか。　おそらく制御できていないのだろう。

だからと言って・・・これは・・・どうなんだ？　もっと違和感のない物は無かったのか？

そもそも何所から持って来た？　こんな無駄に頑丈な着グルミを、家で見た事はない。

・・・あちらで手に入れた物か。　タイミングが良過ぎる。　別の奴に少し調べさせるか。

そして分かったのは、”能力”に着グルミを与えた人物が、着グルミ職人ということだった。

ある地域で放送されている、”ボン太くん”というドラマの関連商品を手掛けているようだ。

それとは別に趣味で作った”1?シリーズ”を”能力”に着せ、強度を試しているらしい。

1トンの着グルミを着て、自ら試合に出ようとしていたのだから、それなりに本気のようなのだ。

しかし、そこへタイミング良く現れた”能力”が、職人の代わりに試合へ出ると言った。

そして職人との熱い・・・熱い？　交渉の末、”能力”は力を隠す手段を手に入れたらしい。

しかし、職人についての情報は、それだけでは無い。　こいつは裏で動き回っている。

”ボン太くん”の原案を大金と共に放送局へ提案し、放送させたのは着グルミ職人だった。それだけではなく、漫画家や小説家を雇い、雑誌で”ボン太くん”を連載させている。

しかし、わざわざ相手に金を出し、協力して貰っている立場の職人に戻る金は少ない。

こいつの目的は何だ？ 行動から察するに、”ボン太くん”を顕示することが目的なのか？

そうだとすると不味いな。着グルミの強度を確かめるため、では無いのかも知れない。

”能力”が巻き込まれた場合、その情報が表に出回るだろう。ま

あ、それは構わない。

写真や名前は隠そうと思ってもバレるものだ。消せば、それが本物だと示してしまう。

問題になるのは、それがカルトに及んだ時だ。

カルトの”能力”

と知られてはならない。

これはカルトに注意するよう伝える。しかし、念能力者との接触には気付けないだろう。

カルトはオーラが使えないからな。念能力者に対しては、執事見習いに用心させる。

その代わり”能力”に割り当てる労力を減らす事になるが、力の調査ができれば十分だ。

そういえば、外に対して”能力”の食事を擬装するために、酸素を詰めたパックを送った。

執事見習いの報告によると、毒入り栄養パックと称して、”能力”に飲ませているらしい。

そもそも”能力”に内臓は詰まっていけないのだが・・・なにも食べないのは不自然だからな。

それから数カ月後、対戦相手の念能力者によって、試合中に”能力”が一度壊された。

試合開始直後の一撃を受けて、着ていた着グルミごと上半身が千切れ飛んだそうさ。

そして、カルトが眠ると共に”能力”は解除され、起きると共に”能力”は具現化された。

一度壊れたとは気付いていなかったらしい。いつも通り、元気に試合へ行つたそうさ。

前日に死んだはずの闘士が現れた時、受付担当者は目を疑つただろう。迷惑な奴だ。

幸いだったのは、いつもより早く”能力”が来たおかげで、試合構成を修正できたことが。

それが最後の報告だった。ホテルの廊下で、執事見習いは何者かに殺された。

そして、カルトは念能力者の襲撃を受ける。相手は前日に”能力”を一度殺した闘士だ。

それに対して、カルトは”能力”を再具現化し、その力を使って家の近くへ瞬間移動した。

同じ日に着グルミ職人も殺され、”能力”とは異なる着グルミを犯人は着ていた。

内側か外側か、仲間割れか暗殺か。カルトが狙われたのだから、調べる必要がある。

そして分かったのは、とある宗教団体の争いに、カルトが巻き込まれたという事だった。

一つ訂正することがあった。 ”能力” を壊した奴と、カルトを狙った犯人は同じではない。

カルトは外見から判断したようだが、着グルミの中には別の奴が入っていたようだ。

まあ、どちらも同じ宗教団体に属しているのだから、どちらが犯人でも大きな違いは無い。

着グルミ職人は教義に背いたため、その宗教団体に属する念能力者に殺された。

”能力” を一度壊した闘士と、カルトを狙った犯人の内、一方が着グルミ職人を殺した。

カルトは狙われたのではなく、着グルミ職人の関係者として、ついでに襲われた。

だが、その宗教団体が、よく分からない。 最も知りたい部分の情報には極秘とされていた。

ちなみに、この極秘指定を行うには、一国の大統領クラスの権力と莫大な金が必要だ。

本気でやれば暴けない事はないが、手間が掛かる。 だが、もう少し踏み込んでみるか。

そして分かったのは、世界一ヤバいコスプレ集団が、教徒になっているという事だった。

だから犯人は着グルミを着ていたのか？ まさか、宗教団体の教祖はネテロ会長か？

とりあえず、宗教団体の調査は打ち切るしかない。 この件は親父に任せた方が良いな。

とある宗教団体

子「他の原作知識で商売をやってた犯人は片付けたよ」

丑「だが、手遅れだった。アレを見て、自分も売れると勘違いする者は増える」

卯「わざわざ身を削ってまで買収して、ご苦労なことね」

申「わざと片付けるのを遅らせたんだろ・・・ネズミ」

辰「その程度の事を言うために呼び出したのではあるまい」

子「うん。じつは・・・」

戌「・・・」

午「・・・」

未「・・・」

寅「間が長い。早く言え」

子「アルカ・ゾルディックは存在していない」

巳「さ、帰りましょ」

酉「そんな事だろうと思った」

丑「やれやれだ・・・」

子「あれ？ 主人公を治す人がいなくなっただよ？ 大変でしょ？」

丑「致命的ってほどじゃねーな」

寅「同感だ。世界中を探せば代わりはいるだろう」

午「こんな用で呼び出すとは・・・」

申「ジンみてーにバツクレるんだっただぜ」

子「ちえー」

並列過程のパラノイア（後書き）

” 並列過程のパラノイア ”

元ネタ 『(アニメ) シュタインズゲート』 3話タイトル

” 今思えば、もっと疑うべきだった。 ”

元ネタ 『メタルギアソリッド2』 ソリッド・スネーク

” ……どうして、こうなった？ ”

元ネタ 『2ちゃんねる』 どうしてこうなった

” ちなみに、この極秘指定を行うには ”

元ネタ 『ハンター×ハンター』 クラピカ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1948m/>

【転生】アルカ・ゾルディックのブラザーコンプレックス

2011年11月12日18時45分発行